陳情第 1 号

養生所/(長崎)医学校等遺跡の保存・保護・整備・公開に関する陳情書 XIX

(旧長崎市立佐古小学校地とその外周道路を中核として)

長崎奉行所西役所等遺跡群の調査・保存・活用・公開・整備に関する陳情書 X

(サン・パウロ教会等跡/長崎奉行所西役所跡/長崎県庁跡・大波止跡・築地跡等)

2021年(令和3年)2月22日 月曜日

長崎市議会議長　井上重久 様

議事調査課
令和
-3.2.22
収受
342

陳情人

〒852-8127
長崎県長崎市大手二丁目十七-四十六-一〇二

養生所を考える会 代表　池知和恭

連絡先 [redacted]

2021年(令和3年)2～3月 長崎県知事/長崎市長宛 要望書 長崎県議会議長/長崎市議会議長宛 陳情書

内 容

Ⅰ."遺跡についてⅩⅢ"(2021年(令和3年)2月18日 木曜日)

Ⅱ."遺跡についてⅩⅣ"(2021年(令和3年)2月19日 金曜日)

Ⅲ."遺跡についてⅩⅤ"(2021年(令和3年)2月20日 土曜日)

Ⅳ.『遺跡について 2021年2月』(2021年(令和3年)2月20日 土曜日)

Ⅴ.添付資料

養生所/(長崎)医学校等遺跡の保存・保護・整備・公開に関する陳情書 ⅩⅧ (旧長崎市立佐古小学校地とその外周道路を中核として)
長崎奉行所西役所等遺跡群の調査・保存・活用・公開・整備に関する陳情書 Ⅸ (サン・パウロ教会等跡/長崎奉行所西役所跡/長崎県庁跡・大波止跡・築地跡等)
2020年(令和2年)11月24日 火曜日 長崎市議会議長 井上重久 様／2020年(令和2年)12月2日 水曜日 長崎県議会議長 瀬川光之 様

養生所/(長崎)医学校等遺跡の保存・保護・整備・公開に関する要望書 Ⅷ (旧長崎市立佐古小学校地とその外周道路を中核として)
長崎奉行所西役所等遺跡群の調査・保存・活用・公開・整備に関する要望書 Ⅸ (サン・パウロ教会等跡/長崎奉行所西役所跡/長崎県庁跡・大波止跡・築地跡等)
2020年(令和2年)11月27日 金曜日
長崎県知事 中村法道 様　長崎県教育委員会 教育長 池松誠二 様　長崎県 企画部長 柿本敏晶 様　長崎県 地域振興部長 浦 真樹 様　長崎県 文化観光国際部長 中崎謙司 様　長崎県 土木部長 奥田秀樹 様　長崎県 環境部長 宮崎浩善 様　長崎県文化財保護審議会長 立平 進 様
長崎市長 田上富久 様　長崎市教育委員会 教育長 橋田慶信 様　長崎市教育委員会 教育総務部長 前田孝志 様　長崎市 企画財政部長 片岡研之 様　長崎市 文化観光部長 股張一男 様　長崎市 まちづくり部長 片江伸一郎 様　長崎市 土木部長 松浦文昭 様　長崎市 中央総合事務所長 大串昌之 様　長崎市 原爆被爆対策部長 中川正仁 様　長崎市 理材部長 小田 徹 様　長崎市 環境部長 宮崎忠彦 様　長崎市 秘書広報部長 原田宏子様　長崎市文化財審議会 下川達彌 様

第一部 長崎地域の遺跡、並びに、遺跡 (2020年(令和2年)11月 初出)

Ⅰ."遺跡についてⅫ"(2020年(令和2年)11月17日 火曜日)　Ⅱ.[角川武蔵野ミュージアム](2020年(令和2年)11月16日 月曜日)　Ⅲ.『遺跡に於ける遺跡に関する遺跡の空間としての彫琢』(2020年(令和2年)9月15日 火曜日)　Ⅳ.『遺跡に於ける遺跡に関する遺跡の空間としての彫琢』(資料編)(2020年(令和2年)9月15日 火曜日)　Ⅴ.『私達 人類、遺跡の本源的価値、遺跡の存在、機能、社会的共通資本』(2020年(令和2年)10月28日 水曜日)　Ⅵ.『私達 人類の世界の動向、国力、国土、遺跡、漁港、田園、牧場、森林』(2020年(令和2年)10月28日 水曜日)　Ⅶ.『株式会社 三菱総合研究所による県庁舎跡地整備基本構想検討報告書』(2020年(令和2年)10月28日 水曜日)　Ⅷ.『長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡の保存と活用への提案と要望 2020.10』(2020年(令和2年)10月28日 水曜日)　Ⅸ.『長崎核爆弾被爆遺跡群遺跡への提案と要望』(2020年(令和2年)10月28日 水曜日)　Ⅹ.『私達 人類の存在と行為の正当性』(2020年(令和2年)9月3日 木曜日)　ⅩⅠ.『文化財的概念の近代化、遺跡と遺構と遺物、私達 人類の現代の活動』(2020年(令和2年)9月19日 土曜日)　ⅩⅡ.『私達 現生人類の世界、日本地域、長崎地域、遺跡、文化財』(2020年(令和2年)9月30日 水曜日 改訂1版：2020年(令和2年)11月27日 金曜日)　ⅩⅢ.『書籍『長崎史の実像』2013年10月30日 著者:外山幹夫 より』(2020年(令和2年)9月30日 水曜日)　ⅩⅣ.『遺跡の遺跡たる事象、市民生活の日常と心、観光やリゾート、その他の開発等、都市長崎遺跡』(2020年(令和2年)10月7日 水曜日)　ⅩⅤ.『人類と遺跡 ー私達 人類の想像と知性よりー』(2020年(令和2年)10月15日 木曜日)　ⅩⅥ.『歴史上価値並びに学術上価値等、視覚、遺跡の実相、遺跡の保存と活用』(2020年(令和2年)10月28日 水曜日)

第二部 長崎地域と遺跡 (2020年(令和2年)9月 初出)

Ⅰ."遺跡についてⅪ"(2020年(令和元年)8月4日 火曜日)　Ⅱ.『長崎地域の遺跡と歴史と社会』(2020年(令和2年)8月4日 火曜日)　Ⅲ.『人類の世界と被爆人:ひばくびと:の世界』(2020年(令和2年)8月7日 金曜日)　Ⅳ.『遺跡の形態と長崎の核爆弾被爆の遺跡』(2020年(令和2年)8月9日 日曜日)　Ⅴ.『人類と人類の創造、並びに、記憶たる事象、遺跡、人類の存在』(2020年(令和2年)8月11日 火曜日)　Ⅵ.『人類の行為たる遺跡と歴史の活用』(2020年(令和2年)8月11日 火曜日)　Ⅶ.『私達 人類の文化財的事象の形態、在り方』(2020年(令和2年)8月16日 日曜日)　Ⅷ.『私達 人類の開発と遺跡』(2020年(令和2年)7月23日 木曜日)　Ⅸ.『私達 人類にとっての記憶並びに記録、又、人類の対する交感の体系』(2020年(令和2年)8月17日 月曜日)　Ⅹ.『2020年以降の長崎地域の都市計画』(2020年(令和2年)8月18日 火曜日)　Ⅺ.『私達 人類の恣意、そして遺跡』(2020年(令和2年)9月26日 水曜日)

第三部 長崎県文化財保存活用大綱策定へのパブリック・コメント (2020年(令和2年)9月 初出)

Ⅰ.『長崎県文化財保存活用大綱策定へのパブリック・コメント』(2020年(令和2年)7月31日 金曜日)　Ⅱ.『私達 人類のパラダイム・シフト』(2020年(令和2年)6月24日 水曜日)　Ⅲ.『遺跡に関する MEMORANDUM』(2020年(令和2年)7月4日 土曜日 改訂1:2020年(令和2年)8月4日 火曜日)　Ⅳ.『2020年(令和2年)2月25日以降の養生所/(長崎)医学校等遺跡』((2020年(令和2年)7月5日 日曜日)　Ⅴ.『長崎地域の近代現代の遺跡』(2020年(令和2年)7月9日 木曜日)　Ⅵ.『長崎地域の核爆弾被爆遺跡』(2020年(令和2年)7月24日 金曜日)

第四部 遺跡へ (2020年(令和2年)9月 初出)

Ⅰ.『展示と存在、概念と想念、情報と情景、取得と到達、読解と包摂、巡礼、観光、旅、遺跡』(2020年(令和2年)6月4日 木曜日)　Ⅱ.『「情報」と「情景」』(2020年(令和2年)6月4日 木曜日)
Ⅲ.『長崎地域に於ける高層建築とその他の開発について』(2020年(令和2年)6月10日 水曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭　改訂1版：2020年(令和2年)8月18日 火曜日)

第五部 原遺跡計画、並びに、否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成 (2020年(令和2年)6月 初出)

Ⅰ.原遺跡計画　Ⅱ.否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成　一.ラスコー洞窟　二.情報　三.考察、並びに、提案と要望

第六部 遺跡について (2020年(令和2年)2月 初出)

第七部 遺跡 (2019年(令和元年)12月 初出)

Ⅰ.遺跡　Ⅱ.遺跡と風土と文明、又、私達 人類の公共と私達 人類の選択、又人類の分断　Ⅲ.遺跡、その存在の性格と関連事象について　Ⅳ.遺跡 たる事象　Ⅴ.日本地域 について　Ⅵ.長崎地域とその遺跡 について　Ⅶ.私達 当会より、皆様への、提案と要望 について　Ⅷ.長崎地域の遺跡への提案と要望

第八部 長崎地域の特定の個別の遺跡群について (2019年(令和元年)12月 初出)

Ⅰ.長崎地域の浦上地区遺跡群について (※2020年(令和2年)2月 初出)　Ⅱ.長崎奉行所西役所等遺跡群の調査と活用について (※2020年(令和2年)6月 改訂)　Ⅲ.長崎地域の桜町地区遺跡群について (※2020年(令和2年)2月 初出)　Ⅳ.養生所/(長崎)医学校等遺跡("佐古の丘の地形"、"中核区域"、"運用区域"、"関連区域")について (※2020年(令和2年)6月 改訂)

Ⅴ.『長崎市歴史的風致維持向上計画』並びに『国土交通省長崎港松が枝埠頭岸壁2バース化』並びに『長崎県松が枝地区再開発構想 ～港湾整備と一体となったまちづくり～』について (※2020年(令和2年)6月 初出)

第九部 その他 関連する事象について (2019年(令和元年)12月 初出 ※2020年(令和2年)9月 追記 12.(長崎)医学校等正門東翼石垣等石垣群について を追記)

第十部 関連する資料 (2019年(令和元年)12月 初出 適宜 改訂)

Ⅰ.参考資料　1.『遺跡に関する提案と要望のお届けについて』 2020年(令和2年)3月11日 水曜日　長崎市 教育委員会 教育長 橋田慶信 様　長崎市 教育委員会 教育総務部長 前田孝志 様　長崎市 教育委員会 教育総務部 施設課長 西原政彦 様　長崎市 文化観光部長 股張一男 様　長崎市 文化観光部 文化財課長 大賀史郎 様　長崎市 企画財政部長 片岡研之 様　長崎市 企画財政部 都市経営室長 岩永 浩 様　長崎市 企画財政部 長崎創生推進室長 山田尚登 様　長崎市 企画財政部 大型事業推進室長 赤倉史明 様　長崎市 まちづくり部長 片江伸一郎 様　長崎市 土木部長 吉田安秀 様　長崎市 中央総合事務所長 大串昌之 様　長崎市 理材部長 小田 徹 様　長崎市 環境部長 宮崎忠彦 様　長崎市 原爆被爆対策部長 中川正仁 様　長崎市 秘書広報部長 原田宏子様 長崎市議会議長 佐藤正洋 様　長崎市 文化財審議会 会長 下川達彌 様　養生所を考える会 代表 池知和恭　(『(長崎)医学校等正門両翼石垣等石垣群 並びに、旧長崎市立佐古小学校北西門前扇型石段に関する提案と要望』 2020年(令和2年)3月11日 水曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭)

以上

"遺跡についてXⅢ"

『遺跡と私達人類の事象』

私達当会は、遺跡について、遺跡の、"行為、痕跡、記憶、生と死、自然の様式である連続と階調(グラデーション:gradation)並びに人工の様式である断裂と対比の両者の包摂、存在上の控えめの表象"、との要素は、私達人類の、芸術(アート:art)、学術(アカデミック:academic)、娯楽(エンターティメント:)、生活(ライフ:life)、信仰(フェイス:faith)、の何れとも多様な親和性を構成し得る、諸事象に対する、遺跡の真正性と完全性に於いて顕著に顕現する、接点(インターフェイス)としての必然的な機能である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、遺跡について、遺跡の真正性と完全性に豊かに包摂する、諸事象との本源的で多様な親和性を構成し得る必然的な接点(インターフェイス:interface)としての機能に、暗黙的明示的形式的に由来する、又、私達人類の事象が可変的であることにより永続的である可能性に由来する、根源的な諸活用の群を、広範に形成すること、を提案し要望します。

私達人類は、私達人類の活動の空間に於いて、この土地の遺跡が送り続けるメッセージを受けとめることが出来ているでしょうか? 遺跡は、人々のそして現代の私達の生と死の証です。

2021年(令和3年)2月18日 木曜日
養生所を考える会 代表 池知和恭

“遺跡についてXⅣ”

『私達人類の事象と遺跡 ～ 私達人類の危機』

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、古来、私達人類の交換と交易が私達人類に関係する様々な差異を契機とし、私達人類の世界の各地に小さな集団と、ユーラシア大陸の中央部に多様な事象を包摂する帝国と、ユーラシア大陸の周辺部に比較的小さな王国を構成する処、私達人類の西欧地域に於いて、私達人類相互の意図と駆け引きと力を私達人類の認める価値の根源とする重商主義を経由して、一方で、科学を認識しつつ、技術の革新を加速し始め、分業と量産への資本投下により他者に対する優位たる概念を形成する資本主義を形式化、ユーラシア大陸の東西の周辺部、英、仏の王国と日本地域で主権国家を形成し、仏は、フランス革命で国民国家を形式化、、又、フランスの国民公会は、フランス革命戦争で、国家総動員と平等な徴兵（即ち、国民皆兵）を実現、フランスは西欧地域で勝利、第一次世界大戦を経て、総力戦の概念を現実の事象とし、近代的な主権国民国家を出現した処、私達人類は、現代に至るまで、主権国民国家の形式を、自己と他者の二分法の概念を基盤とし、私達人類の個体と物資の動員への形式を社会的技術とする、私達人類の個人と集団の相互、地域間、国家間の抗争、私達人類の日常的な表象では競争、とその勝利の手段として、活用するのみである、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、例えば、私達人類の全ての個体の存在と行為の本源的必然的最終的な意義は、自己以外の他者と抗争して、勝利することなのか？と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、例えば、私達人類が、私達人類の個体と集団を、本源的に、私達人類の諸般の意図と目的と動員から解放し、私達人類の生命体としての生物上の私達人類種に共通する必然的な自由であると想定し得る、想像と創造、に委ね、以って、私達人類の個体と集団の相互の理解による、活動と幸福と平和、を体現すること、を提案し要望します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、例えば、宇宙と太陽系のエネルギー系に由来する地球の自然、私達人類の忘却と痕跡としての存在であることにより私達人類の意図を断絶した遺跡、私達人類の意図の表象である人工、の夫々の具象の観察と考究と思素と再発見、調査、保存、回復、活用、形成、人工の可変、関係、連続、循環、永続、継承、を促進し、以って、私達人類の社会的共通資本とし、私達人類の、活動と幸福と平和、に貢献すること、を提案し要望します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類に関する危機の解決について、私達人類が、既に、着手しているか、私達人類が、直ちに、着手しなければならない、喫緊の課題、である、と仮定します。

私達人類は、私達人類の活動の空間に於いて、この土地の遺跡が送り続けるメッセージを受けとめることが出来ているでしょうか？　遺跡は、人々のそして現代の私達の生と死の証です。

2021年（令和3年）2月19日 金曜日
養生所を考える会 代表 池知和恭

“遺跡についてＸＶ”

『遺跡と私達人類の関係性』

私達当会は、遺跡について、私達人類が、「これは遺跡だね、これはこれで、このままで、いいじゃないか」と端的に、そう思う、又は、そう思えるかが、遺跡と私達人類の関係性に於いて、最終的な規定を形成する、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、私達人類の人工を構成するに於いて、人工が、その私達人類の意図と私達人類とっての機能に由来して可変的である処、私達人類は、遺跡の形態と存在に於いて、遺跡を一度破壊すれば、本質的に、即ち、遺跡について、遺跡の具象としての回復は不可能である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、私達人類の人工に関する、私達人類の意図と私達人類にとっての機能に由来する可変性に於いて、遺跡に対し、“遺跡に直接的、間接的被害を及ぼすような意図的措置をとらないこと”、“一部でも損壊や滅失によって失われること”にならない、行為と措置を選択し、遺跡を、私達人類の後世の私達人類の個体の鑑賞と解釈に、永続的に委ねること、即ち、継承すること、その為の措置をとること、を提案し要望します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、私達人類の人工に関する可変性に於いて、遺跡を破壊し、損壊し、滅失することを回避し、之を、保存し、活用し、即ち、私達人類の日常の生活の中での機能を形成し獲得し、受容し、事象を継承する、文化、文明、エスニシティ、風土、私達人類の個体とその集団としての社会を形成すること、を提案し要望します。

私達人類は、私達人類の活動の空間に於いて、この土地の遺跡が送り続けるメッセージを受けとめることが出来ているでしょうか？　遺跡は、人々のそして現代の私達の生と死の証です。

2021年（令和3年）2月20日 土曜日
養生所を考える会 代表 池知和恭

Ⅳ.『遺跡について 2021年2月』 (2021年(令和3年)2月20日 土曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭)

〔情報〕
○ 2020年(令和2年)8月29日(土曜日) 日本経済新聞 第24面 【読書】

『戦後日本、記憶の力学』 福間 良明著 [戦争経験を語る作法の変遷]

(作品社・2700円) ふくま・よしあき 69年熊本市生まれ。立命館大教授。専攻は歴史社会学、メディア史。著書に『「戦争体験」の戦後史』など。

「戦争の記憶」ということがいわれて久しい。「戦後」を通じ、ずっと戦争経験の継承が図られてきたが、「戦後50年」あたりをさかいとして「戦争の記憶」といわれるようになってきた。背後には、経験を有しない世代が社会の多くを占めるようになり、戦争経験の語り方/伝え方が変わって来たということがある。 著者はこれまで多くの著作を通じ、メディアによる戦争の記憶の伝達の様相を考察してきたが、本書でも「空間」「文化」「社会」が作り出す力学に着目し、その観点から戦争体験の「継承」をめぐる論点を検証する。たとえば、原爆ドームが保存か否かの議論を経たのち、修復を加え、周囲も公園として整備して現在にいたることを記し、戦争にかかわる記憶の場がいかにつくられ、そこにはいかなる記憶の「ねじれ」があったかを考察する。メディア文化のなかの戦跡のありようと、戦跡自体がメディア化する事象にメスを入れ、本書では広島や長崎、沖縄から靖国神社や(特攻基地を有していた)知覧、あるいは『野火』『軍旗はためく下に』などの戦争映画までを対象として縦横に論じていく。 戦争体験は苛酷で切実な経験であり、みな「風化」を警戒するなか、その営みのなかに働く力学に着目し、戦争の記憶が形成される時空間の位相を分析していった。 しかし、著者は本書では、さらに一歩議論を進めている。あらためて戦争体験の「『継承』の欲望」、そのことがもたらす「継承という断絶」に目を向けるのである――「心地よい『継承』」が夢想され、「『継承』の営みや欲望のなかで、いかなる『忘却』が生み出されてきたのか」を問う。 戦争経験の語り方の作法が「記憶」とされるなか、現在ではさらにそれが展開し、あらたな状況に直面しているという認識である。単純な「継承」は単なる合言葉となり、語られた時期の時代背景が抜け落ちてしまう。本書はそのことを指摘するとともに、安易な「継承」の欲望をいさめる。著者の営みは、記憶の抗争の段階から、記憶を歴史とすること、すなわち戦争そのものの歴史化への動きにほかならない。記憶から歴史へ向けての踏み出しの自覚のもとに編まれた論集である。 《評》 歴史学者 成田 龍一

〔情報〕
○ 2020年(令和2年)8月29日(土曜日) 日本経済新聞 第25面 【読書】 《この一冊》

『文明が不幸をもたらす』 クリストファー・ライアン著 [進歩と発展と努力の果てに]

原題=Civilized to Death (鍛原多恵子訳、河出書房新社・2400円) ▼著者は米国の心理学者。CNNテレビ、タイム誌など様々なメディアに登場。邦訳書に『性の進化論』(共著)。

最近の新型コロナ禍の影響で、経済活動は滞り、思うように楽しむことも出来にくくなった。この機会に、私たちのこれまでの文明生活がなんだったのか、再考してみた人は多かったのではないだろうか? 今の私たちの科学技術文明は、本質的なところで何かがおかしい。それは、「進歩と発展」という概念であり、刻苦勉励して、明日を今日よりも良い世界にするべし、という理念だ。そして、それを測る指標がお金であること。経済も教育も倫理も、すべてがこの理念の上に築かれ、複雑で巨大なシステムを作っている。 しかし、そうやって、もっと速く、もっと多く、もっと楽に、ということをどこまで続けていけるのだろう?私たちは進歩を信じて追い続けているが、気づかないうちに多くの不幸を招いている。本書は、そういった問題提起である。 進歩と発展と努力がいいことだとは誰も疑わない。しかし、そういう理念を信じて邁進することで、私たちはどんな世界を作ってしまったのか? 環境破壊、格差、孤独、抑圧、画一化、貪欲、さまざまな病気。本書で挙げられている、文明が生み出した不幸の数々は、そう言われれば誰もが納得するに違いない。 しかし、文明がもたらした不幸について、より大きな枠組みの中で考えるためには、文明以前の社会、つまり、狩猟採集社会がどんなものかを知らねばならない。それは、私たちホモ・サピエンスの全員が、つい1万年前まで続けてきた暮らしだ。 自然の恵みをそのままに受け取り、貯蓄は出来ず、定住もせず、独立して自由な個人どうしが、平等な関係の中で協力し合う。遊びは仕事とつながり、誰も命令も指図もしない。 もちろん、狩猟採集社会はエデンの園ではなかった。今の私たちとは異なる不幸があった。しかし、この文明以前の社会で私たちがどのように暮らしていたのか、それを知ることで、現代の文明による不幸を治すための貴重な示唆が得られるに違いない。それはその通りだろう。 私は、著者の観点に同感である。それでも、この理念(妄想?)がここまで浸透した社会をどうやって変えていけるのかは難しい。ともかくも、一人でも多くの人が本書を手に取り、今の文明に内在する根源的な問題に気づいて欲しいと思う。 《評》 総合研究大学院大学学長 長谷川 眞理子

◇『遺跡と歴史と私達人類の芸術、バーチャル(仮想)からリアル(現実)への回復、制度、“生と死”、親和性』
2020年(令和2年)11月25日 水曜日

(1) 情報

○ 2020年(令和2年)11月25日(水曜日) 長崎新聞 第14面 【文化】

『長崎歴文博15周年シンポ』 『アクティブに果敢な挑戦を 「バーチャル総合博物館」提案も』

長崎市立山1丁目の長崎歴史文化博物館(水嶋英治館長)で14日開かれた開館15周年記念講演・シンポジウム。2005年の開館から15年となった同館、県美術館(小坂智子館長)、九州国立博物館(島谷弘幸館長)の館長や、長崎歴文博と県美術館の開館に県職員として関わった藤泉長崎自動車監査役は登壇。講演・パネル討議で、各館の現状や新型コロナウイルス禍を踏まえた館の在り方などについて考えた。その内容を詳報する。

パネル討議では、水嶋館長を進行役に、美術館や博物館の運営や今後の展望などについて意見を交わした。要約して紹介する。
水嶋氏:国、県の文化政策、文化行政における博物館、美術館の位置付けをどのように捉えているか。
島谷氏:国が非常に関心を持って美術館・博物館に目を向けているというのが現状。昨年、国の文化審議会の中に博物館部会ができた。国が文化行政を観光と併せてやっていこうという施策の一つの柱であると考えている。プレッシャーもあるが、好機を生かして前に進んでいきたい。
小坂氏:県の総合計画チャレンジ2020に「交流を生み出し活力を取り込む」という戦略がある。県美術館はその拠点施設として、県の文化振興や交流人口の拡大に寄与するという役割がある。文化政策、文化行政に関わることを、県と意見交換しながら進めていくことが大事かなと思う。
水嶋氏:県美術館・長崎歴文博の当初の構想、計画に対して、開館後の15年間をどのように評価しているか。
藤氏:細かいデータを基にしているわけではないが、経済をはじめ地域への波及効果もかなりあり、全国の地方の美術館・博物館の中では、大変注目されている両館。館運営のマンネリズムやガラパゴス化の可能性もあるので、常に自己反省しながら政策に反映することが大事。企画展、広報など近年は少しおとなしくなってきたなという感じがしている。もっとアクティブに果敢な挑戦がってもいい。
水嶋氏:資料収集、コレクション形成について。
小坂氏:収蔵資料があって初めて研究、公開、展示に連環していく。歩みを止めることなく、美術館のよって立つ所としてコレクションを継続的につくり上げていくことがとても大事。
島谷氏:いくらでも理想は言えるが、あくまで「設置者」と「使命」、その中でコレクションを増やしていかなければならない。新鮮なかたちで新たな資料を発掘し、それを利用者に提供する。県民国民を超えて、グローバルな世界の宝であるという認識でやっていかなければならない。
水嶋氏:美術館・博物館の未来とは。
藤氏:日本はデジタル化が一段と進む。新しい政策として、県内の博物館とか美術館、水族館、動物園などを横断的にまとめあげた長崎ならではの「バーチャル総合博物館」というようなものができるのではないか。県全体で全国、世界に売り込めるし、各施設も注目され生き生きとしてくる。これまで県民市民に親しまれてきた両館が、さらににぎわい、チャレンジする美術館・博物館になっていくことを県民の一人として強く求めていきたい。

水嶋英治長崎歴史文化博物館館長 ≪県域全体の主導的役割≫
長崎歴文博が立つこの場所は、立山奉行所が存在していた類まれな場所。犯科帳など8万1千点に及ぶ歴史資料を所蔵していることを考えれば職員一同、責任とその重さを感じている。 また過去から伝えられた文化財の保存と活用を国、関係市町村、地域住民が一体となって推進していくという意味では、当館が本県の拠点館としての責任を果たしていかなければならないだろう。単館思考に固執することなく県域全体の主導的役割を担う責任も大きい。 長崎に存在する博物館は、地方博物館としての顔と、日本の中で独自の色彩を放つ個性豊かな博物館という二つの顔を持つ。後者は国際的な顔といっても過言ではない。長い国際交流の歴史の中で長崎が発展してきたことを考えれば、博物館としても国際交流に貢献していかなければ、と強く感じる。今後はオランダはもとより、ポルトガル、イタリア、中国などとの交流を充実していきたい。 開館当初、前館長は「進化する博物館」を目指した。新たな博物館像として歴史・文化の重み付け、価値付けをしていきたい。奉行所についても新たな重み付けをして、積極的にプロモーションしていきたい。

島谷弘幸九州国立博物館館長 ≪各県とコラボし活性化≫
九州に博物館を造るという鎮西博物館構想は明治の頃からあったが、なかなか実現には至らなかった。福岡の大宰府という土地が古代の日本において京都に次ぐ大きな都としてあり、九州一円や関西も視野に入れ、ま

た諸外国との交流を図る上でも大きい位置付けということで大宰府に(誘致することに)なった。　県と国が出資したような形で運営している状況。近く150周年、130周年を迎える東京、京都、奈良に比べると、国立博物館の中では収蔵品が少ない。収蔵品数を伸ばしていくというのは博物館の使命。　一方、九博はモノがない。では、どうするか。よそから借りてきて運営していくということで、苦労しながらやっている。韓国や中国などの諸外国と学術交流を結ぶことで共同研究、展覧会につなげていく。小中学校や地域への教育普及活動にも力を入れている。　博物館というのはモノを見せるだけではなく、環境、建物、働いている人全てが財産。そういったものが一体となって親しめる、楽しめる博物館をつくる。着任時、前館長に九州各県との連携をやってくれと言われた。九博と各県がコラボして両者が活性化するような形にしていかなければならない。

小坂智子県美術館館長　　≪社会包摂という考え方≫
(県美術館の)コンセプトの「呼吸する美術館」は、館の外にあるさまざまな情報を吸い込んで、それを新しい形の刺激として再び放出しながら、周囲の人や環境と共に成長を続けていくということ。これを基本に五つの基本方針が定められており、特に「開かれた美術館」が大事だと思う。　新型コロナで休館という事態になって、社会における美術館の役割を考えざるを得なかった。物理的に開かれているいるというのも大事だし、建物が閉じようと誰にとっても開かれている形を維持することがいかに大切かということを強く感じている。　美術館の社会的な役割が今まで以上に増大し、例えば社会の課題への対応が求められている。地域の文化芸術の振興は、私たちの中心的な役割。コロナで地域間の文化的格差が固定されて進む懸念があるが、そのギャップを埋める活動をどれほどできるのかということ。　また芸術は他者や新しい価値の理解という点で大きな役割があり、美術館は多様な価値を認め合える社会をつくるという意味で果たす役割がある。一歩踏み出して社会包摂という考え方で、福祉や医療との連携も課題として考えていきたい。

藤泉長崎自動車監査役　　≪まちづくりの視点 重要≫
2001年2月、私は県の秘書課広報室長をしていて、突然知事室に呼ばれた。当時の金子原二郎知事から「美術館と博物館をつくる。君が課長でやれ」と言われ、これが開館まで4年間のすさまじい戦いの始まりだった。当時、わが国の流れでもあった教育委員会所管の文化施設としてではなく、知事部局で各部とも調整し、美術館・博物館をまちづくりとしてつくるという、全く新しい政策提案だった。　設計者らとまちづくりの視点で議論し、美術館は街、港、公園とのデザインの調和に努力をした結果、日本グッドデザイン賞を受賞。博物館も新しい諏訪の森の景観を創り出し、和の文化ゾーンともなっている。　運営する両館の指定管理者にも、ハード面だけでなくソフト面でも館がまちの機能の一つとなるように考えてくださいと強くお願いした。美術館では定期的に大学とイブニングコンサートを開催、博物館でもおくんちの庭見せや正月の剣道の初稽古に活用されるなど、まさにまちの中の美術館・博物館として地域に定着している。　新型コロナウイルス禍で、全国では休館や入館者の減少、感染対策に大変苦慮している。両館のまちづくりの視点は、今後の在るべき姿への新しいヒントを与えてくれるかもしれない。

(2) 私達当会の仮定と提案と要望

①芸術、歴史、文物、遺跡、の、バーチャル(仮想)からリアル(現実)への循環、還元、開放、回復

私達当会は、私達人類について、私達人類の現代の世界にあって、私達人類は、私達人類の芸術、歴史、文物、遺跡、を、私達人類の日常の意識や行為や活動や空間から、選択し、抽象し、分離し、私達人類の概念により構成する閉じた事象である、即ち、バーチャル(仮想)である、記号、図書館、博物館、美術館、遺跡の限定された展示、等である制度と空間へと、集約し、収集し、囲い込みつつある可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の現代の世界にあって、私達人類の日常の意識や行為や活動や空間、又、生活、と、芸術、歴史、文物、遺跡、は、本源的に、一体となる事象である処、私達人類の日常の意識や行為や活動や空間、又、生活、と、芸術、歴史、文物、遺跡、が分断されている可能性がある、と仮定します。

私達当会は、遺跡について、之が、私達人類の意図の変化、又、私達人類の忘却により土地を媒体として存在し、私達人類が再発見する事象である処、私達人類の活動の空間に於ける性格、又は、役割は、骨格であり体である、記号や図書館や博物館は美術館や私達人類の意図に由来して限定して展示される遺跡は、臓器であり体である、私達人類自身は循環し事象の媒体である血液、体液であり体である、と仮定します。

私達当会は、遺跡について、博物館や美術館の内側から考察すれば、地球の自然や、地理、地政、私達人類の様々な行為、と共に、博物館や美術館の、最も重要な「環境」である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類の芸術、歴史、文物、遺跡について、私達人類の活動の空間の考察、例えば、まちづくり、やその他の制度設計にあって、私達人類の活動の空間の骨格としての遺跡の性格と役割を媒体として、私達人類の任意の特定の概念と意図により囲われバーチャル(仮想)である記号、図書館、博物館、美術館、遺跡の限定された展示、を仮設的な事象と把握し、私達人類の芸術、歴史、文物、遺跡、たる事象をバーチャル(仮想)である記号、図書館、博物館、美術館、遺跡の限定された展示、から、私達人類の日常の意識や行為や活動や空間、即ち、リアル(現実)、に、循環し、還元し、開放し、回復すること、を提案し要望します。

<u>② 資料、芸術品、遺跡、に関する、私達人類の、思想、概念、人材、学問、学術、制度、組織、空間、行為、気運</u>

私達当会は、"2020年(令和2年)11月25日(水曜日) 長崎新聞 第一四面 特集記事 『長崎歴文博15周年シンポ アクティブに果敢な挑戦を 「バーチャル総合博物館」提案も』"について、国、県の文化政策、文化行政を俎上にする処、私達人類の世界に於いて私達人類の歴史や文物や芸術と本源的な関係にある遺跡に関する言及が一切ない、と確認します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界に於いて、資料や芸術品にあって、博物館や美術館に関して、その収蔵品の獲得充実を「使命」とし、その活用を考察する処、遺跡にあって、私達人類に関して、その現状保存と継承、原状回復を「使命」とすることなく、その活用の考察は如何、遺跡である具象を加速度的に破壊し滅失しつつある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界に於いて、資料や芸術品と遺跡を、同じ俎上に、且つ、包括的な関連の下に、保存し活用を考察する、思想、概念、人材、学問、学術、制度、組織、空間、行為、気運、が整備され形成されていない、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界に於いて、資料や芸術品と遺跡を、同じ俎上に、且つ、包括的な関連の下に、保存し活用を考察する、思想、概念、人材、学問、学術、制度、組織、空間、行為、気運、を整備し形成し適用すること、を提案し要望します。

<u>③ 遺跡と歴史と私達人類の芸術、本源的な主題である"生と死"、統合の回復</u>

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、遺跡、即ち、私達人類の意図の変化、又、私達人類の忘却により土地を媒体として存在し、私達人類が再発見する事象である遺跡、と、私達人類の芸術、即ち、私達人類の任意の特定の事象の再発見と再構成、は、近年、益々、その概念と態様、双方に於いて、近接しつつある、と仮定します。

私達当会は、遺跡と歴史と私達人類の芸術について、何れも、生命体の"生と死"をその本源的な主題とし、"再発見"をその根源的な手段とする、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、分業と効率の名目により、事象を、抽象し、即ち、選択と捨象により、分割し分断してきた、可能性がある、私達生命体の"生と死"も、私達人類の抽象、即ち、選択と捨象により、分割し分断されてきた、可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が行為する事象に関して、"生と死"、その他の事象の連続的で包括的な"統合"を回復すること、を提案し要望します。

私達当会は、皆様に、遺跡、歴史、私達人類の芸術について、何れも、生命体の"生と死"をその本源的な主題とし、"再発見"をその根源的な手段とすると仮定し得る処、遺跡、歴史、私達人類の芸術、たる事象の、連続的で包括的な"統合"された、保存と原状回復、修復、再発見、創作、継承、活用、を形成すること、を提案し要望します。

<u>④ 芸術とその記録品、美術品、工芸品、工作物、筆記跡、記憶とその記録品、遺跡、遺構、遺物ー私達人類の行為の痕跡ー私達人類に関する文化事象</u>

私達当会は、芸術とその記録品、美術品、工芸品、工作物、筆記跡、記憶とその記録品、遺跡、遺構、遺物、について、夫々に、場ー材料ー媒体が異なる処、何れも、私達人類の行為の痕跡であり、私達人類に関する文化事象である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、遺跡について、私達人類が、遺跡たる事象にあって、概念形成、調査、考察、再発見、現状保存、原状回復、憶測の余地のない再建、根拠ある再建、を手段として、土地、空間、国土、に対する、遺跡の領域の拡張を、私達人類の「使命」として、之を、私達人類の活動の空間に於いて、歩みを止めることなく、私達人類のよって立つ所として、継続的に、行為し、実現し続け、且つ、之を活用すること、を提案し要望します。

⑤芸術とその記録品、美術品、工芸品、工作物、筆記跡、記憶とその記録品、遺跡、遺構、遺物ー“行為”、“痕跡”、“記憶”、“生と死”

私達当会は、芸術とその記録品、美術品、工芸品、工作物、筆記跡、記憶とその記録品、遺跡、遺構、遺物、について、“行為”、“痕跡”、“記憶”、“生と死”、が、私達人類に於いて、当該の事象に、暗黙的、明示的、形式的、本源的に、共通する要素であり、之により、私達人類は、暗黙的、明示的、形式的、必然的に、当該の事象にあって相互に、親和性を、感知し認識し得る、と仮定します。

私達当会は、事象の活用について、芸術とその記録品、美術品、工芸品、工作物、筆記跡、記憶とその記録品、遺跡、遺構、遺物、並びに、その他の事象に関する、私達人類にとっての、本源的な、親和性、が、私達人類にとっての、根源的な、事象の活用の契機となる、と仮定します。

⑥遺跡と任意の特定の様々な事象との親和性

私達当会は、遺跡について、痕跡として具象であり、同時に、痕跡であることにより、私達人類の任意の特定の概念を超越し得る抽象でもある、多くは、色彩も、音も、控えめであり、遺跡そのものとして地味な存在である処、芸術や、風土、エスニシティ、私達人類の事象、並びに、地球の自然の、様々な事象や関係性との親和性を形成している、之が、遺跡の活用の範囲を広範な事象とする、この把握が遺跡の活用の基盤となる、と仮定します。

私達当会は、皆様に、遺跡について、遺跡の現状保存、原状回復、憶測の余地のない再建、根拠ある再建、整備、公開、任意の特定の事象と遺跡の様々な関係性に由来する広範な活用、を提案し要望します。

〔情報〕
○ 2021年（令和3年）12月3日 木曜日　長崎新聞　第22面 【社会】

『 日本初の鉄道、遺構出土　　東京 高輪新駅再開発で 』

□ （写真） JR高輪ゲートウェイ駅の近くで見つかった日本初の鉄道の遺構「高輪築堤」の一部＝11月28日、東京都港区（JR東日本提供）

□ （図版） 明治時代の錦絵「東京品川海辺蒸気鉄道之真景」に描かれた高輪築堤（港区立郷土歴史館提供）

JR東日本は2日、1872年に日本で初めて鉄道が開業する際に造られた「高輪築堤」の遺構が、東京都港区の高輪ゲートウェイ駅の近くで見つかったと発表した。線路を敷くために浅瀬に盛り土をして石垣で固めたもので、駅周辺の再開発工事で出土した。　JR東によると、のり面に積まれた四角い石が整然と並んでいる。昨年11月まで山手線と京浜東北線が走っていた線路跡から、1キロ余りにわたり断続的に確認された。　港区教育委員会によると、高輪築堤は1870年着工で、現在の田町駅付近から品川駅付近の約2．7キロにわたって造られた。幅は約6．4メートルで、当時の錦絵には海上の築堤を走る蒸気機関車が描かれている。明治末期から昭和初期にかけての埋め立て工事で撤去されたと考えられていた。　JR東は、港区教委や鉄道博物館（さいたま市）と共に調査し、一部の現地保存や移築、一般向け見学会の開催を検討している。　港区教委の川上悠介学芸員は「当時の土木技術の水準が分かる貴重な遺構で、一大発見だ」と話している。

◇ 『存在の「生と死」への内省、調査に基づく具象の丹念な紡績、物語と音楽、即ち、効果、を廃した日常的な具象としての表現、－遺跡の保存と活用への視点－』　　2020年（令和2年）12月6日 日曜日

（1）情報

○ 2020年（令和2年）12月6日（日曜日）　長崎新聞　第16面 【ワイド企画】　≪読書≫

『「犠牲区域」のアメリカ』（石山徳子著）　　［米核開発の闇に鋭い光］

新型コロナ禍が猛威を振るった2020年は、人間の「生」の在り方をさまざまな角度から考えさせられる一年だった。ウイルスの前では本来、貧富の差は関係ない。　しかし米国では黒人の死亡率が白人より高く、白人警官が黒人に強いた不条理な死は「ブラック・ライブズ・マター（黒人の命も大事）」の精神を世界中に拡散した。また「力による平和」を唱える大統領の下、米国が核への傾斜を深める中、中小国がけん引役となった核兵器禁止条約が発効することになった。　疫病、人種、核という具象から「生」を内省させられる中、核開発と先住民族の歴史的実相を掘り起こし続けた研究者の一冊に出会った。これまで可視化されなかった同時代史の深い闇に鋭い光を当てたのが印象的だ。　民主主義国家としての米国の歩みはまだ250年にも満たない。著者は15世紀末に欧州人が到来して以降の米大陸史を「セトラー・コロニアリズム（入植植民地主義）」という概念を軸に読み解き、先住民族の土地を収奪しながら「移民の国」が経済的、物理的に発展していった経緯を解き明かす。そしてその延長線上で、周縁に追いやられた先住民族の居住区域が核開発の現場となり、核超大国のパワーを支える「犠牲区域」として強制されていった実態を現地取材に基づき活写していく。　長崎原爆の原料を製造したワシントン州ハンフォード、ウラン開発の影響で多くの人が呼吸器疾患となったナバホ・ネーション（ニューメキシコ州など）、核実験場のあったネバダ州・・・。　これら「犠牲区域」には、生きとし生けるものが安全かつ健康的に暮らせる公正さを追究する「環境正義」の概念は存在しない。　先行研究を丹念に追うだけでなく、先住民族との長年の交流から信頼関係を築き、苦難に遭遇した人々の肉声と思想を紡いだ労作だ。それをなし得た著者の人間力にも敬意を表したい。　（太田昌克・共同通信編集委員）　（岩波書店・3850円）

『シアネスト宮崎駿』（ステファノ・ルルー著、岡村民夫訳）　　［冒険の日常的な顔つき］

画面を注視し、音響に耳を凝らす。なぜならシアネスト（映像作家）はそこにいるからだ。本書はそのような姿勢でつづられた宮崎駿論である。　著者のルルーは宮崎作品における、従来アニメーション的・娯楽映画的と思われていた表現と日常的な表現の関係性に注目する。　例えば第2章「日常における冒険」では「風の谷のナウシカ」と「天空の城ラピュタ」の冒頭が取り上げられる。2作とも冒頭は、文明崩壊後の遠い未来の風景や、個性的な形状の飛行船を映しているにもかかわらず、けれんを廃し、ごく自然に被写体を見せている。　さらにそこには「ただ具体音が聴こえるだけだ」。ナウシカでは「強風と、それからふかふかした地面に踏みこむ動物の足

の」。ラピュタでは「タイガーモス号のプロペラの持続音が、空賊と空飛ぶ島のストーリーをほとんど盛り立てない反復的リズムを提供している」と音楽が廃されている。　冒険の予感に満ちて描かれるであろう風景・被写体を、平凡な映像と効果音により「日常の風景」として提出すること。ルルーはそれが1980年代前半の、宮崎の演出の特徴であるとまとめる(その対比として冒頭に音楽をつけてしまった北米版のラピュタがいかに演出の狙いをそいでいるかも指摘する)。　本書はこのように映像にこだわる視点から、宮崎のキャリア初期から「千と千尋の神隠し」までを総覧する。昨年訳された評伝「ミヤザキワールド」(スーザン・ネイピア)が宮崎の人生と作品を結びつけようとしていたことと比べると、映像第一の本書の姿勢は正反対といえる。だが宮崎の人生や映画の主題から切り離されたからこそ、見えてくる「映画の顔つき」というものがある。本書は宮崎アニメのそこにフォーカスした例のない一冊ということができる。　ルルーは本書に先立ち高畑勲に関する評論も1冊著している。本書の前編に相当するそちらも是非読んでみたい。　(藤津亮太・アニメ評論家)　(みすず書房・3960円)

(2) 私達当会の仮定と提案と要望

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界の遺跡の保存と活用にあって、“存在の「生と死」への内省、調査に基づく具象の丹念な紡績、物語と音楽、即ち、効果、を廃した日常的な具象としての表現”、を方法として、遺跡の存在、並びに、遺跡と私達人類との関係性を、浮き彫りにすること、を提案し要望します。

私達当会は、皆様に、長崎地域の遺跡の調査と保存と活用について、その芸術総監督を、石山徳子氏 とステファノ・ルルー氏、又、岡村民夫氏に、一任すること、を提案し要望します。

◇ 『ディアスポラ(民族離散)としての私達人類の集団』　　2020年(令和2年)12月7日 月曜日

私達当会は、私達人類の世界の「アメリカ合衆国」たる事象について、専ら、私達人類の概念によって成立する唯一の私達人類の集団、私達人類の理想の国、同時に、アジール(避難所)とも規定し得る処、私達人類の本源的なエスニシティを喪失した、巨大なディアスポラ(民族離散)の集合体、でもある、と規定し得る、伝統や習慣、私達人類のエスニシティに逃げ込み避難することが出来ない、専ら、私達人類の主知による状態、苦難の道、でもある、「アメリカ合衆国」たる事象に、安易に、私達人類に共通の普遍性を仮託することは、困難である、と仮定します。

私達当会は、また、私達現生人類自身について、およそ七万年前に、アフリカを出て、地球上の各地に拡散した、全体が、一つのディアスポラの集団である、と規定し得る、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界の「アメリカ合衆国」たる事象にあって、私達人類は、私達現生人類の在り方に関する、明示的な、一つの対極を形成する、と規定し得る、と仮定します。

◇『私達人類の活動の空間に於ける具象』　　2020年(令和2年)12月8日 火曜日

(1) 情報

○ 2020年(令和2年)12月8日(火曜日) 日本経済新聞 第27面 【特集】
≪SGDs/CSR Frontier ｜ 建築に見る持続可能性≫

『「周囲を圧倒しない建物」追究 ――問われる企業・建築の協働―― モノづくりの精神「調和」に生かす』

国産木材を前面に出した国立競技場で知られる建築家の隈研吾氏は「周囲を圧倒しない建物」の大切さを訴える。今年7月に同氏が岩手県市津雫石雫石町で設計を監修したセイコーの高級時計工房がオープンするなど変化は企業施設に広がる兆しも出てきた。新型コロナウイルスとの闘いで広がった新常態に呼応する「持続可能な建築」とは何か―。同氏へのインタビューなどから、建築分野との協働に向けた企業の意識改革の必要性が浮き彫りとなってきた。

□ [写真] 建築家・隈研吾氏

[20世紀の建築見直す好機] ――持続可能な建築とはどんなものでしょう? 20世紀の建築は、持続可能性と逆に動いていました。コンクリートという素材で周辺との文脈や歴史などを無視したものをつくりつづけ、その結果、多くの都市が破壊されました。今は、それを見直す好機でしょう。まずは周りの山並みや森などの環境との調和をどう取り戻すかを考えてモデルケースを作りたいと思っています。 さらには材料です。木は日本の建築の中心にありました。もともと「木」には興味がありましたが、空気中の二酸化炭素(CO_2)を吸収し、地球環境全体にとって非常に有効だと2000年ごろからいわれ始め、木や木造が再び建築の中心になればいいと思うようになりました。建築の作り方自体を変えていかなければならないと考えています。 国立競技場は日本の木材を全面的に使い、あれだけの量の木材を使ったスポーツ施設はないといわれていますが、光や風の流れも計算しています。「持続可能性」を一番説明しやすい建築物といえるでしょう。パリにあるサンドニ・プレイエル駅設計の国際コンペでは、内装のほとんどに木を使うデザインを出して選ばれました。持続可能な建築というものには今、世界的な関心が高まっていると強く感じました。 [コロナ下の価値観追い風] ――セイコーの高級腕時計を作る「グランドセイコースタジオ 雫石」やパリの直営店の設計に携わりました。 同社のモノづくりの理念「THE NATURE OF TIME」のNATUREは「本質」などという意味もあります。敷地の森を守っている雫石の工場、そこで働く匠(たくみ)の方々の仕事はまさに持続可能性を実現しており、我々の仕事の願ってもないパートナーだと感じます。最高級ブランドが並ぶパリ・ヴァンドーム広場の直営店では、暖かい風合いでセイコーの理念を最も分かりやすく見せようと考えました。 ――持続可能な建築は企業とどう結びついていけるでしょう。 コロナとの闘いで価値観が変わったのも追い風で、持続可能性への思いを社屋などの施設に生かしたいという企業は増えてくるでしょう。自然の中で仕事をしたいという人が増えてオフィスの在り方も見直されています。それを考える企業文化があれば、建築と結びつけます。日本のモノづくりへのこだわりは本来、調和を目指す持続可能性と相性がいいことを日本人が意識できるといいと思うのです。 企業は短期の利益を追求するのでなく、持続可能な価値を創れるかどうかが問われています。建築も単なる空間ではなく、その中の生活の質を問われる時代です。ビジネスに携わる人も、建築のデザイナーも、意識を転換する時ではないでしょうか。

□ [写真] 木材基調のぬくもりがある空間で熟練の社員が高級時計の組み立てに当たる (グランドセイコースタジオ 雫石で)

□ [写真] 高級ブランドが集まるパリ・ヴァンドーム広場でセイコー直営店はやさしさをたたえる

□ [写真] パリのサンドニ・プレイエル駅の内装には木を全面に使ったデザインが選ばれた Exterior:©Kengo Kuma & Associates image by L'autre image Interior:©Kengo Kuma & Associates

〈〈 企業の強み生かす工夫を 〉〉

□ [写真] セイコーホールディングス代表取締役会長兼グループCEO兼グループCCO 服部 真二氏

「国連の持続可能な開発目標(SDGs)の行動はトップが号令をかけると慈善的な色彩も強まり、なかなか進まない。会社の一人ひとりがその気になり、自分の課題として身近なところから取り組まねばならないものだろう」

「自然に囲まれて超高級品を作る。その作り手にスポットを当て、持続可能な成長を発信していくことが、新しいブランドにもなる。そういう考え方を象徴する施設は働き手のやりがいにも結びつくはずだ」 「今後は社会的課題を解決する方策をビジネスに取り込む工夫が必要だ。各企業が持つ強みを投影できるような持続可能性の追求の仕方が問われている」

〈〈 地域とつながり 世代超える戦略急げ 〉〉

慶応大学大学院 政策・メデイア研究科教授 蟹江 憲史氏

企業と持続可能な建築を考えるうえでは2つの観点がある。用途の柔軟性と「長く使えること」だ。30年、50年を経れば、建物を使う人も使い方も変わる。コロナ禍でオフィスの役割が変質し、今1社で使うビルを他社と共用するときも来るかもしれない。そんな変化に柔軟に対応し、全体構造としてはいつまでも使えることを目指したい。長く使うために考えるべきは素材だ。強度や機能を求めて開発されたが、地球環境を考えると使いにくくなっている建築材もある。計画的に伐採した木材などは持続可能な確保が可能であり、分解、再利用する際もCO_2などを排出しない。周囲と摩擦を生まず、調和する強さがある。こういう建築材はコストがかかる反面、産地追跡が難しく、流通ルートが明確でないものも少なくないが、これを透明化できればビジネスベースにも乗るようになるはずだ。 周囲との調和には地域との関わりが不可欠だ。世界が予測不能なリスクを意識し始めた中、今後は企業の施設に防災拠点の役割を期待されるような場面も出てこよう。まちづくりの観点で、まだ企業の意識が足りない気がする。利便性の受益者、または取引先相手にとどまらず、まちづくりの主要プレーヤーの一員になる自覚をもてるといい。 こうした取り組みは短期にできるものではない。トップの代替わりなどにとらわれず、世代を超えて受け継がれる長期的な経営戦略が求められている。

(2) 私達当会の仮定と提案と要望

私達当会は、長崎地域について、隈研吾氏のモデルケースに適任である、と仮定します。 “文脈、歴史、山並み、森、材料たる、木材、石材、亦、遺跡”。

私達当会は、皆様に、長崎地域の私達人類について、長崎地域を対象に、その遺跡と地球の自然と私達人類の存在による私達人類の活動の空間の概念、即ち、その都市計画に於いて、隈研吾氏のモデルケースに、自ら志願して立候補すること、を提案し要望します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、短期の利益を追求するのでなく、又、事象の表層に安住するのでなく、持続可能な価値を創れるかどうかが問われている、私達人類の活動の空間も単なる空間ではなく、その中の生活の質を問われる時代である、私達人類市民も、意識を転換する時ではないか、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、私達人類の活動の空間に於いて、私達人類の任意の特定の集団の活動、国家や団体や企業の活動のみならず、私達人類の個体が、私達人類の想像とその解釈その結果その体系その未来のみに依存せず、私達人類自身の感覚に感知する具象を確認すること、私達人類自身の過去の事実を再発見すること、私達人類にとって過去の事実を表象する具象である遺跡を省み再確認することは、私達人類市民に於ける、又は、私達人類の公共としての、CSR(Corporate Social Responsibility:企業の社会的責任:独 ワイマール憲法、仏 ノブリス・オブリージュ:1986年 コー円卓会議)/SRI(社会的責任投資)/ESG(Environment, Social, Governance:環境、社会、企業統治)・ESG投資/PRI(Principles for Responsible:責任投資原則:2006年 国際連合事務総長コフィー・アナンが金融業界に対して提唱したイニシアティブ)/SR(social responsibility:社会的責任:2010年11月 ISO26000)/SDGs(Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標:2015年9月 国連総会ー2030年:2001年ー2015年 MDGs(Milennium Development Goals:ミレニアム開発目標)を継承)への行為である、と仮定します。

◇『私達人類の文明化と植民地』　　2020年（令和2年）12月9日 水曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の西欧西洋世界の近代並びに現代への文明に於いて、重商主義から資本主義への移行にあって、西欧西洋文明諸国は、世界の文明化を私達人類の普遍性とし、自国の領域外に植民地を形成した処、自国の領域外に植民地を持てない諸国、自国の領域外の植民地を失った諸国、又は、資本主義は、自国の領域内に、様々な形態の植民地を形成する可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、例えば、単一の概念に標準化し、本源的なエスニシティを喪失し、自己の根源、アイデンティティと分断し、地球の表面に浮遊する、私達人類の現代の個体、並びに、集合体、若しくは、群、即ち、ディアスポラ、時に、様々な相対的な格差を内包する、は、私達人類の新たな植民地の位相で在り得る、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類のエスニシティを具象として表象する処、数理経済学者である宇澤弘文氏が提案する概念である「社会的共通資本」としての遺跡の保存と活用、を提案し要望します。

◇『現代の人類の諸問題と現代の経済学』　　2020年（令和2年）12月9日 水曜日

私達当会は、私達人類の西欧世界に於ける、重商主義に代わる、近代以降の現代の経済学について、「労働価値説」、私達人類の労働を価値の全てとする、の萌芽とされるウィリアム・ペティの『租税貢納論』の出版（1662年）以来359年、アダム・スミスの『国富論』の出版（1776年）による労働価値説の提示以来245年、理論として、労働市場を形成し労働者に貨幣の分配を可能とし、1870年代に、ウィリアム・スタンレー・ジェボンズ、カール・メンガー、レオン・ワルラス、の三人が独立して、価値に関する「限界効用（marginal utility）の理論」を体系化した処、私達人類にとっての価値、その由来、その動作、の全ての範囲を考察対象に包含し得ない、よって、現代の経済学が、私達人類に関わる諸問題に、解を与えることは、本源的に、不可能である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の現代の世界にあって、私達人類の行為の標準の一つとする方法に於いて、巨大なバイアス（偏倚）を包含する、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の現代の世界にあって、当該のバイアスへの仮定への再確認を基盤に、私達人類の行為を、選択し、行為する必要がある、と仮定します。

◇『私達人類の世界』　　2020年（令和2年）12月10日 木曜日

私達当会は、私達人類の西欧地域の近代から現代の世界について、差異、又は、格差、に由来する、資本の運用効率の追求、即ち、資本主義、と、啓蒙思想、又は、歴史的な経緯、風土、に由来する、自由、平等、即ち、国民国家、の相反する実態を、文明化の方向感（ベクトル）によって統括し、状況の安定を、主知的に平衡（バランス）させて運営する為には、明示的に限定する領域、即ち、国境、並びに、運営の制度、即ち、権能と力、を必要とした、即ち、主権国民国家の形態である、と仮定します。

私達当会は、私達人類の世界について、私達人類の世界の複数の一部の地域で、同時的に、形成され始め、西欧地域で、相対的、明示的に、意識され始めた、主権国民国家の形態、在り方が、地球上の全ての地域の私達人類の集団や私達人類の個体のエスニシティに寄り添う在り方ではない可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界の安定の為に、今、私達人類の世界の在り方を、再考し再構成しなければならない可能性がある、と仮定します。

◇『宇宙主義、並びに、宇宙主義経済学、遺跡』　　2020年（令和2年）12月12日 土曜日

私達当会は、皆様に、私達人類について、現代の地球上の私達人類の世界にあって、私達人類の行為の根拠に関して、私達人類が、私達人類の意図に由来する資本の力に依存して、生きて存在する、との、私達人類が想像によって創出する概念と行為の系と、その人類の行為への制御の系、即ち、資本主義と近代の経済学、から、私達人類が、宇宙と太陽系のエネルギー系の作用に由来して、生きて存在する、との、私達人類が想像によって創出する概念と行為の系と、その人類への制御の系、即ち、私達当会が仮称する、宇宙主義と宇宙主義経済学へと移行すること、を提案し要望します。

私達当会は、私達人類の宇宙主義と宇宙主義経済学の世界について、資本主義と近代並びに現代の経済学の時代以前に生起した、私達人類の重層的な関係性と共にある解決が困難な様々な問題が、既に、解決されているか、又は、解決に向かい始めている、と仮定します。

私達当会は、一方で、私達人類の宇宙主義と宇宙主義経済学の世界、即ち、宇宙と太陽系のエネルギー系に従う世界、について、宇宙と太陽系のエネルギー系を逸脱したとも考え得る、私達人類の生物としてのDNAを有する生命体を維持できない可能性を排除できない、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、その生命体としての存在に関して、宇宙と太陽系のエネルギー系にあって、極めて、不安定な存在として位置する、可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類の世界の遺跡の群について、私達人類にとって、広く、何人にあっても、私達人類、その生命体としての存在の、宇宙と太陽系のエネルギー系に於ける、在り方、位置、又は、性格を、感知し、理解する、その契機、又は、有効な手段足り得る、と仮定します。

私達当会は、遺跡の私達人類の生活に於ける機能について、当該の、遺跡が私達人類に与える作用である、私達人類が遺跡から吸収する作用である、と仮定します。

私達当会は。皆様に、私達人類について、安易な選択を踏襲し、事象の平衡を毀損し、又は、事象を破壊すること、を停止すること、を提案し要望します。

◇『私達人類が為す範囲に於ける、包括的な説明の不在』　2020年（令和2年）12月13日 日曜日

（1）情報

○ 2020年（令和2年）12月13日（日曜日） 長崎新聞 第18面 【ワイド企画】 ≪読書≫

『「宇宙の音楽」を聞く』（伊藤玲阿奈著）　［異色指揮者の人生哲学］

福岡県の音楽一家に生まれた著者は青雲高を卒業後、安全保障に関わる仕事を夢見て米国へ留学したが、ひょんなことから指揮者の道へ。2008年に29歳でプロデビュー、音楽の殿堂カーネギーホールにも立った。とんとん拍子で成功をつかんだのもつかの間、その数年後、何万ドルもの興行詐欺に遭い一文無しとなった。これだけ頑張ってきたのになんで前より悲惨なのか。幸せって何ーー。どん底の時期に哲学や歴史の本と向き合い、心に余裕を持てるようになるまでの思索の旅をつづったのが初の著作となる本書だ。　著者は「成功／失敗」を人生の価値基準としがちな西洋的な思考が、いかに世界を覆ってきたかを歴史的に解き明かした上で、「自然の流れ」に身を任せる老荘思想（タオイズム）などを適度に実践することが、困難や時代の変化を生き抜く上で有用だと指摘する。シンプルな結論だが、その肉付けとなる歴代の哲学者らの取り上げ方が音楽家らしい。例えば「三平方の定理」で知られる古代ギリシャの数学者ピタゴラスは、新興宗教の教祖でもあった。宇宙の秩序を探り、魂の浄化も求めて数学や音楽を研究した結果、弦の長さの整数比と協和音の関係も発見した。こんな調子でプラトンやプトレマイオス、「近代哲学の父」デカルトらを解説する。　とっつきにくそうな内容だが、かみ砕いた言葉遣いで講演会を聴くような気分で読める。時折挟んだコラムでは、バッハや滝廉太郎らの楽曲と、そこに潜む西洋的な思考、東洋思想に傾倒したジョン・ケージの音楽などを紹介。読者が聴きやすいようにユーチューブの再生リストをまとめているのも芸が細かい。　人生であのしんどい時期があったから今がある、と思える人は少なくないだろう。価値観の揺らぎは何かの胎動でもある。新型コロナウイルス禍の中でニューヨーク在住の著者が生み出した本書も、そんな果実である。　（田賀農謙龍・長崎新聞社報道部記者）　（光文社新書・1100円）

（2）私達当会の仮定と提案と要望

私達当会は、私達人類について、私達人類は、私達人類の世界に関して、西欧地域での私達人類の世界に関する考察に於いて、ギリシャの文明にあって、ピタゴラスが宇宙への考察を深め、プラトンが魂の三区分説、ロゴス（理知）、テュモス（気概）、エピュティメーテース（欲望）、を提示し、後に、神学、哲学、心理学、の範疇に、主知主義、主意主義、主情主義、の概念が派生、又、西欧地域の中世にあって、重商主義、即ち、私達人類の個体、並びに、集団の関係に於ける、相互の駆け引きと力が、価値の源泉である、との概念を主調とする個別の方法の集合、を形成し、西洋地域の中世から近代以降、自然科学の手法が認識され、中世から近代以降の経済学では、労働価値説、又、限界効用理論、を案出する処、私達人類の存在と生命とその活動に対し、私達人類の成す考察、知の体系、は、概ね、私達人類の行為に関する事象であり、私達人類の外部たる自然への考察が生起した処、宇宙と太陽系のエネルギー系と私達人類の存在と生命とその活動を包括的、体系的、明示的、に把握し提示し説明する考察は、かつてない、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、斯かる包括的な考察に関して、私達人類の世界に於ける西欧地域に由来する私達人類の知の体系が、地球規模で私達人類の世界に敷衍する私達人類の現代の世界にあって、私達人類に不可欠の考察として、仮に、宇宙主義、並びに、宇宙主義経済学、と呼称します。

私達当会は、皆様に、宇宙と太陽系のエネルギー系と私達人類の存在と生命とその活動を包括的、体系的、明示的、に把握し提示し説明する考察、即ち、私達当会が、仮称する、宇宙主義、並びに、宇宙主義経済学、の形成、を提案し要望します。

私達当会は、私達人類の世界に於ける、遺跡の群、並びに、私達人類のエスニシティが、当該の私達人類の成す包括的な考察への方向性を示唆する、と仮定します。

私達当会は、皆様に、個別の遺跡、並びに、遺跡の群、又は、様々な関係性、の調査、再発見、現状保存、原状回復、憶測の余地のない再建、根拠ある再建、活用、整備、公開、を提案し要望します。

◇『私達人類の世界の拡張と拡大』　2020年(令和2年)12月16日 水曜日

(1) 情報

○ 2020年(令和2年)12月16日(水曜日) 日本経済新聞 第19～25面【特集】
≪ NIKKEI－FINANCIAL TIMES－共同企画　The World Ahead 世界これから ≫

(第19面)　日本経済新聞と英フィナンシャル・タイムズ(FT)がパートナーシップを組んで5年がたった。この間、互いに連携を深め、デジタルと紙面で世界の読者に独自の視点を提供してきた。5周年の共同企画では、世界が揺れたこの5年間を顧みつつ、「世界のこれから」を展望する。

『テック・中国の制御が課題』　日本経済新聞社論説主幹　原田 亮介
『混迷の時代、コロナで加速』　FTチーフ・エコノミクス・コメンテーター　マーティン・ウルフ
『危機克服へ世界の英知を』　日本経済新聞社編集局長　井口 哲也
『今後の世界、読者に指針』　FT編集長　ルーラ・カラフ

□ (棒グラフ) 新型コロナによる世界的な経済危機で債務が急増　部門ごとにみた世界全体の債務のGDP比:1999年－2020年:0－400%:家計、非金融業、金融企業、政府／リーマン危機、新型コロナのパンデミック　(注)IMF資料からFT作成

□ 2025年までの主な予定　国内、海外

(第20面) [進化・多様化 止まらない]　－Technology 技術－　新たな企業の寡占化も　「バーティカル」に価値　－Finance 金融－　せめぎあうAIと規制　新陳代謝の大競争に

(第21面) [大転換期 どう乗り切る]　－Industry＆Retail 産業・小売り－　消費者、より注意深く　「無形資産」経営、主流に　－Energy エネルギー－　原油産業、不確かな未来　脱炭素技術が競争左右

(第23面) [崩れた常識、その先には]　－Work stlye 働き方－　弱者がさらに不利に　脱・日本型雇用へ号砲　－China 中国－　勢いづく強権の中国

(第24面) [変わる世界の力学]　世界はパワーバランスが大きく変動する時代に突入している、近年を象徴する5つのテーマをデータで振り返ると、超大国としての中国の台頭や民主主義の苦戦といった姿が浮かび上がる。国際社会は試練に直面しつつも、未来を切りひらく新しい世代が影響力を高めており、温暖化問題などの解決に向けた行動力が試される。

□ (地政図) 中国への貿易依存が強まっている　輸入依存度:米国 60%以上－40－20－0－20－40－60%以上 中国:2000年、2010年、2019年　(出所)国際通貨基金

世界経済は過去20年間、中国への依存を深めてきた。中国が世界貿易機関(WTO)に加盟した2001年以降、多くの国で主要な貿易相手国は米国から中国に塗り替わった。206カ国・地域のうち、19年時点で米国よりも中国から多くの物資を輸入しているのは152カ国に達した。広域経済圏構想「一帯一路」により、特にアジアやアフリカで影響力を大きく高めた。中国の拡大戦略は安全保障上の脅威となり、米国との摩擦を生んだ。トランプ米政権は中国製品への関税引き上げや通信・テクノロジー分野での中国企業の締め出しに走り、世界各国はサプライチェーンの再構築を迫られつつある。これまで拡大を続けてきた世界の貿易額は頭打ちとなり、新たな転換点を迎えている。

□ (棒グラフ) 英国のEU離脱で域外では所得増も　離脱シナリオ別の所得の増減率:強硬離脱、穏健離脱:0.5－0.0－－2.5:英国(-)、アイルランド(-)、フランス(-)、ドイツ(-)、イタリア(-)、日本(+)、中国(+)、米国(+)、インド(+)、イスラエル(+)　(出所)独ベルテルスマン財団

英国の欧州連合(EU)離脱で、単一市場の恩恵を受けてきた英国民は所得減という大きな代償を払うことになる。一方、EU域外には思わぬ恩恵をもたらしそうだ。日本は英国と経済連携協定(EPA)を新たに結び、経済関係を強化。今後の輸出増が期待される。英国の環太平洋経済連携協定(TPP)加盟が実現すれば、恩恵を受ける国はさらに増える見通しだ。

□ （折れ線グラフ） 民主主義への満足度、主要国とアジア新興国で二極化　　満足度：改善（0．3）－悪化（－0．4）：1995年－2020年：フィリピン（+）、韓国（+）、台湾（+）、英国（-）、豪州（-）、日本（-）、米国（-）（注）1995年と比べた満足度の変化を指標化　　（出所）英ケンブリッジ大学

世界の主要国で民主主義への不満が高まっている。米国ではトランプ政権下で国民の分断が深まり、対立した勢力のデモなどが活発化した。欧州では一部の国で、大衆迎合主義（ポピュリズム）が台頭。日本も憲政史上最長となった安倍晋三前政権の間、国民の政治不信が強まった。例外はアジアの新興国で、政治の指導力などを背景に満足度が改善した。

□ （折れ線グラフ・棒グラフ） 気温上昇で洪水など自然災害が急増している　　平均気温の上昇幅：0．4－1．0度　経済損失を伴う災害の件数：0－800件：地震、津波、噴火/猛暑、干ばつ、山火事/台風、ハリケーン/洪水、土砂災害　2000年－2019年　　（出所）独ミュンヘン再保険、米海洋大気庁

地球温暖化に伴って増加する自然災害が人類の脅威となっている。河川の氾濫などによる大規模な水害は過去40年間で6倍に増加。台風・ハリケーンの巨大化や山火事の頻発で、世界各地で異常気象の被害が広がる。1980年以降の自然災害に伴う損失額は5兆2千億ドル（540兆円）を超す。災害対策に加え、脱炭素の取り組みを一段と加速する必要がある。

□ （散布図） 新興国ではZ世代が消費のけん引役に　　Z世代の割合10－35％Z世代が多い／ミレニアル世代の割合10－35％ミレニアル世代が多い：日本　米国、中国　インドネシア、インド、フィリピン　（注）出所は国連、円の大きさは各国の人口に比例

1997～2012年生まれの「Z世代」が影響力を強めている。Z世代の世界人口は19年時点で約20億人。デジタルスキルの高いミレニアル世代（1981～96年生まれ）を上回り、最多となった。一部は成人となり、アジアの新興国などで消費や文化の新たなトレンドを生みだしている。Z世代はスマートフォンを使いこなし、SNS（交流サイト）を通じて自己表現する。環境問題や多様性を重視しており、社会のあり方を大きく変えつつある。冷ややかな見方も浮き彫りになった。

（第25面）［アジア・若者 技術革新に期待］　　3メディア読者調査　　日本経済新聞、フィナンシャル・タイムズ（FT）、Nikkei Asiaの3媒体は世界各地の約5000人の読者に5年後の世界についてアンケート調査を実施した。アジアや若い世代で環境や金融分野の技術革新を期待する声が目立つ一方、国際社会への冷ややかな見方も浮き彫りになった。

□ （分布図） 5年後の世界は・・・読者の回答（メディアごとの平均値）　　FT、日経、Nikkei Asia：2．0（否定的）－3．0（中立的）－4．0（肯定的）：・紙幣や硬貨を使わないキャッシュレスの国が登場・世界の自動車販売の半分以上が電気自動車に・世界の温暖化ガス排出量が減少傾向に・人類が火星に着陸している・中国の名目GDPが米国を抜いて世界一に・ロシアのプーチン大統領が権力を握っている・北朝鮮の金正恩委員長が権力の座に・米国で初の女性大統領が誕生・シリア内戦が終息・英国が欧州連合に再加盟・世界の航空旅客数が新型コロナ流行前を超える・G7でマイナス金利は終了・グーグルが事業ごとに企業分割されている・インドの人口が中国を抜いている・大陸別の経済成長率でアフリカが世界一に

□ （棒グラフ） 主な設問への年代別の回答状況（日経読者）　　0－100％：20代、30代、40代、50代、60代、その他：全くそうは思わない、そうは思わない、どちらともいえない/わからない、そう思う、強くそう思う：・紙幣や硬貨を使わないキャッシュレスの国が登場・世界の自動車販売の半分以上が電気自動車に・世界の温暖化ガス排出量が減少傾向に

〈米退潮、不安定な世界に覚悟〉

強権的な体制を敷く国家は現状のまま存続するーー。アンケート結果には諦めにも似た空気が漂う。すべての媒体の読者がロシアのプーチン政権や北朝鮮の金正恩体制が5年後も存続すると予想した。シリア内戦も続くとの見方が多い。　背後に浮かぶのは米国を中心とした既存の国家秩序の退潮だ。国際通貨基金（IMF）の予想では、中国が名目国内総生産（GDP）で米国を抜いて世界一となるのは2025年よりも後だが、読者調査ではそれ以前とする意見が多い。　米欧などで政治的な混迷が深まり、新型コロナウイルスの感染拡大で経済も打撃を受ける中、民主主義が求心力を取り戻すのは簡単ではなさそうだ。

〈ポスト中国、次の成長エンジンは〉

国連の推計では中国の人口は2027年にインドに抜かれ、一人っ子政策の影響もあって32年には減少に転じる。各媒体の読者ともインドの人口が5年後に世界一になるとの見方が多数派だが、アジア圏ではより多くの人がインドの人口増を予測している。人口規模は国力を決定づける大きな要素になるため、インドの動向に注目が集まる。　大陸別の経済成長率でアフリカが最も高くなるかどうかについて、日経の読者は否定的な意見がやや強いが、アジアでは賛否が拮抗する。これまで世界の人口増加と経済成長をけん引してきたアジア圏だけに、読者の回答からは次の成長エンジンの登場には警戒と期待の両面がうかがえる。

〈EV・キャッシュレスに前向き〉

環境やテクノロジーに関する質問ではアジアの読者や若い世代ほど前向きな意見が多かった。アジアや日本では多くの読者が「現金を使わないキャッシュレスの国が登場」と回答。日本の20代では約7割となった。温暖化ガスの削減についても若い世代の方が相対的に楽観視している。　「電気自動車が5年後に世界の自動車販売の半分を占めるか」という設問では、日経やFTの読者はやや否定的だった。民間調査会社の見通しでも実現は2030年代後半だ。しかし、自動車が普及途上にあるアジアの新興国では早期の普及を見込んでいる。今後の経済成長に向け、技術革新やその実用化への期待が高まっているとみられる。

〈アフターコロナ、不安と楽観〉

世界を一変させた新型コロナウイルスの爪痕は5年後も残るのか。読者の見解は大きく割れた。日経の読者は世界の航空旅行客数が流行前の水準を「超える」と「超えない」との見方が拮抗したが、アジアでは多くの読者が超えるとみる。一方、感染の再拡大が深刻な欧米に読者が多いFTでは、旅客数の回復に懐疑的な見方が多かった。　主要国のマイナス金利政策については、日経の読者では続いているとの見方が多い。アジア圏は見方が割れている半面、FT読者は終了に期待感が強い。「アフターコロナ」では再び成長軌道に乗るというアジア圏の楽観的な見通しと、先進国の拭いきれない不安が混在する。

(2) 私達当会の仮定と提案と要望

私達当会は、当該記事により、英国のブレグジットで欧州域の所得が下がり、欧米日で民主主義への満足度が下がり、気温上昇で自然災害が急増する、一方、私達人類の世界の西欧文明の近代から現代に由来するインフラストラクチャー(社会基盤)に依存する世界が拡大、即ち、アジアの新興国でZ世代がミレニアル世代を超越し、インドの人口が中国の人口を超越、世界の大陸では、アフリカ大陸が最も経済成長率が高くなる可能性がある、など、その拡大が継続する処、例えば、この拡大、成長エンジン、が、世界を一巡すれば、再び、事象が顕在化し、しかし、私達人類は、世代を越えた変化により、その時迄に、既に、事象の解決へ向けて、思考する環境基盤を壊滅し、思考の方途を喪失している可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達当会が提案し要望する、遺跡、歴史、エスニシティ、宇宙主義、宇宙主義経済学、が、私達人類の選択に際し、私達人類の、正統な、根拠で在り得る、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、遺跡、歴史、エスニシティ、私達当会が提案する宇宙主義並びに宇宙主義経済学、への考察と私達人類の活動の空間に於ける行為、を深化し拡張すること、を提案し要望します。

◇『遺跡を遺跡とする所以』　2020年（令和2年）12月16日 水曜日

私達当会は、以下、遺跡を遺跡とする所以を仮定し、同時に、皆様に、その旨、提案し要望します。

① 遺跡、即ち、個別の遺跡、並びに、遺跡の群、又は、様々な関係性、は、その場に関わる私達人類の存在と経緯とそのエスニシティを、他の如何なる私達人類に関する事象よりも、最も、良く、端的に、具象として、私達人類が、私達人類の明示的である形式知に到達する以前に於いて、既に、表象し、証徴する。

② 私達人類は、遺跡にあって、私達人類が、私達人類の明示的である形式知に到達する以前に於いて、既に、私達人類の個体の内に、遺跡が提示する様々な表象と証徴を、直観し、感得する。

③ 私達人類は、遺跡にあって、私達人類が、遺跡の領域に、何らかの意図に於いて、僅かでも、遺跡以外の事象を付加すれば、遺跡としての、真正性と完全性、が失われるのみならず、遺跡としての形姿、その具象が失われ、ひいては、私達人類が、私達人類の明示的である形式知に到達する以前に於いて、既に、私達人類の個体の内に、虚妄を直観し、虚妄を感得する、又は、その契機を創出する。

④ 私達人類は、私達人類の形式知に於いて、私達人類が経験する、全ての事象を包含し、網羅することを得ない。

⑤ 遺跡は、遺跡以外の、私達人類に関係する他の事象ではなく、専ら、遺跡でなくてはならない。

⑥ 遺跡が、遺跡以外の、私達人類に関係する他の事象ではなく、専ら、遺跡であることは、私達人類が、遺跡に於いて、為し得る、最小限の良心である。

◇『私達人類の行為、ー振り子ー』　2020年(令和2年)12月17日 木曜日

(1) 情報

○ 2020年(令和2年)12月17日(木曜日)　日本経済新聞　第一面　　〖分断の米国　バイデンの時代 上〗

『「米国の夢」再興険しく　戦後最悪の格差 沈む中間層』

米国の第46代大統領に民主党のジョー・バイデン前副大統領が就任することが確定した。バイデン氏は分断の米国を立て直せるか。　「来年1月には住み家を失う」。テネシー州のニッキー・コーンウェルさんは悲嘆する。失職で5000ドル(約52万円)分の家賃を延滞。年末に到来する住宅強制退去の猶予措置失効の影響が直撃する。クリスマスが終わる12月26日には、新型コロナウイルス禍の特例で政府が1200万人に与えていた失業保険も一斉に切れる。与野党の対立で米議会の延長法案の議論が膠着しているからだ。　[「即時に救済策」]　1980年以降、米国経済を復活させた新自由主義は所得格差という副作用を生じさせた。21世紀の知識資本主義は、かつてのように中間層を育てられず、コロナ危機で「アメリカンドリーム(米国の夢)」は一段と色あせた。中道政治の衰退で右派、左派とも過激論が台頭し、大統領選後も政治は混乱し続ける。　危機下で政権を担うバイデン次期大統領は14日の演説で「痛みを負った米国民に即時に救済策を提供する」と宣言した。4年で2兆ドルという巨額の公共投資を公約。「ミドルクラス(中間層)のジョー」を自称する同氏は、低中所得層の雇用や所得を押し上げ、経済成長の動力である中間層の再興を探る。　コロナ危機で米経済の分断は以前にも増して深くなった。年収4万ドル以下の家計は4割が一時職を失った。一方、3月末からのわづか3カ月で、所得上位10%の保有資産は71兆ドルから77兆ドルに膨張した。IT(情報技術)株などに投資マネーが集中し、所得格差は戦後最悪だ。　米経済は土台から立て直しが求められる。例えば、米家計の5%に当たる710万世帯が銀行口座を持てていない。急進左派は「家計に1000ドル超の現金給付が必要だ」(オカシオコルテス下院議員)とバイデン氏を突き動かすが、銀行口座のない低所得層には即座に政府マネーを届ける手段がない。教育格差の縮小こそ低所得層の底上げにつながるが年収3万ドル以下の家計の35%はオンライン学習に不可欠な高速通信網もない。　[「振り子」動くか]　巨額減税を断行したトランプ政権に対し、バイデン氏は富裕層増税を財源に当て込む。企業(非金融部門)と連邦政府の債務は45兆ドルまで膨らんだが、資金源は社債や国債に投資する富裕層マネーだ。格差是正を名目にした大増税は、経済全体の微妙なバランスを崩して金利上昇などのきっかけとなり、大きな混乱を招きかねない。　米財団の調査では、トランプ政権発足前は米ハイテク新興企業の4分の1は移民による起業だったという。だが「米国第一」のスローガンを掲げたトランプ政権の下、米国は内向きに傾いた。移民を制限し、米国の革新力の源泉だった多様性すら弱まり始めていた。　バイデン氏は重要な閣僚ポストに女性や黒人を配し、多様性の重視を鮮明にしている。内向きになった米国をもう一度「開かれた国」にできるかどうか。その振り子が大きく動けば、米国のみならず、国際社会にも活力を与えることになる。　(ワシントン＝河浪武史)

○ 2020年(令和2年)12月18日(金曜日)　日本経済新聞　第一面

『「大深度」工事直後 地表沈む　外環道、衛星データで解析　補償・ルール見直し 影響も』

東京外郭環状道路(外環道)の地下トンネル工事の直後に東京都調布市の住宅街で2～3センチメートル程度の沈下と隆起が発生したことが衛星データの解析でわかった。10月に道路が陥没した一帯だ。「大深度地下(3面きょうのことば)」と呼ぶ地下40メートルより深い場所のため住民同意は必要なかった。地表変化との因果関係が認められれば、補償や技術的な対策のほか、大深度工事を巡るルールの見直しを迫られる可能性がある。

外環道は延長85キロメートルで49キロ分が開通済み。工事中の関越道と東名高速を結ぶ16キロ区間は住宅密集地を通るため、大深度地下を活用する。陥没地点は9月14日に直径16メートルの掘削機が通り、10月18日に事故が起きた。　日本経済新聞は衛星解析技術を持つイタリアのTREアルタミラから、電波で地表変化を1ミリ単位で捉える「干渉SAR」データを入手。陥没地点を中心に東西530メートル、南北870メートルの範囲で、4月8日から10月12日の変化を調べた。　掘削機通過前後の9月9日と20日で比べると、陥没現場の東側で1センチ以上沈んだ地点が続出。最大で1．8センチ強も沈んだ。それまでほとんど変動はなかった。10月以降も沈下が続き、変化幅は最大3センチを超えた。トンネルの真上以外でも1センチ以上の変動が多数あった。　東京工業大の竹村次朗准教授(土木工学)と急変した区域を視察し、一部で電柱の傾きや家屋の亀裂を確認。複数の住民が「工事前は見られなかった」と証言した。　国土交通省と事業者の東日本高速道路などは陥没事故を検証する有識者委員会を設置。工事場所の真上で2カ所の空洞も発見した。今も調査中で、因果関係の結論を出していない。　一部の委員や国交省幹部は陥没地点周辺の沈下を認めた。ボーリング調査など

が中心で、ここまで詳細な衛生技術は活用していない。時系列変化も十分把握しきれていないようだ。東日本高速の関東支社広報課は工事の影響について「要因が特定できておらず、回答を差し控える」とした。　委員会は18日にも中間報告を示す予定。工事が影響したとの意見が強まっている。工事の振動で土砂が圧縮されて地盤が下がったとの見方があり、因果関係が見えてくれば事業者は補償を検討するとみられる。　日経の分析では1センチ以上の隆起も確認された。こうした隆起を事業者や国交省は把握していないもようだ。　政府は地下活用のため、大深度では用地を買収しなくても公共工事を進められる法律を2001年に施行。首都圏、中部・関西圏は住民に告知すれば同意の取り付けを不要にした。地表に損害が出る変化が起きにくいとの前提があるからだ。　リニア中央新幹線など4件の認可例があるが、工事現場付近で被害報告はない。外環道の地下トンネル工事もこれまでのルートは主に粘土層で崩れにくく、地表変化は確認されていない。陥没場所周辺は地盤が緩く、特殊事例の可能性もある。　有識者委の関係者は「原因が分かれば地盤改良などの対策を打てる。安全な掘削が可能になる」と強調する。地下活用を広げるには外環道の問題を解明し、安全対策につなげる必要がある。　（平本信敬、藤田このり、山崎純、山田剛）

□（地図）道路陥没現場の東側で沈下が目立った　外環道　外環道工事ルート：沈下場所、隆起場所：陥没、空洞を発見

□（折れ線グラフ）最も沈下した地点　-40ミリメートル～+30ミリメートル、2020/4/8～10/12－工事前⇔工事後　（注）イタリアの衛生解析企業TREアルタミラのデータを基に日経が分析した　〆

(2) 私達当会の仮定と提案と要望

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類の行為に関して、経験、知識、解析（又は、アセスメント）、技術、制度、に於いて、一方で、私達人類の世界の一つの側面の問題を解決し得る、と期待する処、他方、想定しない問題、又は、放置している問題、を惹起する可能性を、常に、内包している、と仮定します。

私達当会は、私達人類、並びに、“私達人類の行為たる「振り子」”について、「振り子」が軌跡である処、「振り子」は循環を形成しない、当該の「振り子」が、私達人類の問題を解決し得るのか、私達人類の行為に由来する影響を累積して蓄積するのか、未だ、不明である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、宇宙と太陽系のエネルギー系と私達人類の事象を、一つの系で、把握し、説明し、提示する、宇宙主義、並びに、宇宙主義経済学の確立、を提案し要望します。

私達当会は、遺跡、並びに、私達人類のエスニシティ、の存在、並びに、私達人類による、遺跡、並びに、私達人類のエスニシティ、への考察が、私達人類への示唆の一つと成り得る、と仮定します。

◇『遺跡と私達人類の現代の土木と建築』　2020年（令和2年）12月18日 金曜日

私達当会は、遺跡と私達人類の現代の土木並びに建築との関係について、譲歩し妥協するのは、私達人類の現代の土木並びに建築に於いてである、と仮定します。

私達当会は、遺跡と私達人類の現代の土木並びに建築について、遺跡は、伝承、地上遺跡、地下遺跡、地形や環境又資料からの推測により、現代の私達人類の個体の存在の以前から、そこにあり、そこにしかなく、現代の私達人類の意図を断絶し隔絶した存在である、私達人類の現代の土木並びに建築は、私達人類が、私達人類の主観により、計画と技術と設計を手段として、私達人類の自由により、如何様にも、配置する事象である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、“現代の私達はこう考えるが、昔の私達人類はこう考えた”との如き、私達人類の多面的な考察が、私達人類の現代の世界に、豊かさと正統性を形成する、と仮定します。

◇『私達人類の世界の不可侵性への仮定』　2020年（令和2年）12月18日 金曜日

私達当会は、私達人類について、宇宙と太陽系のエネルギー系と私達人類の事象を、一つの系で、把握し、説明し、提示する、例えば、宇宙主義、並びに、宇宙主義経済学、が欠落するならば、私達人類が、現在指向する事象に関して、例えば、何か、不可侵の、真正な事象である、との根拠は希薄である可能性がある、と仮定します。

◇『私達現生人類の自らのディアスポラたる運命への勝利の姿』　2020年（令和2年）12月18日 金曜日

私達当会は、現代の地球上の私達人類について、地域の遺跡、並びに、任意の個別の個体と集団のエスニシティを喪失し、あまねく、ディアスポラ（民族離散）と成りつつある、と規定し得る、と仮定します。

私達当会は、約七万年前に、私達現生人類が、何らかの圧力か、自らの可能性を求めて、アフリカを出た時、私達現生人類は、ディアスポラ（民族離散）となった、以来、自ら以外の事象、即ち、他者、ネアンデルタール人や他の動物や植物、他者としての環境、さらに、同じ現生人類の他の集団、に勝利し続けて、自らの領域を確保し、拡張し続けてきた、今、私達現生人類は、自らのディアスポラたる運命にも勝利しなければならない時点に、到達しつつある、私達現生人類は、どうやって、その勝利を成し得るのか、その勝利とは何か、その勝利によって得られる私達現生人類の存在の在り方と形姿はどのようなものなのか、私達現生人類は、選択の時節を迎えている、その可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達当会が提案し要望する、遺跡、歴史、エスニシティ、宇宙主義、宇宙主義経済学、が、私達人類の選択に際し、私達人類の、正統な、根拠で在り得る、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、遺跡、歴史、エスニシティ、私達当会が提案する宇宙主義並びに宇宙主義経済学、への考察と私達人類の活動の空間に於ける行為、を深化し拡張すること、を提案し要望します。

◇『私達現生人類の行為と活動のモチベーション、ー文化ー』　2020年（令和2年）12月19日 土曜日

私達当会は、私達現生人類について、私達人類に特徴的な様々な行為と活動のモチベーションは、専ら、私達人類の文化にある、と仮定します。

私達当会は、遺跡について、私達人類の文化の基層に位置する事象であり、私達人類が、自ら、之を保存して活用し、私達人類の万人がその個体の生活の内に関わる筈の事象である、又は、私達人類の万人がその個体の生活の内に関わることができる状況下に設定する筈の事象である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、遺跡の保存と活用に関して、当該事象の外部的な権威に仮託し、任意の特定の線引きや切り分けの号令に依存する状況下に在るならば、私達人類が、遺跡を、私達人類にとっての有意な事象で在り得る現象として継続して維持することは、難しい、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、遺跡、歴史、エスニシティ、私達当会が提案する宇宙主義並びに宇宙主義経済学、への考察と私達人類の活動の空間に於ける行為、を深化し拡張すること、を提案し要望します。

◇『遺跡と歴史の関係に関する課題の解消』　2020年（令和2年）12月20日 日曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類の活動の空間に於いて、遺跡と私達人類の歴史の関係に関し、例えば、近年の長崎地域では、遺跡と歴史を、個別に、認識し、語り、行為してきた、と仮定します。

私達当会は、遺跡と私達人類の歴史の物語との関係について、本源的に、包括的で一体の事象である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類の活動の空間に於ける、遺跡と私達人類の歴史の物語との関係に関して、之を、包括的で一体の事象として、認識し、語り、行為する、その心性と風土を形成すること、又は、再生すること、又は、再構成すること、が課題である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、当該の課題について、私達人類の活動の空間に於いて、解決して、実現すること、を提案し要望します。

◇『民主主義の前提、バイアスを廃した情報の共有、遺跡』　2020年(令和2年)12月21日 月曜日

(1) 情報

○ 2020年(令和2年)12月21日(月曜日) 日本経済新聞 第一面 〖パクスなき世界 大断層 [1]〗

『「富める者」襲う恐怖　「バイデノミクス」土俵際の出発』

歴史に残る1年が終わる。新型コロナウイルスの危機は低成長や富の偏在といった矛盾を広げ、世界に埋めがたい深い溝を刻んだ。過去の発想では未来は描けない。非連続の時代に入り、古代ローマで「パクス」と呼ばれた平和と秩序の女神は消えた。しばらく我慢すれば元通りになると、あなたは考えますかーー。(関連記事3面に)

「市民が互いに軽蔑すれば、米国は1つの国として生き残れない」。世界が米大統領選に注目した11月、米複合企業コーク・インダストリーズの総帥、チャールズ・コーク氏(85)は著書で、米社会の分断について「我々が台無しにしたのか」と後悔の念をつづった。　保有資産450億ドル(約4兆6千億円)という米有数の富豪は自由経済を徹底して求める「リバタリアン」の代表格だ。保守派を資金面で支え、いわば党派対立をけん引してきた。その成果の一つが4年前のトランプ政権の誕生と共和党による上下両院の独占だった。　勝利したはずなのに、この4年間で逆に自由経済は遠のき、保護貿易や政府債務が拡大した。不公正や格差をめぐる暴力も米社会を覆う。今後、特定政党の支持から手を引くというコーク氏。自身の力がもたらした惨状におののく心情が透ける。□(写真=Pax)□　米ウォルト・ディズニー共同創業者の孫、アビゲイル・ディズニー氏ら資産家約100人は「私たちに増税を。すぐに大幅に恒久的に」と公言する。コーク氏と表現は異なりながら、「富める者」に通じるのは「このままだといずれ自分たちはしっぺ返しに遭う」という恐怖にも似た不安だ。　不安の震源は「1つの地球に2つの世界がある」という現実にある。スイスのUBSなどによると、保有資産10億ドル以上の2千人余りの超富裕層はこの1年足らずで資産を200兆円増やした。同じ地球に食べ物にも事欠く人がコロナ前から6億9千万人いる。　飢える人々はコロナでさらに1億3千万人増える恐れがある。ノーベル平和賞を受賞した世界食糧計画(WFP)のデイビッド・ビーズリー事務局長は10月、富裕層に寄付を呼びかけた。「1回限りのお願いだ。世界は分岐点にいる」　米憲法の父、ジェームズ・マディソンは、過剰な富の集中は戦争と同じくらい民主主義に有害だと説いた。経済の二極化は反エリート主義や大衆迎合主義と結びつき、宗教や人権、世代に断層を広げ、政治を不安定にする。アレクシス・ド・トクヴィルが革命当時のフランスを描いたように、大衆は特権階級に「畏怖ではなく増悪」を抱く。　□(写真=Pax)□　モノの大量生産で繁栄した20世紀は労働者が中間層に育ち、平等化が進んだ。21世紀にかけてデジタル技術が広がるとモノではなく、データや知識を牛耳る巨大テック企業が「勝者総取り」を競う時代となった。そこをコロナ危機が襲った。　各国の財政拡大と金融緩和が常態化し、あふれた資金が株価を押し上げる。持つ者と持たざる者の差はさらに開く。コロナ禍で欧州の低所得層の比率は4.9～14.5ポイント上がるとの予測もある。経済協力開発機構(OECD)によると、最低所得層の子が中位の所得を得られるまで平均4～5世代の時間がかかる。　「雇用や賃金、資産をめぐる人種間格差を積極的に監視や目標の対象とすべきだ」。次期米大統領に就くジョー・バイデン氏は富裕層への増税など富の再配分の再建を掲げる。大統領選では米連邦準備理事会(FRB)に対し、金融政策を通じて格差是正にどう取り組んだか報告を義務付けることを公約に盛った。　むろん、ばらまくだけでは一過性に終わる。成長と雇用を生み、再配分から再生産へとどうつなげるか。次期米財務長官に指名されたジャネット・イエレン氏は「何もしなければさらなる荒廃を招く」と語る。米国は総力を挙げ、土俵際から踏み出そうとしている。　その成否は米国の将来を決めるだけではない。資本主義と民主主義という、私たちが苦闘の末に手に入れた価値の未来を描き直す第一歩となる。

▸ パクス　ローマ神話の平和と秩序の女神をラテン語で「Pax」という=写真は123RF。覇権国の全盛期を「パクス・アメリカーナ(米国の平和)」などと呼ぶ。国際秩序が安定し、経済活動の拡大が繁栄を生む。米国の背を追う中国の勢力圏内での平和「パクス・シニカ」が広がるかどうかには懐疑的な見方も多い。

□ (棒グラフ) コロナ禍で巨大な断層が出現した　約2千人の超富裕層の資産が200兆円増加　0－10兆ドル　(折れ線グラフ) 飢餓人口が8300万人～1億3200万人上振れ　コロナ前の予測、コロナの影響(最小)/(最大)　6.0億人－8.5億人　2008年－2020年　(注)富裕層の資産はUBS、PwCのデータ、飢餓人口は国連食糧農業機関(FAO)などの報告書から作成

(2) 私達当会の仮定と提案と要望

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、民主主義に関して、万人に於ける、バイアスを廃した情報の共有が、その前提となる基盤である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、遺跡、歴史、エスニシティ、私達当会が提案する宇宙主義並びに宇宙主義経済学、への考察と私達人類の活動の空間に於ける行為、を深化し拡張すること、を提案し要望します。

◇『私達人類の世界 Ⅱ』　2020年(令和2年)12月24日 木曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類は、私達人類の西欧世界に由来する文明にあって、私達人類の世界に関して、その中世の時代に支配的であった、重商主義思想に明示的、形式的であると仮定し得る、私達人類の、自己と他者の二分法に由来する、私達人類の個体、並びに、集団の、相互の、意図と駆け引きと力による、他者の屈服と、自己利益の獲得、との行為の規範を、私達人類の近代への学術の進展を経由して、克服し、分業の促進や経済市場原理の概念や手法の導入により、私達人類の合理的行動による、利益、富、その再分配、の創出を獲得した、と言説し得る処、又、私達人類が、考察対象を、私達人類の世界から、私達人類の世界を包摂する全体、宇宙と太陽系のエネルギー系に転ずれば、私達人類は、暗黙的に、私達人類の、自己と他者の二分法に由来する、私達人類の個体、並びに、集団の、相互の、意図と駆け引きと力による、他者の屈服と、自己利益の獲得、との行為の規範、その行動の形式を脱しない、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界と、私達人類の活動の空間にあって、私達人類の意図が、地球上のあらゆる事象に拡張しつつある現代の私達人類の世界では、例えば、私達人類の世界の西欧地域の文明に於いて、意識的、明示的、形式的、時に暗黙的であると仮定し得る、自己と他者の二分法を根底とすると仮定し得る、私達人類の相互、又、自然と人工、その他の、対立的二者択一の手法や思想(例えば、西欧地域の中世に於ける私達人類の利益と価値に関する重商主義の概念)、即ち、何かを犠牲にして、何かを達成する、との方法が、私達人類を、私達人類の理想に誘導し、私達人類の理想に到達させ得るとは、考えにくい可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の存在にとって、私達人類の世界にあって、様々な事象を全きに於いて有意に活かし得る、包括的な概念や体系や手法が、必要である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、遺跡と私達人類の現代の機能の開発の関係について、遺跡の保存か、現代の機能の開発かの対立的二者択一の手法や調整より、双方が共に完全に存在し夫々の私達人類にとっての機能を全うし得る、包括的な概念や体系や手法による理解と行為を為すこと、を提案し要望します。

2020年(令和2年)12月8日(火曜日)　日本経済新聞　第27面 の紙上、建築家である隈研吾氏は、「20世紀の建築は、持続可能性と逆に動いていました。コンクリートという素材で周辺との文脈や歴史などを無視したものをつくりつづけ、その結果、多くの都市が破壊されました。今は、それを見直す好機でしょう。まずは周りの山並みや森などの環境との調和をどう取り戻すかを考えてモデルケースを作りたいと思っています。　さらには材料です。・・・・・」、と指摘します。

私達当会は、例えば、任意の特定の地域に於いて、国際空港の設置など、当該の地域に、外部資本の流入がある時に、当該地域にあって従来にない、既存資金の活用への工夫と開発が生起する可能性がある、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類の世界のあらゆる変化の機会を契機に捉え、二分法と対立的二者択一の概念や体系や手法から、包括的な概念や体系や手法、の適用へと、転化すること、を提案し要望します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の行為の時の流れ、歴史の過程に於いて、今、現代が、その時、である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類の結果を形成する事象は、唯一、私達人類の個体、万民の、日常の個別の動作と行為の、又、活動に於けるその、一つ一つの積み重ね、経過、にのみ帰結する、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、遺跡、歴史、エスニシティ、私達当会が提案する宇宙主義並びに宇宙主義経済学、包括性、への考察と私達人類の活動の空間に於ける行為、を深化し拡張すること、を提案し要望します。

◇『私達人類に関する現実への想定と私達人類の関する説明』　2020年（令和2年）12月29日 火曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の存在が由来する、宇宙と太陽系のエネルギー系、即ち、一体の包括的であると想定し得る系に関して、私達人類は、例えば、人文、技術、科学、との、複数の、経験的な、本源的に独立し相互に関連のない、時に、私達人類に対して相反する要求を成す、個別の説明の系の集合で説明を試行する処、又、当該の説明の系が私達人類の過去の経験と経験への認識の蓄積によって成立する処、即ち、私達人類に関する現実と、私達人類の私達人類に関する現実に関する説明の位相が、本源的に、相違し、私達人類は、私達人類に関する現実を説明することができない、と仮定します。

私達当会は、私達人類に関する現実と、私達人類の私達人類に関する現実に関する説明の誤差に於いて、私達人類の世界に関する、私達人類の行為に由来する、私達人類の問題を生起し、時に、私達人類の説明に由来する、疑似的に閉じた私達人類の行為の循環によって、私達人類の問題を再生産し又助長する、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の行為に由来して生起する私達人類の問題を解決し解消することができない、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類は、私達人類同士、並びに、私達人類以外の他者を規定するに充分な知の体系を形成し得ない、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類、並びに、私達人類の個体が、成し得る事象は、私達人類の人工に驕らず、宇宙と太陽系のエネルギー系に由来する、地球の自然を深く認識する謙虚と、私達人類が認識し得る範囲の様々な事象に対して、自主的に協調する覚悟、のみである、と仮定します。

私達当会は、遺跡について、之が、私達人類の事象に由来しつつ、私達人類の事象を断絶し超越した事象である処、私達人類にとって、私達人類が認識し得る事象を超越する事象への認識へ接近する契機、一つの入口と成り得る、と仮定します。

◇『私達人類の世界の近未来、私達人類の抽象』　2020年（令和2年）12月31日 木曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、人文や技術や科学たる私達人類の知の蓄積の進展を経由し、又、新型コロナウイルス感染症のパンデミック等を契機として、私達人類の行為に特徴的な、分業たる関係性、私達人類の抽象、即ち、捨象、たる行為を経由する形式化や再編成や形式たる量産、即ち、形式上の、限定的な効率の実現、即ち、私達人類に関係する諸般の関係性の一つ、に於いて、私達人類の世界の新しい概念と在り方、の形成が、流動化しつつ、同時に、加速しつつある可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、結果として、新しい形式、即ち、世界標準やプラットフォームを実現して、私達人類の世界に提示し提供した、私達人類の個人や集団や地域や概念が、近未来の私達人類の世界を中期的に誘導し牽引する可能性がある、と仮定します。

私達当会は、宇宙と太陽系のエネルギー系にある生命体、生物の存在について、当該の生命体、生物が附随して関係する事象に関する抽象化の能力が、必ずしも、当該の生命体、生物の存在にとって、望ましく、又、優れた事象ではない可能性がある、と仮定します。

私達当会は、皆様に、当該の生命体、生物に於ける抽象化の能力に関する可能性について、当該の能力の由来と共に、その能力の働きの性格を、考究し、明らかにすること、を提案し要望します。

◇『2021年』　2021年(令和3年)1月1日 金曜日

(1) 情報

○ 2021年(令和3年)1月1日(金曜日) 日本経済新聞 第1面 〖第4の革命 カーボンゼロ ▷1〗

『脱炭素の主役 世界競う　日米欧中 動く8500兆円　排出削減特許 日本なお先行』

世界がカーボンゼロ(3面きょうのことば)を競い始めた。日本も2050年までに二酸化炭素(CO_2)など温暖化ガスの排出を実質ゼロにすると宣言した。石化燃料で発展してきた人類史の歯車は逆回転し、エネルギーの主役も交代する。農業、産業、情報に次ぐ「第4の革命」を追う。(関連特集6、7面に)

生き物の気配がしない氷点下10度の砂地にかすかな金属音が響く。ギギ、ギギ。発電パネルが光を追う。北京から西へ700キロ、中国最大級のダラト太陽光発電所だ。　[価値生む砂漠]　完成時には広さ67平方キロメートルと山手線の内側に匹敵し、原発2基分の200万キロワットの発電能力を備える。コストは1キロワット時で4円強と日本の太陽光の3分の1を下回る。立地する内モンゴル自治区オルドス市は半分が砂で覆われ、黄砂の発生源でもある。発電所を管理する庫布斉砂漠林業の王海峰・副総経理は「砂漠に経済を求め、黄砂の地で価値を生む」と話す。　世界の太陽光の発電量に占める中国の比率は2010年の2%から18年に32%まで急上昇した。世界で新設される設備の4割は中国だ。・・・・・　50年までのカーボンゼロは世界の気温上昇を1.5度に抑えるのに必要な温暖化ガス削減の道筋だ。気温は産業革命後、約1度上がった。このままでは30～50年に上昇幅が1.5度になる。相次ぐ熱波や洪水、山火事が地球の異変を告げる。　[CO_2吸い岩に]　世界の企業はCO2を減らす新技術でしのぎを削る。アイスランド南西部のヘッドリスヘイディ。火山の熱で発電する地熱発電所の脇で世界初の工事が進む。春には直径が約1メートルの吸気ファンを24基備えた装置(写真はスイスの設置例)を4つ備えつける。大気中のCO_2を吸い込み、地下2千メートルで岩に変える。　吸い込んだ空気からCO_2だけを特殊フィルターで吸着する。CO_2は水に溶かし、地下の鉱物と反応させて固める。9割以上のCO_2を半永久的にとじ込め、漏れる恐れも小さいという。事業をてがけるクライムワークス(スイス)の創業者、ヤン・ブルツバッハ氏は「大規模なCO2除去が可能かつ必要ということを証明する」と意気込む。日本にも潜在能力はある。・・・・・　日本、米国、欧州連合(EU)、中国の公的機関や有力大学の試算を集計してみた。カーボンゼロには21～50年に4地域だけでエネルギー、運輸、産業、建物に計8500兆円もの投資がいる。海外の技術や製品に依存して単なるコスト負担になるか、市場として取り込んで経済成長につなげるかで、国家や企業の命運が左右される。　人類は18世紀の農業革命で穀物生産を伸ばし、産業革命では工業生産を飛躍的に増やした。20世紀末の情報革命は社会をデジタル化し、経済や雇用の姿も変えた。カーボンゼロは人類の営みでこれまで増え続けたCO_2を一転して減らす革命で、世界の産業や暮らしのあり方も塗り替わる。　カーボンゼロは総力戦になる。菅義偉首相が「50年に温暖化ガスの排出を実質ゼロにする」と宣言し、日本もようやく官民が足並みをそろえた。第4の革命はその復権をかけた挑戦の舞台になる。　〆

○ 2021年(令和3年)1月1日(金曜日) 日本経済新聞 第1面

『無人戦闘機 35年に配備　防衛省方針 有人機と一体運用』

防衛省は2035年にも遠隔地から操作する無人戦闘機を配備する方針だ。複数の有人機や無人機を通信でつなぎ、一体的に運用して探知や迎撃をする。次期戦闘機と同時期の導入をめざす。中国の軍事技術の進展を見据え、無人機が主導する「ドローン戦」に対処できる装備を整える。　防衛省によると、中国は超音速巡行が可能な「第4世代」戦闘機を1000機超保有し、機数は日本の3倍に達する。相手のレーダーに探知されにくいステルス性能を持つ「第5世代」も着々と配備する。戦闘機では日本が数的に劣勢だ。　日本を含む各国は中国への抑止力を高めるため研究を急ぐ。無人機の配備は防衛力強化による戦争の抑止につながる一方、戦闘に入るハードルが下がる面も指摘される。　防衛省は無人機の活用を①個別に操作②有人機が複数の無人機を同時に動かす「チーミング」③無人機の編隊が自律して戦闘参加――の3段階で想定する。自律型兵器は極めて高度な人工知能(AI)が必要となり国際ルールも追いついていない。まずは「チーミング」の技術について35年の実現をめざす。　国内企業が基礎技術の研究を進める。・・・・・　無人機には敵の動きの探知やミサイルによる攻撃能力の付与を検討する。1人のパイロットが複数の無人機を動かしたり、他の戦闘機と情報連携したりすることで、少ない人的資源で対応力を高めることが可能になる。自衛隊員の安全を守りながら危険が伴う空域での情報収集もしやすくなる。　〆

(2) 私達当会の仮定と提案と要望

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類はどこまで行けるのでしょうか、と仮定します。

私達当会は、皆様に、遺跡について、私達当会が、本紙に於いて、仮定して説明する内容、態様、私達人類にとっての機能を包摂する、諸般の関係性に於ける、遺跡への考察と再発見、並びに、遺跡の調査と保存と活用、継承、を、私達人類が、実現すること、を提案し要望します。

◇『補助線ーー宇沢弘文氏ーー社会的共通資本、遺跡』　2021年(令和3年)1月4日 月曜日

(1) 情報

○ 2021年(令和3年)1月4日(月曜日) 日本経済新聞 第39面 【社会】 〖Discover 70th ▸1〗

『宇沢弘文の経済教室　社会の幸福 再考の時』

ちょうど50年前のきょう。1971年1月4日付の本紙「経済教室」に「混迷する近代経済学の課題」と題した論考が載った。　筆者は米シカゴ大、東京大などで教えた数理経済学の泰斗、宇沢弘文。当時42歳だった。　「今まで経済学者が信じてきたことを徹底的に批判する内容だったから、ちょっと書きすぎたと思って電話で(日経の担当者に)『原稿を差し止めてもらえませんか』と聞いた」　「しかし、『もう印刷に回ってしまったから無理です』と言われてあきらめた」。後に「私の履歴書」で述懐している。　一度は没に、とためらった論文で、宇沢は何を伝えようとしたのか。　個人がそれぞれの利益を追い求める結果、市場を通じて資源の配分が最も効率的に行われるーー。当時の主流経済学に対する懐疑だった。　経済学者は〈目的の正しさ＝倫理〉を語る資格はないのか。公平や平等という価値をどのように経済分析に取り込めるのか。困難な道筋だが、避けて通ることはできない、と真摯に語った。　□ ■ □　執筆のきっかけはベトナム戦争だった。米政府高官は議会で、「最も効率的な経済的手段で戦争を遂行したから、増税もせずインフレも起きなかった」と胸を張った。　シカゴ大には、戦争終結のためベトナムへの水爆投下を正当化する同僚もいた。1968年に辞表を書き、帰国した。　「辞職は母にも相談せず、ひとりで悩み決断した」。宇沢の長女で医師の占部まりさんは語る。本紙に寄せた論文について占部さんは、「後に思索を深めていく『社会的共通資本』という思想の出発点になった」と位置づける。
大気、水などの自然、道路、下水道などのインフラ、教育や司法といった制度・・・・・・。これらの共通資本を市場原理だけに委ねていいのか。「各個人が享受する利益に見合う額だけ社会に還元する必要がある」と解決策に言及した。後の地球温暖化に対する炭素税などの問題意識がうかがえる。　□ ■ □　昨年から今年にかけ、各界の第一人者が、それぞれの立場から宇沢が問題提起した「社会的共通資本」の今日的な意義を読み解く連続セミナーが開催されている。　都市機能については、世界的に活躍する建築界の重鎮、槇文彦さんが、米国の都市研究家ジェーン・ジェイコブズの著作を手掛かりに宇沢の思想を語った。　生命科学の立場からは、あらゆる命の歴史を文化ととらえる「生命誌」を提唱する中村桂子さんが登壇。「生物が他の生物と共存しようとするシステムと宇沢の経済思想は同じ」と述べる一方、「宇沢は女の子だった」と語り会場を沸かせた。
「権力や競争に向くのが男の子。権力にこびず、内発的な思いで研究した」　今月中旬には、アートディレクターの北川フラムさんが、「社会的共通資本としてのアート」を語る。コロナ禍で「不要不急」とされた芸術活動の計測困難な恩恵について議論を深める。　1970年代。帰国した宇沢は、水俣病や成田空港闘争などの現場に身を投じた。「経済学の世界を飛び出し市民運動家になった」と冷ややかに見る人もいた。　宇沢に師事し、ノーベル経済学賞を受賞したジョゼフ・スティグリッツの追悼の辞が美しい。研究者の本分は特定の利害から離れ、社会の幸福に関心を寄せることだと言い、こう締めくくった。「宇沢先生は私に、後進の研究者たちに模範を示してくださったのです」　コロナ禍に揺れる社会をどう再設計するのか。宇沢経済学は、その補助線となるのだろうか。　(和歌山章彦)

□ (写真) 宇沢愛用のデスク、遺稿を収めたパソコンがある部屋で思い出を語る長女の占部まりさん (東京都内)

□ (記事) 社会的共通資本　市場原理だけに委ねず　市場経済は、自然環境や制度など市場以外の要素があって成り立つ。宇沢は、農業や都市、医療、教育などを「社会的共通資本」と呼び、市場原理だけに委ねず安定的に維持する方策を思索した。環境問題などを研究する学者が、理論的なよりどころにする。　ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世が1991年5月に信徒に発したメッセージ「回勅」の文案作成の助言役を務めた。教育や医療の今後について問われた宇沢は、社会的共通資本の理念をワイングラスを片手に熱弁。教皇をして、「私に説教をしたのはあなたがはじめてだ」と言わしめた。　〆

(2) 私達当会の提案と要望

私達当会は、皆様に、遺跡、又、身近な遺跡、又、“遺跡、私達人類の、歴史、エスニシティ、伝統、倫理、風土、記憶、私達当会が提案し要望する宇宙主義並びに宇宙主義経済学、私達人類の世界の基盤となる様々な個別の標準とその関係性”について、数理経済学者宇沢弘文氏が提唱する社会的共通資本として、考察し、思索し、再発見し、形成し、調査し、保存し、活用し、継承すること、を提案し要望します。

◇『私達人類の為す記録たる行為』　2021年(令和3年)1月4日 月曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の為す記録たる行為にあって、私達人類は、例えば、当該の事象に関して、“あなた方が気付いた事象の記録が、私達人類にとって何の意義があるのか、私達は、当該の事象に関して、あなた方が気付かなかった事象を探しているのだ”、と概念することが可能である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、遺跡や私達人類の本然的な行為について、之を、改変することを控え、現状保存し、継承すること、又、その為の措置を講ずること、を提案し要望します。

私達当会は、私達人類について、動物に関する、動物が生まれて、最初に見た動くものを、親と認識する、との言説があることに留意する、と仮定する処、例えば、当該の言説概念と、私達人類のエスニシティの循環、継承について、類似する関係性があり、私達人類のエスニシティの循環、継承は、必ずしも、明示的、形式的な知によって完結しない、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の任意の特定の集団の存在において、私達人類の任意の特定の個体の生命と生活が成立する習性にあって、私達人類の任意の特定の集団のエスニシティは、私達人類の任意の特定の個体の幸福の、本然的な根源を成す、と仮定します。　〆

◇『養生所/(長崎)医学校等遺跡の回復と再建と活用』　2021年(令和3年)1月4日 月曜日

私達当会は、皆様に、長崎市が、長崎市の計画によって2020年(令和2年)4月迄に破壊し、又、以降破壊しつつあると仮定し得る、長崎市の佐古地区に存在する“養生所/(長崎)医学校等遺跡”について、破壊以前の“当事者”たる私達人類諸方の記憶と記録が明確で鮮明な時間の経過の範囲のうちに、速やかに、当該遺跡に関し、可能な原状回復と再建、即ち、当該遺跡の遺跡としての“土地の造形”に関する、関係地域と関係各方面に保管する記録と史料並びに関係者の伝承と記憶、に基づく、憶測の余地のない再建と根拠ある再建、並びに、明治15年頃に新築された、甲種長崎医学校の(新)講堂に関する、私達当会が再発見した建物外観四面の写真史料に基づく、根拠ある再建、を実施し、即ち、当該遺跡の遺跡としての初期の原状に関する、伝統的な技術による可能な回復と再建、を措置すると共に、之を、保全し、活用すること、を提案し要望します。　〆

◇『当事性～虚言～承認』　2021年(令和3年)1月5日 火曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、事象の“当事性”の伝達、継承に於いて、万事、私達人類の“当事者”以外の他者が、当事者の私達人類たる生物としての個体の記憶が鮮明な時間の範囲に行為せず、当事者の私達人類たる生物としての個体の記憶が消滅した後に行為すれば、当該の、私達人類の“当事者”以外の他者の行為は、当事的な事実としてではなく、他者の恣意、作り事、虚言、としてしか存在し得ない、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類の“当事者”以外の他者の行為が、事象の“当事性”を示唆する、と認められるためには、例えば、私達人類の“記録”ではなく、“当事者”たる私達人類の為す、事象の他者たる私達人類の当該の行為に関する、“当事性”への“承認”が必要である、と仮定します。
〆

◇『それは正統な事象と成り得るか？』　2021年（令和3年）1月5日 火曜日

私達当会は、遺跡の保存と活用について、“出来ることはやる、出来ないことはできない、明日やればよい、他のこともある、出来なければ仕方ない、まだやるの”、などの、現代の私達人類の日常生活の感性で行為しても、概して、正統な事象にならない、と仮定します。

私達当会は、遺跡について、常に、私達人類一般の日常生活に由来する事象であると限られない、私達人類一般の日常生活を超越する力に由来する事象もあり得る、私達人類一般の日常生活を超越する力を包含する場合もあり得る、と仮定します。

私達当会は、遺跡について、私達人類一般の日常生活に由来する事象である遺跡に関して、私達人類一般が之を遺跡であると認識せず、又、私達人類の学者としての者が遺跡としての価値を認めず、又は、私達人類一般に対して有意な説明を形成しない処、日本地域、又は、長崎地域では、私達人類の近代以降、現代に至るまで、加速度的な破壊が進展してきた、と仮定します。

私達当会は、遺跡について、現在、遺存する遺跡は、私達人類一般の日常生活を超越する力に由来する事象である遺跡が、遺存数量と私達人類が認識する価値並びに意義の双方において、その中心と変化しつつある、と仮定します。

私達当会は、遺跡の保存と活用について、私達人類一般の日常生活に由来する事象である遺跡に関して、私達人類の日常生活に於ける留意により、その保存と活用が可能となる場合がある、と仮定する処、私達人類一般の日常生活を超越する力に由来する事象である遺跡、又、私達人類一般の日常生活を超越する力を包含する事象である遺跡、の保存と活用に関して、概して、私達人類一般の日常生活を超越する負荷を要する、と仮定します。

私達当会は、遺跡の保存と活用について、概して、私達人類が、現代の私達人類の日常生活の感性、概念、思考、理解、行動様式を基層に行為しても、私達人類にとって、正統な事象とならない、私達人類は、遺跡の保存と活用について、私達人類の、過去への認識と理解と認知を基層に、行わなければならない、之により、私達人類への遺跡の遺跡としての作用、機能、即ち、遺跡にある私達人類にとっての正統、が成立する、と仮定します。
〆

◇『遺跡、私達人類の現代の世界に於ける正統の成立への仮定』　2021年（令和3年）1月6日 水曜日

私達当会は、遺跡の保存と活用について、私達人類の意図的な資本の投下による利益の取得との経済的な活動と、本然的に、諸相の動作が異なる、と仮定します。

私達当会は、遺跡の保存と活用について、自由主義と民主制下、又は、主権国民国家に於いて、私達人類市民の、自主的な、日常生活を超越する負荷の分担によって、実現する、他の制度下にあっては、私達人類一般の日常生活を超越する力の発現によって、実現する、と仮定します。

私達当会は、皆様に、遺跡の保存と活用について、自由主義と民主制下、又は、主権国民国家にあって、私達人類市民の生活に関して、私達人類市民の、自主的な、日常生活を超越する負荷の分担によって、之を実現する、との認識と行為を共有する、成熟した私達人類市民の社会の形成によって、遺跡の保存と活用を実現すること、を提案し要望します。

私達当会は、私達人類の行為について、諸相の不分明な混濁のある、私達人類の認識と行為は、私達人類の世界にあって、私達人類にとっての正統な事象を誘導しない、と仮定します。　〆

◇『正統性』　2021年（令和3年）1月6日 水曜日

私達当会は、私達人類の正統性について、私達人類が、抽象や論理や記号や形式や技術で表現できることには限界がある、私達人類の世界の正統性の最終的な根拠は、私達人類の生物としての経験による記憶を保持する私達人類の個体が、その感性に照らして、「これで良い」とする、“承認”のみにある、それ以外は、私達人類の世界にあって、任意の特定の人類の個人又は集団の、任意の特定の作為、又は、意図としてのみ、存在し得る、と仮定します。　〆

◇『私達人類の現代の文明と、遺跡の保存と活用』　2021年（令和3年）1月7日 木曜日

私達当会は、私達人類の現代に至る文明について、私達人類の行為を、分業の形式化と量産によって、私達人類の行為を省力し、同時に、さらに多忙を求める、その私達人類の欲求を原理としてきたのではなかったか、と仮定します。

私達当会は、遺跡の保存と活用について、遺跡を私達人類の文化の表象、又、私達人類の文明の旧態と仮定する処、概して、私達人類の現代の感性で行為しても、まずは、私達人類にとっての正統な事象とはならない、と仮定します。　〆

◇『包括的説明』　2021年(令和3年)1月9日 土曜日

(1) 情報

○ 2021年(令和3年)1月9日(土曜日) 日本経済新聞 第27面【読書】　《この一冊》

『スケール (上・下)』ジョフリー・ウェスト著　　[生命から経済まで貫く理論]

原題=SCALE (山形浩生・森本正史訳、早川書房・各2300円) ▼著者は40年英国生まれの理論物理学者。06年にタイム誌の「世界で最も影響力のある100人」に選出。

地球の持続可能性が議論され、人新世の危機(著者の用語では「都市新世」)が語られ、パンデミックのただ中にある世のなかに一石を投ずる時宜にかなった出版といえる。　著者は複雑性研究の中心地、サンタフェ研究所の元所長で理論物理学者。生物の代謝率は体重の4分の3乗に比例するという「クライバーの法則」を、ネットワークのフラクタル成長により原理的に説明する代謝スケーリング理論で知られている。スケーリングとは系がサイズに応じてどう変化するかだ。動物の体重が2倍になると細胞の数も2倍になるが、代謝率は75%しか増加しない。マウスより百倍重いネコは、マウスの32倍しかエネルギーを消費しない。すべての哺乳類は生涯にわたって15億回の総心拍数を持ち、したがって(というのがスケール則なのだが、説明する紙幅がない)、体重数グラムの最小哺乳類トガリネズミの心拍数は分あたり千回を超え寿命はわずか2、3年、体重が10万倍のゾウの心拍数は毎分30回で約75年生きる。　ヒトはというと、人新世の始まりには、代謝率100ワット(ほぼ白熱電球1個分)で、生涯心拍数も他の哺乳類と同等だった。だが、このやっかいな生物は、純粋な生物的生活から抜け出して社会的生活へ移行し寿命が2倍に延び心臓はいまでは生涯で30億回鼓動する。その環境コストは大きい。住宅、照明、暖房、車、道路、コンピューターなどのニーズで、代謝率は、3千ワット(米国では1万1千ワット!)に増加した。質量が千倍以上大きいシロナガスクジラの代謝率に迫り、ヒトの物理的サイズからみて「あるべき」値の30倍のエネルギーを消費する動物となっている。世界人口73億人で2千億人分の暮らしをしている。　生物学のネットワークとスケーリングのパラダイムを適用して生命体を超えて、都市、企業の成長、イノベーション、寿命の普遍的なスケーリング則を明かし、「都市科学」、「企業科学」を貫く一大統一理論を打ち立てることが著者の野望だ。　理論で押すのではなく、自伝的要素も多く、複雑系の研究史に記述が割かれている分、多少回りくどいと思う読者もいるだろう。データもちょっとどうか(「福島地震」が「マグニチュード6.6」とか)という点もあり、翻訳もやや粗いが、なんといっても壮大なチャレンジが面白い。　《評》 記号学者　石田 英敬

(2) 私達当会の仮定と提案と要望

私達当会は、私達人類について、私達人類に関係する事象に関する包括的説明の形成への取り組みが、既に、試行され始めている、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、宇宙と私達人類の事象に関して、包括的な説明を形成し、例えば、ジョフリー・ウェスト氏の生物学のネットワークとスケーリングのパラダイムによる考察、例えば、私達当会が、皆様に、提案し要望する、宇宙主義並びに宇宙主義経済学、之に、鑑みて、行為し、行動し、活動すること、を提案し要望します。　〆

〔情報〕
○ 2021年(令和3年)1月9日 土曜日　長崎新聞 第19面【社会】

『日本初の鉄道遺構公開　東京・高輪築堤、JR東』

□ (写真) 報道陣に公開された「高輪築堤」の遺構=8日午前、東京都港区

JR東日本は8日、1872年に日本で初めて鉄道が開通する際に造られ、東京都港区の高輪ゲートウェイ駅周辺で出土した「高輪築堤(ちくてい)」の遺構を報道陣に公開した。　JR東や港区教育委員会によると、築堤は1870年着工で、現在の田町駅付近から品川駅付近の2.7キロの間に造られた。幅は6.4メートルで、当時の錦絵には海上の築堤を走る蒸気機関車が描かれている。昨年7月、駅周辺の再開発工事中に発見。1キロ余りにわたって断続的に確認され、調査を進めている。　公開された遺構は、斜面の下に石が整然と並んでいた。線路の下に舟を通すための水路の跡もきれいに残り、付近は波消しのための材木が無数に突き出していた。〆

◇『私達人類の行為～遺跡～安易又は過剰であことの誤り』　2021年(令和3年)1月13日 水曜日

私達当会は、私達人類について、宇宙と太陽系のエネルギー系に由来する地球の自然に完全には適応しない突然変異体のゆえ、その個体の生命維持の為に、主体的意図的、又、集団的な工夫を必要とするか、私達人類の種としての個体が、想像する能力に秀でるゆえ、マリー・アントワネットは表象する如く、“退屈が怖い”、だけか、二つに一つ、又は、その二つ、他に、私達人類の存在と行為に関する大いなる意義や価値はない、と認識し得る、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、主体的意図的、又、集団的な工夫を成す力を有し、想像する能力に秀でる処、私達人類の個体は、私達人類たるにあって、私達人類の過去、現在、未来へのムーブメント、傾向を、出来得る限りに於いて、私達人類の個体の自らの行為を、私達人類の個体の生命と集団の存在への有意を逸脱なきたるあらしめる必要がある、と仮定します。

私達当会は、遺跡たる事象の群の保存と活用、又、歴史の考究と表現、について、私達人類、その行為に於いて、私達人類の個体の生命と集団の存在への有意を逸脱なきたるあらしめる、と仮定し得る処、私達人類の現代の経済学にあっては、市場機構外のコスト、費用、であり、之について、定義を成す能わず、一方、包括的に人類の存在とその世界に有意、正の効果を成すと仮定し得る処、社会的に有意な費用であり、同時に、数理経済学者である宇澤弘文が提唱する「社会的共通資本」であり、社会的には、公共、である、と表現し得る、と仮定します。

私達当会は、例えば、今回の新型コロナウイルス感染症禍で明らかとなった事象、その一つは、現代の日本人の一部がこれ迄に形成した、「体を壊せば、医者に行って、直して貰えばよい」。との安易な、又は、過剰な信奉が、幻想であり、根本的な誤りであった、ということである、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の現代への過程に於いて、様々な、時に、日常生活に於いて、安易、又は、過剰であることの－－誤り、を行為してきた可能性がある、と仮定します。　〆

◇『私達人類の世界とその基準、規範、標準』　2021年(令和3年)1月15日 金曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類の世界の西欧地域に由来する文明の地球規模の拡張の下、私達人類の現代の世界は、① 私達人類の西欧地域の中世に顕在した、私達人類の相互の意図と駆け引きと力を価値の根源と認識する重商主義の痕跡、② 私達人類の世界の西欧地域の近代への道程以降その集団の倫理的基底をなす、私達人類を、私達人類以外の他の事象との関係性に於いて、格別の存在と認識する、疑似的な理想である啓蒙主義、③ 経済市場を考察対象とする近代以降の経済学の市場外事象の定義不能、の三点に由来する限界によって、定義される、と仮定します。

私達当会は、さらに、本源的に、当該の私達人類の世界を規定する社会的な基準、規範、標準、と由来を異にする、技術と科学の体系が、本源的に、私達人類の社会的な基準、規範、標準、と無関係に、独立して、拡張して、自己増殖する、と仮定します。

私達当会は、当該の技術と科学の自己増殖について、将来的な人工知能の在り方を予見させる、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、現在、私達人類が、従来の限界を解除する、新しい社会的な基準、規範、標準、を考察し、形成すべき時にある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、遺跡の存在と歴史の再認識、又、私達人類の諸般のエスニシティの在り方、実態が、私達人類の新しい社会的な基準、規範、標準、の考察と形成に、正の寄与を成す、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、これらの事象が、私達人類の個体の生活を直接に規定する、日常生活上の事象である、と認識し得る、と仮定します。　〆

◇『私達人類の過去、文明、その価値と方法、社会的技術、現代』　2021年(令和3年)1月19日 火曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、巨視的に、過去、私達人類の文明の拡張と、私達人類の人口の増大は、相互に依存する関係を形成してきた可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、この場合、私達人類の世界に於ける価値の概念にあって、価値の根源、又は、根源的な価値の単位は、私達人類の人口に還元して認識し得る、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類の一部の個体、又は、集団が、私達人類の任意の特定の文化と知と技術を力とし、より大きな集団に於いて、広く薄く、丁寧に、他者との相対関係に於いて大きな富を、蒐集する、その社会的技術を、推進力に、又は、媒体に、又は、之を対価として、私達人類の任意の個体、又は、集団の相対関係に於いて、相互に、私達人類の文明を敷衍してきた、可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、将来、その未来に於いて、いかなる、私達人類の世界を形成するのでしょうか、いかなる、認識と説明を可能とする、私達人類の世界を形成するのでしょうか、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類の具体的な個別の文化と文明が、地球規模で、交換され、等価しつつある現代、私達人類の個体は、私達人類の個体の日常的な行為に於いて、包括的、明示的、形式的に、私達人類の文化と文明の全体に対する責任を求められる時代となった、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類の文化と文明、その形成、私達人類の個体の認識、行為、生活、に対し、之に於いて、遺跡、私達人類の歴史、私達人類のエスニシティ、風土、を保存し活用し、同時に、宇宙と太陽系のエネルギー系と之に由来する地球の自然、私達人類に関する事象、を包括的に認識し説明する、例えば、私達当会が、皆様に、提案し要望する、宇宙主義、並びに、宇宙主義経済学、の考察と実現を、提案し要望します。

私達当会は、皆様に、遺跡について、私達人類の為す、遺跡の保存と活用にあって、之を、私達人類の文化と文明、私達人類の個体の、感覚の認知、感覚の受容、事象の認識、思考、概念、動作、行為、活動、生活、に対し、之に於いて、保存し活用することを、明示的、形式的に、最認識し、再確認すること、を提案し要望します。〆

◇『私達人類の世界の新型コロナウイルス禍と私達人類の必然性』　2021年(令和3年)1月21日 木曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類の行為に関して、私達人類の世界の新型コロナウイルス禍を経過し、反動的な混濁した様相も考え得る処、私達人類の個体又は集団上の欲求の選別が進展し、私達人類の夫々の個体に於ける必然性を包摂せず、又、当該事象自体の存在や在り方の根源的、本源的な根拠の希薄な事象は、傾向として、私達人類の世界から、淘汰される可能性がある、一方、場合により、根源的、本源的な事象と、より皮相的な事象へと、二極分化する可能性も考え得る、と仮定します。　〆

◇『私達人類の世界に於けるトレンド＝転変と私達人類の世界』　2021年(令和3年)1月21日 木曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、事象の“トレンド”、即ち、私達当会は之を、“転変”、事象の変化する性質の表象、と仮定します、を追えば、事象は転変する、転変の先に、私達人類の世界に残る事象、私達人類の行為の中核、は、遺跡、私達人類の歴史、私達人類のエスニシティ、私達人類の伝統、私達人類の倫理、私達人類の風土、でなければならない、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、遺跡、私達人類の歴史、私達人類のエスニシティ、私達人類の伝統、私達人類の倫理、私達人類の風土、を再認識し、再確認する時にある、と仮定します。　〆

◇『私達人類の世界と、私達人類の、単線的概念、複線的概念』　2021年(令和3年)1月21日 木曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、例えば、遺跡の存在、私達人類の歴史、私達人類のエスニシティ、私達人類の伝統、私達人類の倫理、私達人類の風土、か、私達人類の現代の要請による開発か、との二者択一、単線的概念、より、私達人類の世界の基盤、私達人類の世界における私達人類の存在と認識と行為の中核、基層、基盤、過去、経験、根拠、継承、としての、遺跡の存在、私達人類の歴史、私達人類のエスニシティ、私達人類の伝統、私達人類の倫理、私達人類の風土、と、トレンド、即ち、事象の変化する性質の表象、現代の私達人類の技術を包摂する想像に由来する時限性を包摂する多様な要請、の双方の完全な状態を認識し、実現する、複線的概念、を活用すること、が好ましい、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、例えば、私達人類の西欧地域に於いて、私達人類の日常の生活の活動の空間に、先史時代、古代、中世、近世以来に形成された、都市や地域の遺跡、景観を遺存し、之を、包摂している、私達人類は、現代にあって、その事象を確認できる、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、例えば、私達人類の日本地域に於いて、明治の御一新に連動する西洋地域の文明、アジア太平洋戦争の終戦後に連動する西洋民主制、これ等の、日本地域に対する外部社会からの社会的技術の移入を背景に、時に、私達人類の思想を力に、私達人類の日常の生活の活動の空間にあって、先史時代、古代、中世、近世以来に形成された、都市や地域の遺跡、景観を、加速度的に破壊しその存在を抹消してきた、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、任意の特定の地域に関して、当該する私達人類の存在と概念と行為の経験の履歴、記憶、その支持構造、を喪失した社会は、脆弱である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、任意の特定の地域に関して、当該する私達人類の存在と概念と行為の経験の履歴、記憶、その支持構造、を喪失した社会では、私達人類は、公共を論ずるを廃し、私達人類の個体の、又は、集団の自己利益に由来する、即ち、日本地域で云う、我田引水、の言説の披露に終始する可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、之を、統括し、統治し得る、社会的技術は何か、想起できない、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、任意の特定の私達人類に関して、私達人類の日常の生活の活動の空間に、先史時代、古代、中世、近世以来に形成された、都市や地域の遺跡、景観を遺存し、之を、包摂している場合、当該の私達人類の世界の実態として、所謂、“腰が強い”実態が形成されている可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、例えば、西欧地域に由来する文明、私達人類の行為、について、優れている、普遍的である可能性がある処、“腰が強い”実態を形成している可能性がある、日本地域に由来する文明、私達人類の行為、について、専ら、私達人類の複数の概念にのみ依拠する、“腰が弱い”、薄弱で混濁した実態を形成しつつある可能性がある、と仮定します。

◇『戦争被爆、その表現』　2021年(令和3年)1月22日 金曜日

(1) 情報

○ 2021年(令和3年)1月22日 金曜日　長崎新聞　第1面

『核禁条約 きょう発効　50ヵ国・地域、初の国際法規』

【ニューヨーク共同＝黒崎正也】 核兵器禁止条約が22日発効する。国連によると、条約は昨年10月までに批准した50カ国・地域で現地時間22日午前0時に効力が発生。米仏などが核実験を繰り返した南太平洋にある締約国サモアが最初に22日を迎えた。アジアや欧州、中南米に順次拡大し、国連本部のあるニューヨーク時間の22日午前0時(日本時間同日午後2時)には大半の締約国で発効、核の使用や保有、開発を全面違法化する初の国際法規の誕生となる。【16面に特集、12、22面に関連記事】　米英仏ロ中の核保有五大国は核廃絶を迫る条約には縛られないとの立場で参加を否定。米の「核の傘」に依存する日本政府も不参加だ。条約を推進してきた非保有国との溝は深いものの「核なき世界」を求める国際世論の高まりを受け、条約発効が軍縮の後押しになるとの期待が高まる。　米国では核軍縮に前向きな姿勢を示すバイデン新大統領が就任。トランプ前政権下で後退したロシアとの核軍備管理の枠組みを修復する構えで、信頼醸成が進めば、停滞する核軍縮に新風が吹き込まれる可能性もある。　日本政府は唯一の戦争被爆国として核保有国と非保有国の橋渡し役を自認。だが中国や北朝鮮の脅威を理由に禁止条約の署名・批准に消極的だ。　禁止条約にはこれまでに51カ国・地域が批准。条約推進国は今年8月に延期された核拡散防止条約(NPT)再検討会議を前に参加国をさらに増やし核保有国への圧力を強める方針だ。　禁止条約は2017年7月、国連で122カ国・地域の賛成で採択。昨年10月、批准国・地域が発効に必要な50に達し90日後の発効が決まった。　〆

○ 2021年(令和3年)1月23日 土曜日　長崎新聞　第1面

『核兵器廃絶「新たな出発」　禁止条約が発効　年末にも初回会議　被爆者を招待』

【ニューヨーク、ウィーン共同】 核兵器禁止条約が22日、発効した。核兵器の開発や保有、使用を全面的に違法化し、廃絶を目指す初の国際法規。広島、長崎の原爆投下から75年半が経過、惨禍が二度と繰り返されないよう訴え続けてきた被爆者らの願いが結実した。条約の第1回締約国会議に被爆者が招待されることも明らかになった。【3面に表層深層、3、16、22、23面に関連記事、17面に条約全文】

米国やロシアなど核保有国の対立で軍縮増強が続く中、米国では「核なき世界」を追求するバイデン大統領が就任し、国際協調回帰への期待も強まる。条約発効を軍縮停滞の打開につなげられるかどうか国際社会は正念場を迎えている。　条約の第1回締約国会議は、条約推進派オーストリアの首都ウィーンで今年末にも開催を予定。同国のシャレンベルク外相は共同通信に「75年におよぶ被爆者の闘いがなければ制定できなかった」と話し、被爆者を招待する意向を示した。　条約発効と締約国会議への招待について、広島、長崎の被爆者は「新たな出発」と歓迎する一方、日本政府に対しては「唯一の戦争被爆国でありながら無関心を貫くのは怠慢だ」と批判した。　条約にはこれまで51カ国・地域が批准、署名は86。批准国や「核兵器廃絶国際キャンペーン」(ICAN)は参加国の上積みへ働き掛けを続けるが、核保有国側は条約には縛られないとの立場で一貫。今後、双方のせめぎ合いが激化しそうだ。　締約国会議は条約履行や核廃絶に向けた措置を検討するため国連事務総長が定期的に開催し、締約国以外の国や組織もオブザーバー参加できる。シャレンベルク氏は「広島や長崎で開催できれば、とても強い(核廃絶へ向けた)メッセージになるだろう」と指摘した。　核禁止条約は2017年7月、国連で122カ国・地域の賛成で採択。昨年10月、批准が発効に必要な50に達し、90日後の発効が確定した。

［首相「署名せず」 会議参加にも慎重］　菅義偉首相は22日、参院本会議の代表質問で、核兵器禁止条約発効に関して「条約に署名する考えはない」と改めて述べた。「現実的に核軍縮を前進させる道筋を追求するのが適切だ」と強調し、締約国会議へのオブザーバー参加にも慎重姿勢を示した。　条約に関し「核兵器国のみならず、多くの非核兵器国からも支持を得られていない」と指摘。核兵器廃絶決議の提出や被爆の実相を伝える取り組みを通じ、立場の異なる国々の橋渡しに努めると力説した。　茂木敏充外相は記者会見で、核なき世界を実現するためには「現に核兵器を保有している国を巻き込んで、核軍縮を進めていくことが不可欠だ」と主張。日本は唯一の戦争被爆国として「国際社会の取り組みをリードする使命を有している」とも話した。　岸信夫防衛相も会見で、安全保障上の脅威に対処する観点から、現実的に核軍縮を進める必要性を訴えた。
〆

（2）私達当会の仮定と提案と要望

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、核被曝に関し、本源的に、将来、戦争被爆を直接に体験し、之を語り表現する私達人類の個体が限定される、今後は、私達人類の偏倚や暴力や戦争や兵器の廃絶、又、関連遺跡並びに遺物、語りとしての記録、その他関連資料の充実、整頓、件数の増加、領域の拡張、その保存と活用等、成果を出すことのみが、その表現となる、私達人類は、その最後の機会を形成した、一方で、その活動の真正性、完全性、健全性を如何に確保するか、が課題となる、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、核被曝に関し、常に、立ち返るべき存在としての、戦争被爆遺跡に関して、調査し、再発見し、概念並びに空間上の領域を拡張し、保存し、活用すること、を提案し要望します。

◇『遺跡について 2021年1月』　2021年(令和3年)1月25日 月曜日

私達当会は、皆様に、遺跡について、私達人類が、私達人類の世界にあって、従来、主として、私達人類が認識する時の流れを示標とする事象、即ち、私達人類の個体、並びに、集団、の行為と経験と記憶、伝承、歴史、その他の私達人類の為す物語、関係性、を標準として規定してきた処、空間や物体、スケールやテクスチャー(texture:生地、質感、手触り、建築家の隈研吾氏は「肌理」と表象する)、水平面、その他、私達人類の感覚の感知と受容とその生理上の情報処理、即ち、私達人類の生物、生命体としての諸般の関係性を標準として、之を遺跡の存在に於ける本源的な事象と認識して、優先して並立し、当該の遺跡に関係する当該の諸事象を、包括的に、把握し、当該の諸関係性に於いて、当該の遺跡を活用すること、を提案し要望します。

私達当会は、皆様に、遺跡について、私達人類の生物、生命体としての諸般の関係性に於いて、把握し、活用することに着目した場合、遺跡が、宇宙と太陽系のエネルギー系に由来する地球の自然、私達人類の諸般の感覚の感知と受容とその生理上の情報処理、並びに、認識と想像の形態、又、私達人類の諸般の行為、並びに、創作活動、芸術、詩歌、文学、音楽、色彩、造形、土木、建築、と近接し、重複し、連続し、親和性がある、と仮定します。

私達当会は、皆様に、遺跡について、宇宙と太陽系のエネルギー系に由来する地球の自然、私達人類の諸般の感覚の感知と受容とその生理上の情報処理、並びに、認識と想像の形態、又、私達人類の諸般の行為、並びに、創作活動、又、私達人類が認識する時の流れを示標とする事象、に於いて、遺跡を、破壊し滅失せず、保存し、活用すること、を提案し要望します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、遺跡に関して、遺跡、並びに、私達人類の生物としての生命体に由来する諸事象に関する、相互の親和性により、本源的に、私達人類が、遺跡を破壊しなければならないとの、私達人類に於ける、生物としての生命体上の、必然性はない、私達人類が、遺跡を破壊するならば、それは、私達人類の任意の特定の想像とその力、主観、そして、その選択、に由来する、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、遺跡に関して、本源的に、私達人類の事象、あらゆる私達人類の事象から、既に、断絶し、私達人類の事象から無関係に独立した存在である処、私達人類の任意の特定の想像とその力、主観、その選択、又、その選択の自律的展開、即ち、私達人類の事象、に相対する、唯一の、示唆、即ち、抑止力、又は、その根源、である、と認識し得る、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類の世界にあって、遺跡を、破壊し滅失せず、改変せず、之を、保存し、活用すること、を提案し要望します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の個体、並びに、その集団に於いて、宇宙と太陽系のエネルギー系に由来する地球の自然、他の事象を、受容し、只、之に従属して生きる、小さな存在としての能力のまま、現代では、宇宙と太陽系のエネルギー系と地球の自然に影響を生起する、大きな存在となった、と仮定します。

私達当会は、遺跡、個体である遺跡、並びに、群である遺跡、について、宇宙と太陽系のエネルギー系に由来する事象、あらゆる事象のうちで、唯一、私達人類に特徴的な態様、記号、抽象、を混在し、且つ、私達人類の忘却と惑星である地球の大地への依存により、私達人類の継続的な意図を断絶し、よって、私達人類の事実の一部を包含して遺存し、又、私達人類の想像とその力、主観、その選択、その選択の自律的展開、その在り方、その形式を包含し、之と、近接し、重複し、連続し、親和性がある、即ち、且つ、私達人類が理解し得る可能性、形式と契機、を包摂する、即ち、私達人類の存在の歴史的総体である形態の凹型としての残欠である、と仮定します。

◇『逸脱』　2021年(令和3年)1月26日 金曜日

(1) 情報

○ 2021年(令和3年)1月26日(火曜日) 日本経済新聞 第1面

『 独、日本に艦船派遣 この夏にも、中国を牽制 』

【ロンドン＝赤川省吾】ドイツ政府は独海軍に所属するフリゲート艦を日本に派遣する検討に入った。今夏にもドイツを出航する。海外領土を持たないドイツが極東に艦船を送るのは極めて異例。英国も航空母艦を近く太平洋に展開する。対中警戒論が急速に強まる欧州におけるアジア戦略の転換を象徴する出来事になる。(関連記事11面に)　独政府は昨秋にインド太平洋ガイドライン(指針)を閣議決定した。現在は指針にもとづく具体策を詰めており、海軍の派遣はその一環となる。　複数の独政府・与党筋によると独北部を母港とするフリゲート艦1隻が長期にわたってインド太平洋地域に滞在し、日豪韓などに立ち寄る。同地域に点在するフランス領で補給を受けたり、共同演習に参加したりすることを想定。南シナ海を航行する案もある。　ジルバーホルン独国防政務次官は取材に「今夏に出航したい。まだ詳細は決まっていないが(寄港先として)日本が視野にある」と明らかにした。「自由民主主義陣営のパートナーとの絆を深めたい」とも語った。　同次官は「だれかを標的にした計画ではない」と強調したが、力による現状変更を試みる中国をけん制する意味合いがあるのは明らかだ。　ドイツは域外派兵に慎重でアジアは伝統的な関心領域ではない。にもかかわらず海軍を展開すれば強力なメッセージになる。国際秩序の維持に積極的にかかわる姿勢を示す。　英国は空母クイーン・エリザベスをインド太平洋に送る。英海軍報道官は取材に「4～6月に出航する見通し」と答えた。　欧州各国は経済的に中国に大きく依存する半面、政治面では急速に距離を置きつつある。軍艦のインド太平洋派遣は中国偏重のアジア政策が大きく変わることを意味する。　〆

(2) 私達当会の仮定と提案と要望

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、今、文明史に於ける、主として、私達人類の伝統と経験に由来する、① 地球上の各地に散在する小さな集団、② ユーラシア大陸の中央部に出現する多様性を包摂する伝統的な帝国、③ ユーラシア大陸の西の周辺と東の周辺、即ち、イギリス、フランス、日本、に先行して出現する、中央集権の小さな王国、後の、主権国家、国民国家、その組み合わせである主権国民国家、より形成される私達人類の、即ち、経験的な集団の構造、を逸脱して、私達人類の任意の特定の意図に由来する、未知の、即ち、私達人類の経験による検証を経由しない、明示的、形式的な知の複合による集団の構造へと、変容しようとしている可能性がある、と仮定します。　〆

◇『私達人類の現代の世界へ』　2021年(令和3年)1月26日 火曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の現代の世界にあって、私達人類の、地域、例えば、日本地域、又、アジア地域、としてのエスニシティ、範疇、を暗黙的に、又、明示的形式的に、把握し、体現し、同時に、世界の事象を包摂して、体現する必要がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の現代の世界にあって、私達人類の思想、概念、行為、行動、活動、に於いて、事象、あらゆる事象に関する、より本源的な根拠、過去に於ける事実、私達人類の個体、並びに、集団の欲求と行為の必然性、又、二者択一的な単線型思想より、本源と皮相の双方を体現する、複線型複々線型の思想、に由来すること、を要求されている、と仮定します。　〆

◇『三角形による造形ー長崎地域ー自然、遺跡、日本地域の文化』　2021年(令和3年)1月27日 水曜日

(1) 情報

○ 2021年(令和3年)1月27日 水曜日　長崎新聞　第12面 【文化】

『 隈研吾さん、長崎を語る　個展関連企画でオンライン対談 』

□ (写真) 長崎についてオンラインで語る隈研吾さん＝長崎市、県美術館

日本を代表する建築家、隈研吾さん(66)の仕事や理念などを建築模型や映像などで紹介する個展「隈研吾展」が3月28日まで、長崎市出島町の県美術館で開かれている。関連企画として、隈さんと同展キュレーターの保坂健二朗さん(滋賀県立近代美術館館長)の対談が23日、動画投稿サイト「ユーチューブ」であり、隈さんが長崎への思いを語った。　当初、対談は聴衆を集めて県美術館で実施する予定だったが、新型コロナウイルス禍によりオンラインで実施、公開した。　保坂さんは、隈さんについて「人が集まる場所をつくり続け、日本、アジアが持つ空間の心地よさをヨーロッパなど他の文化圏にも持ち込んで、挑戦状をぶつけているような建築家」と紹介。東京都、高知県に加え、本県が同展の開催地になった理由について、隈さんが同館のデザインを手掛けたこと、本人からも「長崎で開催したい」との意向があったことなどを上げた。　隈さんは、父親が大村市出身であることから、自身のルーツが長崎にあることを明かした。同館については、運河を主役に設定し、美術館を起点として回遊が生まれるまちになるようなデザインを意図したことを語った。また、コロナ禍で注目が集まる隈さんの提起「ハコからの脱出」にも、屋上で景色を楽しめたり、外を散策できたりする同館が該当することに触れた。同展については、「私の人生のエピソードを楽しんでほしい」と話した。　対談終了後、報道陣の取材に応じた隈さんは、「すり鉢の形状など地形が面白い街」などと長崎の印象を語った。「四角い建物を造るだけでなく、地形を生かした、建築のつくりかたがたくさんあるといい。建築自体が地形になれば、長崎らしさが出るのではないか」として、街全体のデザインを意識することが重要との考え方を示した。　(小槻憲吾)

(2) 私達当会の仮定と提案と要望

a. 隈研吾氏は、当該の長崎新聞紙面に掲載された処、「「すり鉢の形状など地形が面白い街」などと長崎の印象を語った。「四角い建物を造るだけでなく、地形を生かした、建築のつくりかたがたくさんあるといい。建築自体が地形になれば、長崎らしさが出るのではないか」として、街全体のデザインを意識することが重要との考え方を示した。」と提示しています。

私達当会は、長崎地域の地形について、平面上、又、立体として、必ずしも広くない範囲に、私達人類の各個体にとっての、主題と背景が迫る処、私達人類は、ここに、顕著に、三角形を形態の要素とした重複と反復、造形を認識し得る、と仮定し、指摘してきました。

私達当会は、地球の自然の造形について、私達人類の人工に顕著に応用される四角形と云うより、三角形によって抽象し得る、と仮定します。

私達当会は、四角形と三角形について、四角形が、より概念的であり抽象的である処、三角形は、抽象でありながら、より具象的である、と仮定します。

私達当会は、長崎地域の地形と遺跡について、長崎地域の地形、その造形について、私達人類に於いて、三角形の認識が容易であり、三角形が、抽象としての図形のうち、より具象的であると仮定し得る処、具象である遺跡と、より具象的であると仮定し得る三角形によって抽象し得る長崎地域の自然と地形は、長崎地域にあって、私達人類の造形に関する受容に於いて、相互に呼応し、共振し、特に、親和性が高い、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類の活動の空間としての長崎地域にあって、私達人類が、遺跡を破壊し、滅失することを止め、之を保存し、当該地域の土木と建築と共に、三角形を造形の要素として、例えば、反復的重層的要素として、連続的に、把握し、即ち、三角形を要素に活用すること、を提案し要望します。

私達当会は、私達人類について、長崎地域に於いて、私達人類の内にあって、宇宙と太陽系のエネルギー系に由来する地球の自然、並びに、遺跡、土木、建築の存在が、その存在の相互の相乗効果によって、相互に呼応

し、連続し、共振し、共鳴し得る、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類の活動の空間について、私達人類の労働に於いて魅力的であるばかりでなく、私達人類の知、即ち、“遊び”、と認識し得る事象に於いても、魅力的であること、を提案し要望します。

私達当会は、例えば、日本地域の文化について、“遊び－奇想－飾り”、と、“軽み－軽妙/洒脱”、を豊かに包摂する処、ここに、その特異性、特質がある、と仮定します。

私達当会は、皆様に、長崎地域の旧市街並びに近郊地域、例えば、私達当会が提案し要望する、長崎地域の桃山期から江戸初期にかけての、長崎代官、頭、村山等安と村山等安が主導した長崎換地に於ける村山等安の支配地と旧内町の範囲に由来すると仮定し得る“キリシタンの里”構想、の地域、又、その周辺地域、に於いて、長崎地域の地形に沿い、之を踏襲し、顕現する、低層建築、又、建築の隈研吾氏が概念する離散的配置による街づくりを提案し要望します。

b. 隈研吾氏は、当該の長崎新聞紙面に掲載された処、「同館については、運河を主役に設定し、美術館を起点として回遊が生まれるまちになるようなデザインを意図したことを語った。また、コロナ禍で注目が集まる隈さんの提起「ハコからの脱出」にも、屋上で景色を楽しめたり、外を散策できたりする同館が該当することに触れた。」と提示しています。

私達当会は、皆様に、長崎県美術館が立地する、長崎市内の長崎水辺の森公園、並びに、水辺のプロムナード、一帯の土地の範囲（出島町～常磐町）に関して、長崎県美術館、長崎市内の長崎水辺の森公園、並びに、水辺のプロムナード、の空間をそのままに、長崎県美術館、に隣接して、長崎市が現長崎市役所等の土地（桜町）に建設設置を構想する「文化、芸術ホール」を、誘致して実現すれば、国道499号線を挟んで隣接し、又は、近接する、長崎市民病院の機能、小曽根築地遺跡、旧外国人居留地、旧長崎バンド、我が国鉄道発祥～東京・官営鉄道高輪築堤遺跡～福岡・九州鉄道発祥、出島遺跡、長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡、長崎の丘、旧市街、キリシタンの里、石と運河の街、鶴の港、海上陸上交通物流、治水、土木造成、養生所/（長崎）医学校等並びに長崎病院遺跡群遺跡、核爆弾被爆遺跡、としての遺跡と歴史的背景、を包摂して、一帯市街が、私達人類市民の抽象文化活動と福祉と幸福の集積する長崎地域の中心地、私達人類市民の拠点としての、さらに大きな、自律的展開が期待できる、と仮定し、その実現を提案し要望します。

私達当会は、当該の私達当会の提案と要望について、之が実現すれば、長崎市内の長崎水辺の森公園、並びに、水辺のプロムナード、一帯の土地の範囲に立地する、長崎県美術館を設計した隈研吾氏の同館設計の概念に沿い、抽象文化創造と発信の拠点、並びに、運河と公園たる私達人類市民の憩いの拠点、を主題に、周辺市街を包摂しする大きな“回遊が生まれるまち”としての実態を前面に現出する事象となる、と仮定します。

私達当会は、皆様に、長崎地域の遺跡、例えば、“小曽根築地遺跡、外国人居留地遺跡、長崎バンド遺跡、我が国鉄道発祥遺跡～東京・官営鉄道高輪築堤遺跡～福岡・九州鉄道発祥遺跡、出島遺跡、長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡、長崎の丘遺跡、旧市街遺跡、キリシタンの里遺跡、石と運河の街遺跡、鶴の港遺跡、海上陸上交通物流遺跡、治水遺跡、土木造成遺跡、養生所/（長崎）医学校等並びに長崎病院遺跡群遺跡、核爆弾被爆遺跡”、について、感知し、受容し、観察し、認知し、概念形成し、考究し、再発見し、調査し、現状保存し、原状回復し、憶測の余地のない再建を行為し、根拠ある再建を行為し、活用し、整備し、公開し、継承すること、を提案し要望します。

◇『労働と知ー遊び』　2021年(令和3年)1月27日 水曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類が、当該の事象に関係し、干渉する、私達人類が主体である事象が、“労働”、であり、私達人類が、当該の事象に関係し得ない、干渉し得ない、人類が主体である事象が、“知”ー“遊び”、である、と仮定します。　〆

◇『人類の労働と知の非対称性、捩れ、記憶と試行錯誤、標準、遊び、構想と装置、遺跡、社会的共通資本』
2021年(令和3年)1月28日 木曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の労働が、事象一般に関係し介入する処、私達人類の知が、私達人類の生命体としての生物とその個体の生理に関係する情報の取得とその情報処理に依存し、これを基盤に、想像を構成する処、私達人類の知は、本源的に、当該の事象の情報の取得とその情報の処理以外の事象一般に関係できず、同時に、私達人類の知は、あらゆる事象に介入する手段を保有しない、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類は、私達人類の内部的な、私達人類の労働と知の連携によって、事象一般に関係して、介入する処、その働きに於いて、私達人類の労働と、私達人類の知は、本源的に、非対称である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類と事象との関係性に於ける、私達人類の労働と、私達人類の知の、非対称性を、改めて、明示的、形式的に、認識し、その働きの混同による人類の行為の結果の捩れに、留意する必要があり、当該の事象に関する私達人類の認識と留意を補佐する構想と装置が必要である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、それを成し得る、即ち、あらゆる当該の事象に関係し、干渉し得る処、本然的に、それ、即ち、当該の事象を把握し、理解することを成し得ない、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類が成し得る事象があるとすれば、それは、記憶と試行錯誤のみである、と仮定します。

私達当会は、私達人類の知について、私達人類の労働が、私達人類の意図に於いて、事象一般に直接に介入する処、私達人類の知は、私達人類の意図に於いて、本源的に、事象一般に関係できず、事象一般を把握できず、あらゆる事象に介入する手段を保有しない、私達人類の知は、私達人類に於いて、その個体間に標準化された形式の範囲で共有する場合がある処、本源的に、自己のみに由来し自己のみに完結する閉じた世界であり、“遊び”、である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界は、私達人類の個体間の事象の共有の為の、様々な個別の標準とその関係性を基盤に成立している、私達当会は、その様々な個別の標準とその関係性について、数理経済学者、宇澤弘文氏が提唱する「社会的共通資本」である、私達当会は、“遺跡、歴史、エスニシティ、伝統、倫理、風土、宇宙主義、宇宙主義経済学、記憶”、について、私達人類の世界の基盤となる様々な個別の標準とその関係性、「社会的共通資本」である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、“遺跡、歴史、エスニシティ、伝統、倫理、風土、宇宙主義、宇宙主義経済学、記憶”、について、之を、「社会的共通資本」と認識し、係る認識に於いて、之を考究し、保存し、活用すること、を提案し、要望します。　〆

◇『新型コロナウイルスと私達人類』　2021年(令和3年)2月2日 火曜日

私達当会は、任意の特定の生命体が敷衍する場合、事象が当該の生命体の生存の態様、生存の環境、に合致している、と仮定します。

私達当会は、新型コロナウイルスの生理について、短い周期で、頻繁に、変異し、生命体としての生存の態様の多様性を、急速に、拡張しつつある、と仮定します。

私達当会は、新型コロナウイルス感染症について、私達人類の抗体反応、その他の方法により、当該のウイルス、並びに、変異したウイルスを絶滅させることが出来なければ、私達人類にとっての、当該の感染症の事態が終息する、と云うより、周期的な当該感染症の拡大が継続する、その可能性を否定できない、私達人類の生理について、当該のウイルスの生理と比較し、多様な動作を構成し、又、精密な複製を造ることに長けている処、変異の回数と程度、即ち、速さ、に於いて、又、反応、にあって、劣後にある可能性があることに、留意が必要である、と仮定します。

私達当会は、私達人類に関する、新型コロナウイルス感染症の事態について、例えば、私達人類の個体に当該のウイルスに対する耐性を生成する等、対症的な方途のみでは、当該の事態は終息しない可能性がある、当該の事態を終息する為には、当該のウイルスの存在自体に関係する必要がある、その可能性がある、と仮定します。　〆

◇『150年前「海上を走る鉄道」――東京"官営鉄道高輪築堤遺跡"を世界遺産とし長崎地域と活用連携を』
2021年(令和3年)2月3日 水曜日

(1) 情報

○ 2021年(令和3年)2月3日(土曜日)　9:06　日本経済新聞　電子版

『 高輪築堤 「全面保存を」　考古学協会が要望書 』

日本考古学協会は3日までに、1872年に日本で初めて鉄道が開業する際に造られ、東京都港区の高輪ゲートウェイ駅周辺で出土した「高輪築堤」の遺構を現地で全面的に保存するよう求める要望書を、JR東日本や国土交通省に提出したと明らかにした。15日までの回答を求めている。

要望書は高輪築堤について「当時の最先端の土木工学を駆使したもので、日本の鉄道文化の始まり」と説明。「国史跡か国特別史跡に相当する」とし、福岡など8県で構成する世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」と比べても「何ら遜色ない」として、JR東が表明している一部の現地保存や移築保存では不十分と訴えている。文化庁や東京都などにも要望書を提出した。　高輪築堤は線路を敷くために浅瀬に盛り土をして石垣で固めたもの。JR東によると、昨年7月、駅周辺の再開発工事中に発見された。港区教育委員会が調査を進めている。同社は付近に高層ビルなどを建設予定で、2024年の開業を目指している。取材に対し「要望書は受領しており、対応を協議中」としている。　(共同)

○ 日本の鉄道の発祥

1865年(慶應元年)　トマス・グラバーが長崎で約1カ月間、英国製機関車「アイアン・デューク号」に客車2両を連結し試乗運転を実施(400mから600mの線路、軌間は762mm、機関車と客車は英国から中国へ輸出予定か)――長崎市「我が国鉄道発祥の地」記念碑あり:長崎県長崎市新地町6丁目(長崎市民病院横歩道)

1872年(明治5年)5月7日　(改暦後の6月12日)　官営鉄道が仮開業――品川から横浜――

1872年(明治5年)9月12日　(1872年(明治5年)12月より太陽暦となり10月14日)　日本初の鉄道開業――東京・新橋(現在の汐留付近)から横浜(現在の桜木町駅)――「鉄道の日」

1898年(明治22年)　九州鉄道開通――福岡市「九州鉄道発祥の地」記念碑あり:福岡市出来町公園―初代の博多駅付近:博多駅近く:博多駅は後に祇園付近に移転、1963年(昭和38年)に現在地へ――　〆

（2）私達当会の仮定と提案と要望

私達当会は、“高輪築堤遺跡”について、2021年（令和3年）12月3日 木曜日　長崎新聞　第22面 【社会】記事 『 日本初の鉄道、遺構出土　　東京 高輪新駅再開発で 』 に於いて、□ （写真） JR高輪ゲートウェイ駅の近くで見つかった日本初の鉄道の遺構「高輪築堤」の一部＝11月28日、東京都港区（JR東日本提供） □（図版） 明治時代の錦絵「東京品川海辺蒸気鉄道之真景」に描かれた高輪築堤（港区立郷土歴史館提供） 、の双方の図版に、「線路の下に舟を通すための水路」、が確認できる処、1870年に着工し「現在の田町駅付近から品川駅付近の約2．7キロにわたって造られた」うち、「1キロ余りにわたり断続的に確認された」現代に遺存する遺跡に関して、「明治末期から昭和初期にかけての埋め立て工事」の施工者が、建造物の特徴的な構造に留意して、“意図的に残した”、可能性を包含している、ならば、現代の私達人類は、人倫に於いて、先人の意図を汲み、之を、全面的に現状保存して、恒久的な保存の為の伝統的な技術による補助的な措置を講じ、後世に継承し、且つ、広く活用しなければならない、と仮定します。

私達当会は、皆様に、2020年7月にJR東日本が高輪ゲートウェイ駅前を中心に進める品川再開発計画の工事現場で、2020年7月に発見され、港区教育委員会が調査を進めており、JR東日本が、2020年（令和2年）12月2日 水曜日に発表し、2021年（令和3年）1月8日 金曜日に公開された、“高輪築堤遺跡”について、長崎地域と官営鉄道に関する日本の鉄道の発祥の由来により、長崎地域と関東地域とが活用連携して、相互の交流人口の拡張に繋げ、並びに、日本考古学協会、九州考古学会、長崎県考古学会、その他の学会等と連携して、国史跡、又は、国特別史跡、さらに、「明治日本の産業革命遺産」の追加資産登録、その他の世界遺産登録、を実現し、私達人類の相互の交流の促進に努めること、例えば、長崎地域の鉄道関連の歴史上の経緯を再確認すること、長崎地域の鉄道関連遺跡の実態調査と保存と活用とそのための措置を広く行為すること、又、JR東日本、国土交通省、文化庁、東京都、港区等に日本各地の“高輪築堤遺跡”を含む関連遺跡の調査と全面保存と活用連携、関連機関による遺跡の指定や登録、認定、掲載等、の要望書を提出し、陳情すること、その他、その為の措置を講ずること、を提案し要望します。　〆

◇ 『私達人類の世界、私達人類の行為』　　2021年（令和3年）2月4日 木曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の歴史は、私達人類の任意の特定の個体、並びに、集団の、相互の駆け引きの物語であると同時に、私達人類の任意の特定の個体、並びに、集団が、其れ迄に、出来なかった事象を、成すようになった物語でもある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界に於いて、当該の事象が、実現しない、出来ないのは、私達人類の任意の特定の個体、並びに、集団が、当該の事象に関して、興味がないか、又は、価値を認識しないか、又は、興味があり、価値を認識しても、何らかの由来により、行為する意思がないか、である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類のアジアの世界では、『書経』太甲下篇に、「弗爲胡成」（為さずんばなんぞ成らん）、日本地域では、約450年前、武田信玄（1521－1573）が、「為せば成る、為さねば成らぬ成る業を、成らぬと捨つる人のはかなき」、約250年前、日向国高鍋藩より出羽国米沢藩に入った九代藩主上杉鷹山（1751－1822）が、「なせば成る なさねば成らぬ 何事も 成らぬは人の なさぬなりけり」（『上杉家文書』国宝－上杉鷹山書状）、と私達人類の世界にあって、後世に伝えた、と云う、と知ります。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、果たして、後退せずに進歩している、と表象し得るでしょうか？、と仮定します。　〆

◇『遺跡と私達人類の世界に於ける現代』　2021年(令和3年)2月7日 日曜日

(1) 情報

○ 2021年(令和3年)2月7日(日曜日) 長崎新聞 第10面 【メクル】
≪ながながさきしんぶんジュニア版 メクル meQru 第522号 2021年2月7日(日)≫

『原始人の暮らしって？ 〖柿泊遺跡(かきどまりいせき) 長崎市総合運動公園〗
旧石器～縄文時代の石器出土、たき火跡も 弓で狩り、ドングリ煮てた？』

陸上や野球など各種スポーツでにぎわう長崎市柿泊町の市総合運動公園ができたのは1996年。施設ができる前は畑や森が広がっていました。公園の整備に先立ち、大規模な調査が行われ、旧石器時代から縄文時代にかけての石器など約1万点が出土。あまり知られていませんが、「柿泊遺跡」と呼ばれています。どんな出土品が見つかったのでしょう。また、私たちの祖先である原始人はどのように暮らしていたのでしょう。資料を基に歴史をひもときます。　(中村修二)

□《ズーム》
・[写真] スポーツの拠点施設としてにぎわう長崎市かきどまり陸上競技場。この一帯は原始人が暮らしていた。
・長崎市総合運動公園　長崎史北部の高台にあるスポーツとレクリエーションの拠点施設。陸上競技、野球場、テニスコート、サッカーやラグビーができる補助競技場などがあり、県総合体育大会など大規模な大会が開かれている。多目的広場や大型遊具もある。広さは約43ヘクタール、標高約150メートル。1996年供用開始。

□ [写真] 柿泊遺跡全景(1993年撮影)　E地区、D地区、湿地、C地区、B－3地区、B－4・5地区、B－2地区、B－1地区　※B～Eは発掘調査地区

□ [写真] 市総合運動公園全景(2021年撮影)　E地区、D地区、湿地、C地区、B－3地区、B－4・5地区、B－2地区、B－1地区

市教育委員会は、公園整備に着工する前の93年から2年間にわたり、埋蔵文化財発掘調査を実施しました。手作業で探した結果、B4・5地区(図参照)などから旧石器時代のナイフ形石器などが出土。D地区からは縄文時代の石器類のほか土器片、たき火をした炉の跡も見つかっています。　出土品は約2万年前から約7千年前のものが中心で、管理事務所内の「柿泊遺跡展示コーナー」には、ナイフ形石器や石槍、矢の先端に付ける石鏃などの狩りの道具、動物の解体などに使われた石匙、石斧など約50点を展示。社会や歴史の教科書に載っているようなものばかりです。
報告書をまとめた市文化財課の宮下雅史さんは「湿地帯の周囲の緩やかな斜面は泥がたい積しやすい状態で、古い地層の上に新しい地層が積み重なり、良好な形で遺物が残っていました。長崎市内では旧石器時代の遺跡の調査例が少なく、当時の人々の活動を知ることができる遺跡」と話しています。　県内では、佐世保市吉井町にある旧石器時代から縄文時代の洞窟遺跡「福井洞窟」が有名です。日本最古級の土器などが出土し、国指定史跡になっています。

◆　◆　◆

原始人はどのように暮らしていたのでしょうか。日本考古学協会員で、前長崎県考古学会長の下川達彌さんは次のように説明します。　2万年前は氷河期。日本はアジア大陸とつながっていて、各地にナウマンゾウがいた時代でした。人類は大型の動物を狩猟していた可能性があります。1万数千年前になると、気温の上昇で氷が解け、海水面が100メートルほど上昇。日本は大陸から離れて島になりました。温暖になるにつれ動物は小型化したとみられ、原始人は動きが速い動物を捕獲するため弓矢を作りました。　植物も変わりました。旧石器時代には寒冷地に育つクマザサなどが少量見られますが、縄文時代には、シイ、クスノキ、ブナなど照葉樹林が登場。炉跡があるので、ドングリなどを煮るために火に掛けていたのかもしれません。　柿泊遺跡の出土品は、縄文時代まで。その後の弥生時代以降の遺物はほどんどありません。生活の拠点は、海岸部移ったとみられます。獲物をとりすぎて、食糧不足に陥った可能性も考えられます。　下川さんは「柿泊遺跡の遺物から、時代の移り変わりや生活の進歩も分かります。人類は気候、環境の変化に対応し、今日まで歴史を築き上げてきたのです」と説明しています。

□ [写真] D地区の発掘調査風景。 ここからたくさんの石器や土器片が見つかりました。 ＝長崎市柿泊町(1994年撮影、市文化財課提供)

□ ［写真］ 石槍（手前）と石鏃

□ ［写真］ 柿泊遺跡で見つかったナイフ形石器

□ ［写真］ 原始人も食べていたかもしれないドングリの実

□ ［写真］「柿泊遺跡展示コーナー」には出土品やパネルが並んでいます。 ＝長崎市総合運動公園内の管理事務所　〆

○ 2021年（令和3年）2月7日 日曜日　長崎新聞　第18面 【ワイド企画】　≪読書≫

『 世界遺産　キリシタンの里 』（本馬貞夫著）　　［「歴史の旅」の同伴者に］

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」はピラミッドや万里の長城のように一目で価値を理解できる世界遺産ではない。構成資産の大半は一見すると普通の地方集落だ。　遺産の価値は「潜伏キリシタンの信仰」。禁教令の下、ひたすら隠し続けた信仰だから現地を訪ねても見えにくい。だが、歴史的な背景や信仰をつないだ人々の思いを知った上で遺産を歩くと、土地の風景が「真実」を語りかけてくるような気がする。来訪前の学びや現地のガイドの案内が重要な遺産なのだ。　本書は来訪前の「予習」に、現地での手引きに、来訪後の「学び直し」に、いずれの場面でも重宝する中身の濃い1冊だ。　著者は県の長崎学アドバイザーとして知られる歴史研究者。本書は、2018年から2年余り、中日新聞・東京新聞系列紙に連載した寄稿を再構成した。　著者は現地を訪ねて人に触れ、幅広い文献を基に、日本のキリシタン史と、12資産の歴史や特色をとうとうと語る。時に裏話の「横道」に入るのも楽しい。分かりやすく丁寧な説明は、長崎学の「伝道者」の役割を務めてきた著者の真骨頂だ。　長崎・外海地区や平戸・生月島と並ぶ潜伏信仰の中心地だった長崎・浦上地区は構成資産に含まれていないが、章を立て手厚く解説している。　浦上が資産から漏れている理由や、浦上の村人に初めてキリシタンの嫌疑がかかった江戸後期の事件「浦上一番崩れ」に関する考察は興味深い。やはり浦上は遺産のストーリーに欠かせない舞台だと痛感させられる。本書の重要なメッセージの一つであろう。　遺産を訪ねると心を洗われる思いがするのはなぜか。それは人里離れた土地の自然の美しさだけが理由ではない。著者は「人が良くなる空間」と呼ぶ。理由を知るには歴史を学び、現地を訪ねるのが一番。その際、本書は格好の同伴者となる。　（松尾潤・長崎新聞論説委員）　（九州大学出版会・1980円）

『 レンブラントの身震い 』（マーカス・デュ・ソートイ著・冨永星）　　［創造性めぐる最高洞察］

人工知能（AI）の発達によって人間の仕事が減ると懸念される今、「創造性」が人間の最後の砦として注目されている。脳の創造性を生かせば、AIに負けない能力を発揮できる。本書はそのような私たちの希望が、果たして維持できるかどうかを検証する。　AIにレンブラントの絵を学習させると、一見本物と区別がつかない「新作」ができる。だがそれでAIが創造の秘密を解き明かしたと言えるのか。多くの人はその“新作”絵画の出来栄えに衝撃を受けるが、評論家は本物と向き合ったときに人が感じるおののき、「レンブラントの身震い」がないと指摘する。疫病や老齢といった、芸術をかくあらしめたさまざまな人生の経験がなければ、真の芸術は不可能だというのである。コンピューター囲碁からアート、数学の証明、そして自然言語処理までーー。AIと人間の創造性についてオックスフォード大学で数学を研究する著者の洞察は、深く、スリリングだ。　創造性の背後にある情報の符号化、「コード」の大切さに人類で最初に気づいたのは19世紀に機械式計算機のプログラムをしたエイダ・ラブレイスだった。一方、著者は、芸術家がインスピレーションで生み出しているかに見える作品には、実は隠された脈絡と論理、つまりコードがあると指摘する。　作曲にも強い興味を持つ著者による、音楽を支えるコードの分析は、読み応えがある。バッハのような大作曲家の作品に秘められた数学的な構造を解き明かす叙述は、とりわけ素晴らしい。新しいものを生み出す力の中心にある「人間のコード」の正体をめぐって、「素数の音楽」など多くの世界的ベストセラーを送り出してきた著者の知性と筆がさえ渡る。　AIは「身震い」を引き起こすほどの人間の創造性に追いつき、追い越すことができるのか？　この研究の問いに対する、現時点での最高の洞察が本書の中にある。　（茂木健一郎・脳科学者）　（新潮クレスト・ブックス・2750円）

<u>（2）私達当会の設問</u>

私達当会は、本項の情報より、“遺跡と私達人類の世界に於ける現代”、を主題として、次の設問を提示します。

① 私達人類は、私達人類の世界にあって、私達人類の任意の特定の行為に於いて、遺跡たる事象に関係して、例えば、長崎市総合運動公園たる柿泊遺跡を前に、何らかの、既存の「教科書」と「報告書」と「他者の見解」の

存在と意義を超越する、自らの、感知、感得、認知、認識、体系、理解、私達人類のコードの認知発見、再生産、循環、を導き、当該の行為を、成し得るでしょうか？

② 私達人類は、私達人類の世界にあって、私達人類の任意の特定の行為に於いて、例えば、長崎市総合運動公園たる柿泊遺跡を前に、当該の事象を、「長崎市総合運動公園」として認知し認識しするでしょうか？、それとも、「柿泊遺跡」として認知し認識しするでしょうか？

③ 私達人類は、私達人類の世界にあって、私達人類の任意の特定の行為に於いて、遺跡たる事象に関係して、遺跡たる事象の空間にあって、之を、「人が良くなる空間」、として維持できているでしょうか？、私達人類の任意の行為に於いて、遺跡たる事象に関係して、遺跡たる事象の空間にあって、之を、“人が悪くなる空間”、へと変換してはいないでしょうか？

④ 私達人類は、私達人類の世界にあって、「AI」と「人間のコード」を用いて、「新作」である“遺跡”、を創造し得るでしょうか？

⑤ 私達人類が、私達人類の世界にあって、「AI」と「人間のコード」を用いて創作した、「新作」である“遺跡”、は、私達人類に対し、私達人類にとっての遺跡としての機能、作用、を果たし得るでしょうか？

⑥ 私達人類が、私達人類の世界にあって、「AI」と「人間のコード」を用いて創作した、「新作」である“遺跡”、は、私達人類に対し、私達人類にとっての遺跡としての機能、作用、を果たし得るとすれば、真正である遺跡に関する私達人類にとっての遺跡としての機能、作用、と、「新作」である“遺跡”に関する私達人類にとっての遺跡としての機能、作用、とは、何がどう同じ、又、何がどう異なる、でしょうか？

⑦ 私達人類は、私達人類の世界にあって、私達人類の任意の行為に於いて、遺跡たる事象に関係して、私達人類にとって唯一の存在である任意の特定の個別の遺跡を前に、当該の遺跡の存在を無為と成さず、多様に十全の意に於いて、遺跡を、私達人類の存在と行為にとっての機能として存在させ、即ち、その機能を認識し、構成し、創造し、付与し、作用させ、即ち、活用し、即ち、又、“遺跡に、人々の生活の中での機能を与えるような行為を採る”、そのことにより、私達人類の個体が、当該の行為を成し得ている実態と実相がある、と解釈し得るでしょうか？

<u>（3）私達当会の仮定と提案と要望</u>

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類の任意の特定の行為に於いて、遺跡たる事象に関係して、私達人類にとって唯一の存在である任意の特定の個別の遺跡を前に、当該の遺跡の存在を無為と成さず、多様に十全の意に於いて、遺跡を、私達人類の存在と行為にとっての機能として存在させ、即ち、その機能を認識し、構成し、創造し、付与し、作用させ、即ち、活用し、即ち、又、“遺跡に、人々の生活の中での機能を与えるような行為を採る”、そのことにより、私達人類の個体が、当該の行為を成し得ている実態と実相を形成すること、を提案し要望します。

私達当会は、遺跡について、凡そ、之を、「人が良くなる空間」、である、と、即ち、遺跡と私達人類との関係性に於ける性格、又は、遺跡の私達人類への作用、遺跡の私達人類にとっての機能、遺跡の“人々の生活の中での機能”、に於いて、仮定します。

私達当会は、遺跡について、遺跡が、「人が良くなる空間」、で在り得る最小限の前提に関して、之を、遺跡の、遺跡としての、本源的な、“真正性”、と、“完全性”、である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類が、任意の特定の事象の「真正性」並びに「完全性」に対して、本然的に、より真摯な認識と留意と行為を選択する必要がある可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類が、例えば、遺跡たる事象にあって、その「真正性」並びに「完全性」に対して、私達人類の日常の生活のうちに、本然的に、より真摯な認識と留意と行為を選択すること、を提案し要望します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類が、私達人類の世界にあって、私達人類の任意の特定の行為に於いて、遺跡たる事象に関係して、例えば、遺跡たる事象の空間に対して、之を、「人が良くなる空間」、と

して維持すること、を提案し要望します。　〆

◇『私達人類の遺跡たる事象に関する行為、使命』　2021年（令和3年）2月8日 木曜日

2020年（令和2年）11月25日（水曜日） 長崎新聞 第14面 【文化】 記事 〖長崎歴文博15周年シンポ〗『アクティブに果敢な挑戦を 「バーチャル総合博物館」提案も』 は、2020年（令和2年）11月14日（土曜日）に、長崎歴史文化博物館（水嶋英治館長）で開かれた開館15周年記念講演・シンポジウム に於いて、その講演で、島谷弘幸九州国立博物館館長は、「・・・収蔵品数を伸ばしていくというのは博物館の使命。・・・」、パネル討議で、小坂智子県美術館館長は、「・・・歩みを止めることなく、美術館のよって立つ所としてコレクションを継続的につくり上げていくことがとても大事。・・・」、と言及していることを伝えています。

私達当会は、芸術とその記録品、美術品、工芸品、工作物、筆記跡、記憶とその記録品、遺跡、遺構、遺物、について、夫々に、場ー材料ー媒体が異なる処、何れも、私達人類の行為の痕跡であり、私達人類に関する文化事象である、と仮定します。

私達当会は、芸術とその記録品、美術品、工芸品、工作物、筆記跡、記憶とその記録品、遺跡、遺構、遺物、について、“行為”、“痕跡”、“記憶”、“生と死”、が、私達人類に於いて、当該の事象に、暗黙的、明示的、形式的、本源的に、共通する要素であり、之により、私達人類は、暗黙的、明示的、形式的、必然的に、当該の事象にあって相互に、親和性を、感知し認識し得る、と仮定します。

私達当会は、事象の活用について、芸術とその記録品、美術品、工芸品、工作物、筆記跡、記憶とその記録品、遺跡、遺構、遺物、並びに、その他の事象に関する、私達人類にとっての、本源的な、親和性、が、私達人類にとっての、根源的な、事象の活用の契機となる、と仮定します。

私達当会は、皆様に、遺跡について、私達人類が、遺跡たる事象にあって、概念形成、調査、考察、再発見、現状保存、原状回復、憶測の余地のない再建、根拠ある再建、を手段として、土地、空間、国土、に対する、遺跡の領域の拡張を、私達人類の「使命」として、之を、私達人類の活動の空間に於いて、歩みを止めることなく、私達人類のよって立つ所として、継続的に、行為し、実現し続け、且つ、之を活用すること、を提案し要望します。
〆

◇『遺跡の保存と活用、私達人類の使命としての把握』　2021年（令和3年）2月9日 金曜日

私達当会は、私達人類の世界にあって、例えば、日本地域に包含される長崎地域に於いて、遺跡の保存と活用、その深化と拡充、に関して、之を、「使命」、として取り組み、行為する、概念、思想、学問、学術、哲学、芸術、人材、方法、制度、組織、理解、機運、が欠落している可能性がある、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、遺跡の保存と活用、その深化と拡充、に関して、之を、私達人類が、私達人類として生きる、その者の、「使命」、即ち、私達人類の、基層的な、権利、並びに、義務として裏付けられた、又、責任でもある、「使命」、として取り組み、行為すること、を提案し要望します。
〆

◇『私達人類の必然性、私達人類の使命』　2021年(令和3年)2月9日 金曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の生命体に特徴的な、必然性、又は、使命、は、概念を形成し、体系化し、思想し、理念を構成し、意義と価値と計画と技術を想像することよりも、ウイルスが盛んに“変異”することと同じ意味に於いて、盛んに、様々に、“遊び”、“創造”、すること、また、そのためのより多様で広範な諸般の関係性としての環境を整えること、である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の生命体としての必然性よりも射程の短い、私達人類の想像、に由来する理念によって、私達人類の必然性に対して、疑似的な動作を構成する可能性がある、と仮定します。

私達当会は、皆様に、概念を形成し、体系化し、思想し、理念を構成し、意義と価値と計画と技術を想像し、よって、私達人類、並びに、その他の事象に、影響し、改変し、作用し、又は、数量に由来し専一のベクトルに向けて選択し、動員するよりも、私達人類の個体が、盛んに、様々に、“遊び”、“創造”、すること、又、そのためのより多様で広範な諸般の関係性としての環境を整えること、を提案し要望します。　〆

◇『事象の射程、遺跡、私達人類の想像』　2021年(令和3年)2月9日 金曜日

私達当会は、遺跡について、遺跡は、その存在に於いて、数百年、数千年、数万年、数百万年の射程がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、主体的に、概念し、構想し、計画し得る射程は、200年でさえ、不確実である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、遺跡と、私達人類の想像、意図、計画との関係に関して、圧倒的な、その射程の差異によって、同じ示標、標準、概念による、即ち、調整は成立しない、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、任意の特定の事象と、任意の特定の事象との関係について、調整が成立するのは、事象に関して、双方が、対等である、又、同じ示標を適用し得る場合に於いて、である、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、遺跡と、私達人類の想像、意図、計画との関係に関して、私達人類は、当該の遺跡を、私達人類の想像、意図、計画の下に置き、概念し、解釈し、行為してはならない、私達人類が、遺跡たる事象を前に為す行為は、私達人類種の後世の、私達人類の個体に、当該の遺跡への鑑賞と解釈の自由を確保し、之を、継承するのみである、と仮定します。　〆

◇『私達人類の行為、その在り方』　2021年(令和3年)2月10日 水曜日

(1) 情報

○ 2021年(令和3年)2月10日(水曜日) 日本経済新聞 第1面　『連載記事』
≪東日本大震災10年 検証・復興事業 ③≫

『まち再建、定石のその先に　かさ上げ造成 3割空き地』

「176平方メートル、795万円」「217平方メートル、990万円」――。岩手県大槌町の「空き地バンク」のサイトに載った町役場周辺の区画図に、売却・賃貸物件の赤い印が30個近く並んでいる。町は土地取得や住宅建設に200万円以上の補助金を出すが「住宅再建のニーズは一段落し、空き地はなかなか埋まらない」と担当者はこぼす。　2011年の東日本大震災で町の中心部は高さ10メートルを超す津波にのまれ、壊滅状態となった。前年に過疎地域に指定されていた町は、役場周辺の地区を震災前の半分以下に集約し、161億円かけて2.2メートルかさ上げした。　[原点は関東大震災]　その間にも人口減は加速し、20年春の段階で造成地の3分の1は使う当てがないままとなっている。15年まで町長を務めた碇川豊氏は「町内に就労先となる産業が少なかったことも影響した」と話す。　岩手、宮城、福島3県の津波被災地では、浸水した地域をかさ上げし、土地や道路の形を整える「土地区画整理事業」が広く行われた。対象は沿岸部の21市町村、計1890ヘクタールで東京都新宿区の面積に匹敵する。総事業費は20年6月時点で4627億円に上り、ほぼ全額が復興交付金などの国費でまかなわれた。　区画整理による「復興」の原点は1923年の関東大震災に遡る。　震災で旧東京市の4割強の面積が焼失した後、帝都復興院総裁に就いた後藤新平を中心に、復興事業として初めて大規模な区画整理が行われた。靖国通りや昭和通りなどの幹線道路と共に街並みが整備され、東京は10年足らずで近代都市に生まれ変わった。　そのノウハウは戦後、空襲で焼けた各地の市街地整備にも生かされ、区画整理は復興事業の定石となってきた。　国土交通省の2020年5月時点の調査によると、3県で区画整理が行われた65地区の宅地の32%は未活用の状態だった。未活用が5割を上回る地区も6つあり、岩手県陸前高田市の今泉地区では7割近かった。　[止まらぬ人口減]　岩手県沿岸部の12市町村の人口は、震災前年から20年までで17%減少。震災後に内陸部に移った地権者の多くは、仕事や子どもの通学を理由に戻っていない。固定資産税の負担などを懸念して土地を売りに出すケースも相次ぐ。　「右肩上がりの時代に確立された復興のあり方が、現状にそぐわなくなっている」と、日本大の大沢昌玄教授(都市計画)は指摘。「将来像を複数の自治体で共有し、広域的な視点で復興事業の対象を精査すべきだ」と話す。　今回も区画整理によって街の魅力が高まった例はある。宮城県名取市の閑上地区では区画整理とともに小中一貫校や保育所が重点的に整備され、宅地の分譲希望者が殺到して若い世代も増えた。　震災の痛手を乗り越え、かさ上げによって安全性を高めた土地をどう生かすか。国全体が人口減に直面するなか、定石にとらわれない新しい街づくりの模索はこれからも続く。　(関連記事を社会面に)

□ [写真] 津波の被害から再建が進むが、空き地が目立つ岩手県大槌町の中心部 (3日)　〆

○ 「耕地整理」、「土地区画整理」、「都市政策」、「都市計画」の推移　2021年(令和3年)2月10日 水曜日

《耕地整理》～《土地区画整理》

・古代～中世ー「条里制」ー(土地区画制度:土地を1町(約109m)間隔の方格線により正方形に区分)

・江戸時代ー「新田開発」ー(湖、沼、潟、浅瀬、丘陵、台地、谷地、の、埋立、干拓、開拓 : 江戸初期1800万石、江戸中期2500万石、江戸後期3000万石)

1757年　『人間の友、あるいは人口論』ミラボー (V. R. m. de Mirabeau:仏:重農主義者) civilisation (名詞:文明)の語を記載　――16世紀後半からciviliser(動詞:開花する、洗練する)が使用される、civil (形容詞:市民の、礼儀正しい)、civilité(名詞:礼儀)――ラテン語 civis(市民)、civilis(市民の)、civitas(都市・国家)――「つまり、「文明」の語源は古代ギリシャ・ローマの市民・都市国家の概念を受け継いでいると言えよう」:『文明の代謝史観序説』吉野敏行 人間と環境 6 (2015) より抜粋、西川長夫『国境の越え方』筑摩書房 1992年 p124ーp132 ――　――「啓蒙思想 (英:Enlightenment、仏:Lumières、独:Aufklärung)」――

1789年5月5日～1799年11月9日　仏 フランス革命

1792年4月20日～1802年3月25日　仏　フランス革命戦争　フランス革命政府（ジロンド派内閣）がオーストリアへ宣戦布告　（交戦勢力：神聖ローマ帝国、プロセイン王国、グレートブリテン王国、ロシア帝国、フランス王党派、スペイン王国、ポルトガル王国、サルデーニャ王国、ナポリ王国、オスマン帝国、ネーデルラント連邦共和国、アメリカ合衆国 ⇔ フランス共和国、姉妹共和国、United Irishmen、Polish Legions、デンマーク＝ノルウェー）

1793年1月　仏　国民公会が国防委員会（後の公安委員会）を設置

1793年2月24日　仏　国民公会が「30万人募兵」

1793年8月23日　仏　国民公会が「国家総動員」発令　～「徴兵制度」施行（各階層の国民を平等に徴兵――国民皆兵）

1796年3月　仏　ナポレオン、対オーストリア、第一次イタリア遠征　（ナポレオン戦争：1796年3月～、1799年11月9日～、1815年11月20日）

1797年10月17日　仏・墺　カンポ・フォルミオ条約　第一次イタリア遠征、終結

1799年11月9日　仏　ブリュメール18日のクーデター（ナポレオン・ボナパルトが総裁政府を打倒し第一コンスル（統領）へ就任）

1802年2月9日　仏・墺　リュネヴィルの和約

1802年3月25日　仏・英　アミアンの和約　フランス革命戦争終結　フランス側の勝利

1803年5月16日　英　フランスに宣戦布告　（――ナポレオン戦争）

1804年5月28日　仏　ナポレオンが帝政の開始を宣言

1804年12月2日　仏　ナポレオン　戴冠式を挙行（フランス皇帝ナポレオン1世）

1815年11月20日　第二次パリ条約　ナポレオン戦争終結　ナポレオン失脚

1853年～1870年　17年間　パリ改造
第二帝政：ナポレオン3世とセーヌ県知事ジョルジュ・オスマンによる――近代都市のモデルとして見なされた――整備されたパリの街は「世界の首都」と呼ばれた――スイスの建築史家ジークフリート・ギーディオンはその著書『空間・時間・建築』のなかで、改造後のパリの街を「まるで衣装棚のように、画一的な大通りの裏側にあまりにもひどい乱雑さが隠されている」と批判している。――：Wikipedia「パリ改造」最終更新 2020年3月17日（火）09:50 より
〔パースペクティブ〕・・・・・　5. パリ改造の各事業の概要　（1）道路事業　・・・・・　（2）公園事業　ナポレオン3世はパリの過密状態を改善するための方策として広幅員の街路や広場を設置することに加え、新鮮な空気の補給源として公園を整備することにも非常に熱心であった。ロンドン亡命中に造園学を学び、パリにもハイドパークやリージェントパークのような広大で美しい公園を設置することを熱望し、ブローニュの森を左肺、ヴァンセンヌの森を右肺とみなす人体モデルを念頭に置き、構想を練った。　オスマンはセーヌ県知事に就任すると、ジロンド県知事の時代に知己を得ていた土木技師アルファンを公園植樹局長に任命、既に着工されていたものの工事が進んでいなかったブローニュの森を公園として整備することを命じた。アルファンは隣接するロンシャン平原も公園に編入し、セーヌ川に達するエリアまで植林を行い、1858年までに864haの森林公園として概成させた。その際の資金調達方策として、公園や関連道路の整備により利用価値が向上する隣接エリアの土地を取得・造成し、道路事業の場合と同様、建築条件を付して売却、開発利益を吸収している。また、ロンシャン競馬場を建設し、その売上の一部を公園の維持管理費用に充当するなど様々な工夫をこらしている。　その後、オスマンとアルファンは右肺と位置付けられたヴァンセンヌの森（800ha）、シャンゼリゼの並木道、モンソー公園、ビュット・ショーモン公園等の整備を行い、パリを美しくアメニティーに富んだ都市に改造している。　（3）上下水道事業・・・・・　：『PR/Review　国土交通政策研究所報　第50号　～2013秋季～　国土交通省　国土交通政策研究所』掲載

1859年 『バルセロナ市の近隣の地図とその都市拡張案』 イルダフォンス・サルダー(Ildefons Cerdà i Sunyer:カタルーニャ語)
(イルダフォンス・サルダー氏(1815年12月23日－1876年8月21日)の『バルセロナ市の近隣の地図とその都市拡張案』(cat. no. 1－2)の紹介) ――“出品作の図面(cat. no. 1－2)は1859年に制作された都市拡張プランのリトグラフによる複製(オリジナルはマドリードの王立サンフェルナンド美術アカデミー所蔵)。画面やや左下寄りに濃く見えるハート形のエリアが当時のバルセロナ市である。1859年当時、サンツ(市の左上)、グラシア(市の真上)、サンタンドレウ(市の右上遠方)など周辺の集落には工場が建てられ労働者たちも多く暮らしていたが、市と周辺の集落との間にはほとんど何もない野原が横たわっている状況であった。サルダーの案は、基本的に20メートル幅の道路で厳格に区切られる正方形(一辺113メートル)の街区がその空白のエリアに整然と展開するグリッド状の都市空間を誕生させるというものであり、現在のバルセロナの都市の形状は基本的にこれに従ったものとなっている。各街区の四隅の角はそれぞれ45度の角度で隅切りされスムーズな交通を実現させるよう配慮されており(サルダーは道路に汽車を走らせることを想定していたという)、各街区の建物も基本的に四辺のうちの二辺のみに限定して建てられるよう計画されていた。敷地の残りのスペースは緑化され、計画通りの都市空間が実現した暁には日差しに恵まれ、心地よい風が吹き、豊かな緑に囲まれた田園都市が誕生するはずであった。現実には土地の生産性を最大化しようと望む地権者たちの思惑により、四辺すべてに建物が建てられたことはおろか、中庭のスペースまでも建築物で埋め尽くされ、日当たりも風通しも悪い劣悪な環境が生み出され社会問題化することになる。”
“サルダーは都市計画に関する理論構築の必要性を感じ、バルセロナの都市拡張プランの提出に合わせ『バルセロナの改善と拡張に適用された都市建設理論』(1859年) を発表、その後も自らの経験をフィードバックし続け、1867年に『都市化の一般理論』を発表する。この著作は「ウルバニサシオン(Urbanization／都市化)」という概念を創出し、都市空間の物理的な側面のみならず、その開発・整備を推進するための法的、経済的側面をも視野に入れた理論の構築を目指してきたサルダーによって生み出された、世界初の都市計画の一般理論書であると言われている。”
参考資料:『BARCELONA THE CITY OF ARTISIC MIRACLES THEESSENCE OF THE CATALONIAN MODERN ART FROM THE MODERNISME TO THE AVAT－GARDE:奇跡の芸術都市 バルセロナ展:図録』(第一会場 2019年4月10日(水)－6月9日(日) 長崎県美術館、図録 発行 神戸新聞社 2019 (P57-P58))

・江戸時代幕末－「畦畔改良」

1871年(明治4年)9月13日、1873年(明治6年)4月30日～1894年(明治27年) 日清修好条規 署名、天津、発効、日清戦争により失効

1872年(明治5年) “耕地整理” ――静岡県山名郡彦島村 名倉太郎馬 が実施――「静岡式」－「畦畔改良」(正方位、スジ植え(正条植え)等)

1874年(明治7年)5月6日～1874年(明治7年)12月3日 征台の役(台湾出兵)

1875年(明治8年)9月20日～1875年(明治8年)9月22日 江華島事件

1876年(明治9年)2月26日 日朝修好条規 署名 発効、李氏朝鮮 江華府

1876年(明治9年)8月21日 イルダフォンス・サルダー(Ildefons Cerdà i Sunyer:カタルーニャ語:1815年12月23日－1876年8月21日)、死去

《東京市区改正》 ――(都市計画、都市改造事業)

1884年(明治17年) 「東京市区改正審査会」内務省に設置 (計画案は、鉄道、築港、公園、を含む)

1887年(明治20年) “耕地整理” ――石川県河南郡野々市村 模範農場で実施――「石川式」－「田区改正」(区画拡大整形)

1888年(明治21年) 「東京市区改正条例」公布、「東京市区改正委員会」設置

1889年(明治22年) 「東京市区改正委員会」が計画案(旧設計)を公示し事業を開始。

1894年(明治27年)7月25日～1895年(明治28年)4月17日　日清戦争(日清講和条約(下関条約))

1895年(明治28年)6月17日　日本は、台湾、台北にて、始政式を挙行。日本、台湾総督府による統治を開始。

1898年(明治31年)3月2日　後藤新平、台湾総督府民政局長に任官される。

1899年(明治32年)「耕地整理法」制定　(第一条:「耕地の利用を増進する目的を以て其の所有者共同して土地の交換若は分合、区画形状の変更及道路、畦畔若は溝渠の変更廃置を行うを謂う」)

1900年(明治33年)「耕地整理法」施行

1902年(明治35年)　(独)「アディケス法」

1903年(明治36年)　東京市区改正の事業の計画を大幅に縮小(新設計)する。

1904年(明治37年)2月～1905年(明治38年)9月　日露戦争(ポーツマス条約)

1905年(明治38年)「耕地整理法」改正　(灌漑・廃水を工種に加える、区画整理事業より灌漑廃水事業が主流となる)

1906年(明治39年)　後藤新平、南満州鉄道初代総裁に就任。

1908年(明治41年)7月14日～1911年(明治44年)8月30日　後藤新平、第2次桂内閣で逓信大臣

1908年(明治41年)12月5日～1911年(明治44年)8月30日　後藤新平、初代内閣鉄道院総裁

1909年(明治42年)「耕地整理法」改正　(「耕地整理組合」による施工)

1910年(明治43年)8月29日～1945年(昭和20年)9月9日　韓国併合、日本の朝鮮総督府による統治。

1912年(大正元年)12月21日～1913年(大正2年)2月20日　後藤新平、第3次桂内閣で逓信大臣

1914年(大正3年)7月28日～1918年(大正7年)11月11日　第一次世界大戦

1914年(大正3年)「耕地整理法」改正　(湖沼海面の埋め立て、干拓も耕地整理法の適用を受けることとなった。土地改良、開拓の全般に亘る制度が一応確立されたことになる。)

1914年(大正3年)　東京市区改正の事業がほぼ新設計の通りに完成する。

1916年(大正5年)10月9日～1918年(大正7年)4月23日　後藤新平、寺内内閣で内務大臣

1918年(大7年)4月23日～1918年(大正7年)9月29日　後藤新平、寺内内閣で外務大臣

1919年(大正8年)4月5日　法律第36号「都市計画法」公布

1918年(大正7年)11月3日　第一次世界大戦、「ヴィラ・ジュスティ(Vila Giusti)休戦協定」調印、イタリア王国とオーストリア＝ハンガリー帝国の休戦協定

1918年(大正7年)11月4日　第一次世界大戦、「ヴィラ・ジュスティ(Vila Giusti)休戦協定」発効、イタリア戦線は停戦

1918年(大正7年)11月11日　第一次世界大戦、ドイツと連合国の休戦協定、締結

1919年(大正8年)2月24日～1929年(昭和4年)4月13日　後藤新平、拓殖大学(前身は桂太郎が創立した台湾協会学校)学長

1922年　『300万人の現代都市』ル・コルビュジエ　ーーサロンドートンヌで発表ーー

1923年(大正12年)9月1日　大正関東地震(関東大震災)発生

《帝都復興計画》　ーー(農地整序につかっていた区画整理が展開される)

・復興計画の始動と齟齬　　1923年(大正12年)9月1日に発生した大正関東地震による被害は甚大なものであり、復興計画は政府主導で行われた。第2次山本内閣の内務大臣に就任した後藤新平は、復興事業について、計画決定から各省所管事務、自治体の権限すべてを集中する「帝都復興省」を設立しようとしたが、各省の強い反対に遭い、東京と横浜における都市計画、都市計画事業の執行など復興の事務を掌る帝都復興院を設立して、いわゆる後藤系官僚を結集させた。その幹部は、総裁後藤新平、副総裁に北海道長官の宮尾舜治(計画局・土地整理局・建築局担当)と東京市政調査会専務理事松木幹一郎(土木局・物資供給局・経理局担当)、技監に・・・直木倫太郎、理事・計画局長には・・・池田宏、理事・土地整理局長に・・・宮尾舜治(後に・・・稲葉健之助)、理事・建築局長に・・・佐野利器、理事・土木局長に直木倫太郎(途中辞職、後任に・・・太田圓三)、理事・物資供給局長に松木幹一郎、経理局長心得に・・・十河信二という陣容で、2人の勅任技師に・・・山田博愛と医学博士岸一太を起用した。・・・・・
後藤は一人で東京復興の基本方針　1. 遷都すべからず　2. 復興費は30億円を要すべし　3. 欧米最新の都市計画を採用して、我国に相応しい新都を造営せざるべからず　4. 新都市計画実施の為には、地主に対し断固たる態度を取らざるべからず　を練り上げる。だが、事業規模は当時の経済状況をかんがみて縮小され、当初の焦土買い上げという後藤の「大風呂敷」は実現せず、農地整序につかっていた区画整理が展開されることとなった。・・・・・　さらに復興計画審議のために設置された3つの審議機関のうち帝都復興参与会と帝都復興協議会は無事通過するが、帝都復興審議会では大反対され、特別委員会での大幅縮小で決定、5億円強になり議会提出の運びとなった。議会では・・・・・所管の後藤内務大臣が政友会への屈服を選択したため、政友会案を受け入れて復興計画は確定された。しかも後藤は予算成立後の解散を提言して山本権兵衛総理大臣に却下された。さらに火災保険貸付法案審議未了問題で・・・・・矢先に虎ノ門事件(12月27日)が起きて、山本内閣はこれを契機に総辞職し、この政争の過程で多くの人の支持を失っていた後藤はその後、現実政治家として復帰することはなかった。
後藤新平の強い影響下に設立された復興院は廃止され、翌1924年2月25日、内務省の外局として復興局が設置されて、復興院技監だった後藤系の直木倫太郎が長官となった。しかし復興局は、内務省、鉄道省、大蔵省の3省の寄り合い所帯で「伏魔殿」と言われ、疑獄事件が相次いだ。・・・・・
こうしたスキャンダルにまみれた中、後藤新平の当初の構想までは実現しなかったが、現在の内堀通りや靖国通り、昭和通りなど都心・下町のすべての街路はこの復興事業によって整備されたもので、この東京の骨格は現在に至るまで変化していない。また震災による焼失区域1100万坪の全域に対する土地区画整理事業を断行する。区画整理は最終的に全体を66地区に分け、各整理委員会で侃々諤々の議論を行いながら事業が進められた。この結果密集市街地の裏宅地や畦道のまま市街化した地域は一掃され、いずれも幅4m以上の生活道路網が形成され、同時に上下水道とガス等の基盤も整備された。
・震災復興橋梁・・・　・震災復興小学校建設・・・　・震災復興公園・・・　・復興事業の完成と終了・・・　:Wikipedia「震災復興再開発事業」最終更新 2019年12月7日(土)09:15 より抜粋

1923年(大正12年)9月2日～1924年(大正13年)1月7日　後藤新平、第2次山本権兵衛で内務大臣

1923年(大正12年)9月27日 「帝都復興院」設置 (第2次山本権兵衛内閣、総裁は後藤新平)

1924年(大正13年)　オランダ・アムステルダムで現在のIFHP(en:International Federation for Housing and Planning)の前身である国際都市計画会議において市街地外周のグリーンベルト設置、衛星都市の建設など6か条の決議が採択される。

1925年　『ヴォアザン計画』ル・コルビュジエ　ーーパリ市街を超高層ビルで建て替える都市改造案 発表ーー

1927年(昭和2年)　内務省ー「土地区画整理審査標準」を制定

1928年以降　CIAM(Congrès International d'Architecture Moderne、シアム、近代建築国際会議)開催

1929年(昭和4年)4月13日　後藤新平(安政四年六月四日(1857年7月24日)ー昭和4年(1929年)4月13日、71歳)、京都府立医科大学医院で死去

1930年　『輝く都市』(La Ville Radieuse) ル・コルビュジエ　ーール・コルビュジエ(Le Corbusier)が発表した三つの計画案は低層過密な都市よりも、超高層ビルを建て、周囲に緑地を作ったほうが合理的であるとするもので、パリでは実現しなかったが、以降の都市計画の考え方に影響を与えた。ー

1931年(昭和6年)9月18日　柳条湖事件

1931年(昭和6年)9月18日～1933年(昭和8年)5月31日　満州事変(塘沽協定)

1931年(昭和6年)「耕地整理法」改正

1932年(昭和7年)3月1日～1945年(昭和20年)8月18日　満州国成立

1932年(昭和7年)5月15日　五・一五事件　犬養毅首相暗殺

《東京緑地計画》　ーー東京のグリーンベルト構想ーー

東京緑地計画とは、1939年(昭和14年)につくられた大東京における緑地帯、景園地等を含む総合的な緑地計画。日本の都市計画および公園史上初めての大規模かつ具体的なマスタープランである。・・・・・
概要：・戦前期に大都市の膨張に対処するため地方計画(regional planning)という広域都市計画の考え方、計画論が先進国で浸透し、1924年(大正13年)オランダ・アムステルダムで現在のIFHP(en:International Federation for Housing and Planning)の前身である国際都市計画会議において市街地外周のグリーンベルト設置、衛星都市の建設など6か条の決議が採択される。　・これを受けて、日本でも地方計画を東京を対象として立案するために、1932年(昭和7年)10月に東京緑地計画協議会が結成される。これは内務省を中心に結成された協議会で、内務次官を会長に、内務省と警視庁、首都圏の府県や東京市(現在の23区に相当)、都市計画東京地方委員会によって構成された。東京緑地計画の計画区域は東京50km圏、962，059haという広大なもので、日本の都市計画および公園史上初めての大規模かつ具体的なマスタープランであり、これを超えるプランは今日に至るまで出現していない。　・協議会が計画対象とした緑地は後述のとおり、生産緑地や保存地などを含む広い観念で、結果的には発足研究されてきた公園設計標準を、新たに地方計画としてとり入れた「緑地」とあわせて総合的に都市内外の公園緑地計画の指針をうち出したものであると指摘されている。実際、東京において大緑地が都市計画および事業決定を見たときには、内務省はすでに緑地の都市計画法における法文化を決定していた。都市計画法(旧)改正(昭和15年3月30日)により、第十一条の二を追加、第十六条に「緑地」の文字を加えている。法律として「緑地」の用語が誕生したことは注目すべきだが、この「緑地」は、東京緑地計画協議会において十分検討されつくした地域制の「緑地」の定義とは異なるものであって、都市公園同様に公共営造物(都市施設)であるとされた。
環状緑地計画：東京緑地計画の中で最も重要な計画は、東京市の外周に緑地を設置する環状緑地帯計画(1939年(昭和14年)4月策定)で、この緑地帯から石神井川、善福寺川など都市河川沿いに設置された緑地帯が市街地に貫入するように設定されている。このような放射環状の緑地帯が当時の先進国の都市計画では理想形とされていた。環状緑地帯を計画した区域は民有地の田畑・山林であったが、その拠点部分については緑地として都市計画決定し実際に買収し、整備された。その他の環状緑地帯は法的根拠が与えられていなかったが、1941年(昭和16年)9月の防空法改正に伴う空地の指定制度創設により、東京では1943年(昭和18年)に、東京緑地計画の環状緑地帯を継承する形で防空法に基づく空地(空地帯:内環状・外環状・放射、各幅員200～300M、防空空地:一箇所1000坪程度)が指定された。　防空法に基づく空地は1946年(昭和21年)1月の防空法廃止に伴い法的根拠を失うことになる。1946年9月に交付された特別都市計画法(昭和21年9月10日法律第19号)では、第三条で(主務大臣は)特別都市計画の施設として緑地地域の指定をすることができることを規定された(その後昭和29年特別都市計画法が廃止されてもなお、緑地地域については土地区画整理法施行法附則第2項によって、当分の間その効力を有するものとされた。)。戦災復興院は1946年(昭和21年)9月27日に「緑地地域計画標準」を発し、緑地地域は市街地の外周部と内部に放射環状にとり「防空空地帯を指定された都市では、その指定区域を根拠として」指定するように指示している。しかし、大阪、名古屋など防空空地帯を指定していた都市は緑地地域への切り替えをせず、東京のみが東京緑地計画以来のグリーンベルト構想を堅持した。1948年(昭和23年)8月、防空空地帯を継承する形で緑地地域(面積18，010ha)が都市計画決定された。　ドッジラインによる見直し等による影響を受けて東京の戦災復興都市計画は縮小されていき、また、緑地地域では違反建築が続出し、その実態を追認するかのように指定解除の措置がとられていく。19

と、また、緑地地域では建及建築が横出し、その実態を追認するかのように指定解除の指置がとられていく。1969年(昭和44年)の新・都市計画法施行の際には、東京の緑地地域そのものが全廃されている。
大公園：大緑地：・・・・・　緑地の分類(東京緑地計画協議会)：■緑地　一普通緑地　1. 公園　イ大公園　・・・　ロ小公園　・・・　2. 墓苑　3. 公開緑地　・・・　4. 共用緑地　5. 遊園地　二生産緑地　1. 普通農業地区　2. 林業地区　3. 牧野地区　4. 漁業地区　三緑地に準ずるもの　1. 庭園　2. 保存地　イ第一種　天然保護区域　天然保護区域以外の史跡名勝天然記念物の指定地又は仮指定地　史跡名勝天然記念物の保存に関し主務大臣の定めたる地域　風致林　風致地区　その他　ロ第二種　魚付林　その他　ハ第三種　保安林　開墾制限又は禁止地　砂防指定地　河川法による権利制限地　要塞地帯および軍港要港の境域　その他　3. 景園地
反対運動：住宅需要の高まりとともに、緑地指定され都市化に制約のあった地域住民等から規制縮小・撤廃を求める運動が起きた。昭和31年(1956年)の首都圏整備法で「近郊地帯」(グリーンベルト)が設定されることに対して北多摩を中心とする「東京都近郊地帯設定反対期成同盟」が結成された。　脚注　・・・・・：Wikipedia「東京緑地計画」最終更新 2020年2月25日(火)09:12 より抜粋

1932年(昭和7年)10月　「東京緑地計画協議会」内務省を中心に結成

1933年　『アテネ憲章』　ーーCIAM(近代建築国際会議)第4回会議における成果で、都市計画についても考え方をまとめたものである。都市から「住む」、「働く」、「レクリエーション」、「交通」の4機能を取り出し、これらを操作することによって都市を作り上げようという方法であり、その計画の技術を述べている。その後、世界各地で計画された新都市に大きな影響を与えたとされる。　とくに重視しているのが、「住む」である。憲章は、「住居」につき、都市の中の最上の地に置くこと、健康の重視、適当な人口密度、最小限の日照、幹線道路に沿った配置を禁止、現代建築技術の利用、高層住宅は距離を離して地上は開放すること、などを提唱している。「働く」場である「職場」については、住居との距離を最小に抑えること、工場地域は住居地域と緑地帯で離すこと、などを示す。そして、この機能的に分離された都市を結ぶのが「交通」で、主要交差点は立体交差とし、歩車道を分離し、幹線道路と住宅地の道路は機能で分け、幹線道路は緑地帯で囲む。　建築家ル・コルビュジエが提唱した「輝く都市」の理念に沿った内容で、都市の機能は住居・労働・余暇・交通にあり、都市は「太陽・緑・空間」をもつべきである、としている。　アテネ憲章は機能主義による明快な都市計画論として、各国の都市計画に大きな影響を与えたが、1950年代にはCIMA内部でも批判が起こり、その後も、ジェイン・ジェイコブズが著した『アメリカ大都市の死と生』など、様々な立場から批判を受けた。 文献：ル・コルビュジエ、吉阪隆正編訳 『アテネ憲章』 SD選書102　鹿島出版会、1976年・・・・・：Wikipedia「アテネ憲章」最終更新 2019年9月2日(月) 03:45 より

1936年(昭和11年)2月26日～1936年(昭和11年)2月29日　二・二六事件　岡田内閣中、松尾伝蔵 内閣総理大臣秘書官事務取扱、高橋是清 大蔵大臣、斎藤実 内大臣、渡辺錠太郎 教育総監、死亡、鈴木貫太郎 侍従長、負傷　クーデター未遂事件

1937年(昭和12年)7月7日～1937年(昭和12年)7月9日　盧溝橋事件

1937年(昭和12年)7月7日～1945年(昭和20年)9月9日　日中戦争

1939年(昭和14年)4月　「環状緑地帯計画」策定

1941年(昭和16年)12月8日～1945年(昭和20年)9月2日(又は8月15日)　太平洋戦争

《戦災復興都市計画》

1945年(昭和20年)11月　「戦災復興院」発足～「戦災地復興計画基本方針」策定

1945年(昭和20年)12月30日　「戦災地復興計画基本方針」閣議決定

1946年(昭和21年)9月10日　法律第19号　「特別都市計画法」制定

1949年(昭和24年)4月　法律第195号　「土地改良法」制定

1949年(昭和24年)6月1日　「台湾総督府」を廃止

1949年(昭和24年)6月6日　法律第195号　「土地改良法」公布

1949年(昭和24年)6月6日　法律第196号「土地改良法施工法」公布－第一条“耕地整理法の廃止”

1949年(昭和24年)6月24日「戦災復興都市計画の再検討に関する基本方針」閣議決定

1949年(昭和24年)10月4日「戦災復興都市計画の促進について」閣議決定

1951年(昭和26年)9月8日　サンフランシスコ講和条約　署名

1951年以降　ル・コルビュジエ　インド首相であるジャワハルラール・ネルーの依頼を受け、インドに新都市チャンディーガルを建設する際の顧問として都市計画および主要建築物(議会・裁判所・行政庁舎など)の設計に携わる。

1952年(昭和27年)4月28日　サンフランシスコ講和条約　発効

1954年(昭和29年)　法律第119号「土地区画整理法」公布

《土地区画整理事業》　――「都市改造型」・「宅地供給型」－[活力ある都市への再生]－

1956年(昭和31年)「都市改造型土地区画整理事業」創設、「道路整備五ヵ年計画」開始

1958年(昭和33年)「道路整備特別会計」創設

1961年　『アメリカ大都市の死と生』ジェイン・ジェイコブズ

1965年8月27日　ル・コルビュジエ(Le Corbusier、1887年10月6日－1965年8月27日、78歳)、死去

1968年(昭和43年)　法律第100号「都市計画法」

1986年　『都市の経済学』ジェイン・ジェイコブズ

1996年　仏　新規対象者の徴兵を停止　シラク大統領

2001年　仏　徴兵制度を完全に撤廃　シラク大統領

2004年　『壊れゆくアメリカ』ジェイン・ジェイコブズ

2006年4月25日　ジェイン・ジェイコブズ(Jane Butzner Jacobs、1916年5月4日－2006年4月25日)、死去

2019年　仏　徴兵制を復活――「普遍的国民役務」　マクロン大統領

○『「大東亜」を建設する　ー帝国日本の技術とイデオロギーー』二〇一九年一二月一五日 初版第一刷発行
著者 アーロン・S・モーア　監訳者 塚原東吾　発行者 渡辺博史　発行所 人文書院

序説　帝国日本の技術的想像力

技術超大国としての日本　　P9

一九九〇年一二月、科学技術政策史研究会が、科学技術庁科学技術政策研究所監修のもとに、『日本の科学技術政策史』を刊行した。日本の科学技術の包括的な戦後史を意図するというその報告書は野心的なねらいをもったものだった。日本の科学技術政策が経済・社会の発展にいかに本質的な役割を演じたのかを全世界に知らしめ、日本が自国を豊かにすることだけではなく、世界を豊かにするための政策を提案するというのだ。報告書が書かれたのは「バブル経済」花盛りの時期であり、日本が家電・自動車・半導体・製造技術・ロボット工学などの技術革新においてグローバル・リーダーとみなされていた時代であった。書店の店頭には、経済発展に対する日本型の特異なアプローチを詳述する『テクノポリス戦略ーー日本・高度技術・二一世紀の支配』や『科学技術超大国としての日本』〔邦題『日本の驚異ーー最強の技術力はいかにしてつくられたか』〕といったセンセーショナルなタイトルの書籍が数多くならんでいた。芝浦工業大学工学マネジメント研究科教授・研究科長の児玉文雄は、技術開発促進の日本型モデルはグローバルな「技術パラダイムシフト」を代表するものであるとし、さらには、イラン・フィリピンにおける革命や天安門事件を可能にしたのは日本製のカセットテープ・ビデオといった録音・録画機器やファックスであったとまで主張した。このようにして日本の科学技術政策は、一九八〇年代から九〇年代初頭にかけて、社会的発展や経済的繁栄、ときには民主主義的価値をも促進する進歩的勢力としてひろく認められていた。

一九八九年に日本は世界最大の海外援助国となり、冷戦体制崩壊後の一〇年間その地位にありつづけた。一九九五年には日本のODA支出は一四五億ドルに達し、アメリカ合衆国の倍近くになっていた。これら海外援助の多くは科学技術にかかわるもので、それは物資だけでなく、知識提供や人材派遣にもおよんだ。こういった技術援助プログラムは、一九五二年に米国の占領が終わるとすぐに開始され、当初はかつて日本が占領下においた東南アジア諸国への戦時賠償協定に基づいて行われた。そこで典型的だったのは、水力発電・交通網整備。工場建設といった大規模プロジェクトに日本政府が補助金を出すもので、それは日本国内の建設・製造業界に利益をもたらし、ひいては日本経済全体の底上げにつながった。一九六〇年代には、日本の経済学者が「雁行型経済発展」と呼ばれる技術振興を基盤とした経済の段階的発展理論を展開・喧伝するまでになったが、この理論は一九九〇年代まで一貫して日本のアジア外交政策の基軸となった。この理論によると、低開発国はまずその第一段階において（たとえば日本といった）先進国から製品を輸入し、それにより産業発展を振興する。輸入代替品の生産が第二段階となるが、その余剰生産が製品の輸出にまで至るのが最終的な第三段階ということになる。アジア地域の経済発展の歴史は、技術移転と輸入代替を通じた産業成長というこの理論が正しかったことを証明しているかのように見える。その証拠に、日本の技術援助を長らく享受してきた韓国・台湾・香港・シンガポールは「四頭の虎」の異名をとるようになり、さらにフィリピン・インド・インドネシア・タイ・中国といった第二次新興成長市場がそれに続いた。このように、積極的な科学技術振興政策は日本国内の発展にとって重要であったのみならず、日本の外交政策においても主要な役割を果たしてきた。　日本政府やその賞賛者からすれば、科学技術の進歩とそれを支える政策は、近代史における日本の国家的発展および安全保障にとって、また昨今のアジア諸地域の経済的成功にとっても必要不可欠な、近代化を推進する原動力を意味するものであった。科学技術とは、国家的な繁栄・革新・生産性の向上を実現するために道具的に活用されまた促進されるべきものだった。科学技術に基づく「テクノ・ナショナリズム」的パラダイムを発展させた日本の先見の明、というこの耳慣れた物語は、日本と西洋の研究者がともに作り上げてきた日本の近代化という物語の大きな柱をなすものである。

近代日本における科学技術概念を再考する　　P11

本書『東アジアを建設する』[原題]は、科学技術に基づく戦後日本の近代化というこの月並みな物語を、その起源を戦時体制下の「技術的想像力（テクノロジカル・イマジナリー）」にまでたどることによって批判する。その目的は、二〇世紀の科学技術がイデオロギーや権力のシステムとして機能してきたあり方の、ある特定の側面に注意を喚起することにある。「技術的想像力」という造語でわたしが意味するのは、多種多様な集団が「技術」という用語にイデオロギー的な意味やヴィジョンを託す、そのさまざまな方法のことである。科学技術の包括的なモデルや定義を提示する代わりに本書が分析を試みるのは、戦時日本の技術をめぐる言説が、議論する主体やその主体である個人・集団の政治的目標によってどのように展開しまた変容したのかという点である。これは科学技術を進歩と繁栄をもたらす抽象的で普遍的な原動力とみなす近代化をめぐる従来型の物語に拡張をせまるもので、そのために本書が分析の俎上に載せるのは技術的想像力が〔帝国日本において〕定式化されてい

く過程であり、それが国内の資本主義的発展や戦時動員との関係においてのみならず、植民地支配の拡大と密接な関係にあったという点が強調される。後者は、しばしば、日本の歴史的発展の「本流」からは切れたものとして扱われてきたものである。日本のエリートたちのあいだで科学技術にかんする言説が浮上してくることは、「想像すること(イマジナリー)」のプロセスでもあった。すなわち、戦時・植民地政策を考案するうえで創造性豊かな構想力と技術にかんする専門知識とをブレンドしていくことであり、また、さまざまな民族の希望や欲求をとりこむことを意図した大規模なインフラ計画を多数実行に移していくことでもあった。そこで本書が前提とする議論は以下のようなものとなる。政策や計画を想像することを通じて科学技術を動員の原動力として役立てるという戦時体制下にできあがったスタイルは、一九四五年以降も、日本がグローバルな技術超大国として海外開発援助の分野で影響力のある国家に生まれかわることによって継続した。そして、民衆レベルの認識においては、戦後日本経済が奇跡の復興を成し遂げ、世界の舞台で平和を推進する主要国家として日本が頭角をあらわすに至ったという通俗的な物語によって、この戦中戦後の継続性は隠蔽され抑圧されてきた。

近代化論者たちは概して、戦時中の一九三〇年代・四〇年代を、非合理性・精神主義・反動政治が支配した日本近現代史における「暗い谷間」として描き出してきた。これらの論者たちによれば、日本の戦後民主主義化はもっぱら米国による占領期(一九四五年ー五二年)のたまものということになる。しかし他方で、戦後日本の民主主義システムが、実際には戦時中に発展した国家主義を構成するさまざまな要素にその根を有していることを証明する研究成果が、一九八〇年代より多く現われはじめる。なかには、戦時中の独裁体制や軍国主義にかんして、自由民主主義へのたんなる超保守的な反動ではなく、近代的で進歩的な性質も多く内包するものであったことを示す研究もある。たとえば、チャルマーズ・ジョンソンは、戦後日本の「経済的奇跡」の原因を、戦前戦中の経済官僚が産業振興政策・計画において考案したさまざまな手法のうちに見出している。ジョン・ダウアーは挑発的なもの言いで、アジア・太平洋戦争を「役に立った戦争」と呼ぶが、その意味するところは、経済官僚の組織化・半ー独占的な合弁企業体・日本型経営と「協力的」労使関係といった戦後の急速な経済成長の鍵となる諸制度が発達するのに戦争が「役に立った」ということだ。シェルドン・ギャロンは、「進歩・科学・合理性」といった近代化がはらむ諸価値のおかげで、市民社会を動員し戦中戦後のより独裁的で管理された社会システムへと適合させるための「良心に訴えかける説得」の技法を、戦前の日本国家が開発することに成功したと論じている。本書は、「近代化」と独裁体制との関係をめぐるこれらの先行研究に注目しつつ、近代化のもっとも明白な産物である「技術」が戦時動員や植民地支配のためのイデオロギーとしていかに機能したのか、そしてそれが、民主国家としての日本の戦後史を形づくったまさに当のものでもあるということを検証する。

技術と権力の関係に光をあて、それによって技術にかんする従来の道具主義的な見方を疑問視するにあたって、本書は、技術の政治的性質をめぐるフランクフルト学派の豊富な研究成果から学んでいる。たとえば、〔これは正確には「フランクフルト学派」に属するものではないが〕マックス・ヴェーバーの有名な議論がある。近代資本主義における規律・計算・合理性といったプロテスタンティズムの倫理の台頭は、「現在、圧倒的な力をもって、その機構の中に入りこんでくる一切の諸個人の生活のスタイルを決定する、機械的生産の技術的・経済的条件」に人びとを縛りつけるような脱呪術化された秩序を創造した。そして目的を持った道具主義的な行動・組織・技術の諸形態は巨大な官僚・行政機構によって具現化され、人びとを「精神のない専門人、心情のない享楽人」へと変容させる理性の「鉄の檻」が築かれる。すると計算可能性と統制力を最大化し、「目的の選択」よりも「手段の効率」に関心のある形式化された合理性のシステムが、人びとの日常生活を支配するようになる。このようにヴェーバーにとって、技術が支配する社会の形成は、近代化論者が言うような直線的な進歩の道行きではなく、合理化が不可避的にもたらす非人間化のプロセスなのである。本書はヴェーバーの議論を取り入れつつ、いかにして科学技術が、戦時日本の権力の性質を形づくることとなる合理化の広範囲に及ぶ影響力を構成するに至ったのかを検証する。

戦時中の日本における科学技術は、たんに合理化の抑圧的な力を代表するものではなく、人びとを国家目標のために積極的に動員するものでもあった。ヘルベルト・マルクーゼやユルゲン・ハーバーマスの仕事は、技術が人びとの希望や欲求を社会制御のメカニズムのなかにダイナミックに取り込んできた方法を明らかにした点において、科学技術は権力のシステムであるとする本書の議論にとって重要なものである。たとえばマルクーゼは、技術的合理性の拡大を資本主義的支配関係と結びつける。彼にとって技術とは、「人間の不自由の大きな合理化をも準備し、自律的であること、および自分の生活を自分で決定することの「技術的」不可能性を証明する」ものなのである。ヴェーバーが抑圧的な「理性の鉄の檻」を強調したのに対して、マルクーゼは、「暮らし易さを増やし、労働生産性を高める技術的機構に服従すること」として資本主義の支配を描き出した。マルクーゼの定式をさらに練り上げたハーバーマスは、広く浸透している「技術至上主義(テクノクラシー)の意識」あるいは「目的合理性行為」の論理が、いかにして経済活動の領域の外へと拡大し、人びとが機能的に統合されている社会システムのレベルで再生産されるかという点に注目した。「政治のめざすところは機能障害の除去とシステムをおびやかす危険の防止であり、したがって、実践的な目標の実現ではなく、技術的な問題の解決である」とハーバーマスは論じる。その結果、公共圏は脱政治化され、「良い生活」の実践的なヴィジョンより、むしろシステムが正しく機能することに関心が持たれるようになる。ハーバーマスとマルクーゼにとって、技術とは物理的にそれとわかる以上のもの、すなわち権力と動員の具体的な技法を意味していた。公共的言説において技術の新たな定

わかる以上のもの、すなわち権力と動員の具体的な技法を意味していた。公共的言説において技術の新たな定義が現われ支配的になっていた戦時中の日本で作動していた政治的ダイナミクスを捉えるのに役立つので、彼らの理論的結論は意義深い。

本書は、日本の技術的想像力形成に影響力を持った個人や集団（知識人・技術官僚・技術者・国家計画立案者）の分析を通じて、この政治的ダイナミズムを明らかにする。相川春喜のようなマルクス主義者は、日本の帝国的拡大という急激な社会的変容に人びとの政治・経済・社会・文化的生活を動員するような技術化されたシステム社会の概念を明瞭に提示した。宮本武之輔のような技術官僚は、技術的専門性を国家政策決定プロセスに組み込ませるような「社会的技術者」の重要性を強調し、アジアを近代化し西洋帝国主義から「解放」する「興亜技術」なる考え方を技術者の指針として打ち出した。直木倫太郎・原口忠次郎・久保田豊などの技術者は、国内のお役所仕事を逃れるべく帝国に活路を見いだし、都市計画・ダム建設・治水・産業開発といった技術プロジェクトの連携統合によって持続的な関係と利益を生み出すような、「綜合技術」・「国土開発」という概念を発展させた。毛里英於兎のような革新官僚は「経済技術」といった概念を練り上げ、「生命的組織」なる主意主義的思考に基づいて日本本土ならびに帝国をひとつの有機的機構に統合するような政策を「経済技術者」が立案することを提唱した。このように「技術」という語が一九三〇年代日本の公共言説において目立った存在になるにしたがって、影響力のあるエリート層がそれを自らの語彙に取り入れるようになり、物理的・人為的なものという従来の意味は拡張され、社会を組織化し変容させる技法を含むまでに至った。

技術と日本型ファシズム　　P15

戦時体制下の日本における技術とは、たんに高度な機械類やインフラを意味するのではなく、それよりずっと広く、主体性（subjectivity）や倫理、未来の構想にかかわる次元も含んでいた。欧州などにもみられるように、二〇世紀初頭以来日本における技術は、ある種の創造的思考・行動・存在を表すとともに、合理性・協働性・効率性といった価値を体現するものとなり始めていた。技術はまた、民族や階級をめぐる軋轢のない平等な社会というユートピア的ヴィジョンに、容易に適用されるものでもあった。特に日本が軽工業から重工業中心の戦時経済体制に移行する一九三〇年代には、国民生活のあらゆる側面にじわじわと浸透し変化をもたらすものとしての技術という、主体の制作により深くかかわるような技術観を、エリートは展開した。そしてこのような主体性・動員にかかわるより実践的な技術観（「技術的想像力」）は、広範囲にわたる社会的アクター（想像するもの）にとっての指針となった。そういったアクターには、戦時統制経済を設計する官僚から植民地における巨大インフラプロジェクトを企画・推進する技術者まで、さらには、日本資本主義の発展段階を意味づけ革命の可能性を模索するマルクス主義者から映画やマス・メディアにおける技術の「新しいリアリズム」といった美学を涵養することを唱道する文化批評家まで、多種多様な人材が含まれていた。

戦時日本の技術的想像力が代表するファシズム的イデオロギーは、精神主義や超国家主義の文化に訴えかけることをもっぱらとする神がかり的なものだけではなく、近代性・合理性といったなじみのある比喩を用いる形態のものでもあった。そしてこの技術的想像力は、戦後日本の社会や外交にとってことさら強力なレガシーとなった。技術となったファシズムの関係については異なる文脈における研究が知られているが、なかでもとくに重要なものにジェフリー・ハーフの分析がある。オスヴァルト・シュペングラー、エルンスト・ユンガー、マルティン・ハイデガー、ヴェルナー・ゾンバルトなどの「反動的モダニスト」が、「共同体、血統、意志、自我、形態、生産性、そして最後に人種」といった病理学的で非合理的なロマン主義的目標を達成するために、いかにして技術的理性を横領したのかをハーフは分析した。しかし日本のエリートについては、技術が本来的に有する合理性をたんに「悪用」して非合理主義やロマン主義にどっぷり浸してしまったという言い方は当たらない。むしろ、さまざまな仕方で彼らが表現していたのは、国民生活の多様な領域が合理的に計画・動員されその潜在力や創造性が最大限発揮されるようにする、創意に富んだ実践的で政治的な技術の概念だったのだ。　本書が考察するのは、「日本的」技術といった特殊な概念の確立を求める代わりに、日本のエリート層が、他の文脈から引っ張ってきたユートピア的な技術観をどのようにファシズムのイデオロギーに取り込んだのかという問いである。チャールズ・メイヤーは、二〇世紀初頭のテイラー主義が工場労働合理化の技法という当初の意味を越えて、工場経営と社会再編成の強力な政治的イデオロギーとなった過程を明らかにすることによって、西洋における技術とファシズムの関連性を示している。二〇世紀初頭の欧米においては右左を問わず、階級間の軋轢を乗り越えるためのヴィジョンとして、「科学的経営」はおあつらえむきだったのだ。こういったヴィジョンによれば、「効率性・最適性・生産性の向上・生産量の拡大」の「整合的なシステム」の線に沿って、社会は再組織化されることになる。たとえば、アメリカの「進歩主義時代」においては、チャールズ・ファーガソンやソースティン・ヴェブレンが、「社会に最適性を強要」し資本主義の無駄と階級対立に終止符を打つような理想的人格としての技術者像を打ち出した。フランスでは、「伝統的な階級区分を否定し、ブルジョアであろうとプロレタリアであろうと小作農であろうと、あらゆる「生産的」で「勤勉」な構成員がなす統一的な社会こそが望ましいとする原ーテクノクラシー的なイデオロギーを、サン＝シモン主義が具現化していた」。イタリアでは、未来派がファシズム国家を「発電機（ダイナモ）」として、すなわち「国家以上のもの」として思い描いていた。ソ連では、共産主義者が社会革命を促進する技術の潜在力を

言祝いだ。最後にドイツでは、ワルター・ラウテナウやヴィヒャルト・フォン・メレンドルフといった技術者＝実業家が技術パラダイムを援用して、資本家を公務員にして資本主義的競争を撲滅する「計画経済」(Planwirtschaft)の実現を強く求めた。以上のように、全世界の工業国において、ことに大恐慌期の資本主義の危機と労働争議の増加に直面するなかで、「技術」という単語が社会の調和・刷新・能率を表す強力な記号となったのだ。日本のエリートもまた、技術と社会運営にかんするこれらの考え方を拒否することなく、むしろ自らのファシズム的イデオロギーのプログラムに組み込んでいった。

本書はファシズムを以下のように定義する――ファシズムとは、社会の革命的変容や動員を可能にするために近代的要素と反近代的要素を結合するようなイデオロギーならびに権力の様式が、全世界的な規模で、さまざまな国民・国家の文脈に翻訳されたものである。戦時期の日本について仕事をしている英語圏の研究者にとって「ファシズム」という用語は争点となり続けてきているが、その用語を使う場合にはたいてい丸山眞男の「上からのファシズム」という概念を借用している。丸山の考えでは、日本のファシズムとは結局のところ、多くのヨーロッパでの例のように「下から」の大衆運動によってではなく、国家のさまざまな機関によって広められたものである。さらに日本のファシズムは、天皇を中心とする家族主義、反近代的な農本主義、西洋からの解放を掲げる汎アジア主義といった点において「特殊」であるとされる。英語圏の研究者は、丸山理論の多くの論点を洗いなおしたり「ファシズム」という語を使用するのをやめたりしてきたが、それでも多くは、日本のファシズムがもつ合理的で近代化志向の側面よりはむしろ、その反近代的で権威主義的な精神主義・共同体主義の部分を強調し続けてきた。その枠組によれば、あくまでヨーロッパがファシズムの原型モデルでありそのモデルに照らして日本はつねに特殊なケースとなる。たとえばカリスマ的指導者やファッショ的大衆政党の不在や、明治時代と一九三〇年代とのあいだの制度的な連続性が、日本がファシズム国家ではなかったことを「証明」するのに十分な証拠を提供しているという議論もある。しかし本書では、ドイツやイタリアの経験から標準モデルを引き出す代わりに、いくつかの共通する思想やプランが異なる国民・国家的文脈に翻訳されたものとしてファシズムを捉える。ファシズムのいわゆる純粋モデルに基づく細々とした特殊性にばかり目が行ってしまうと、異なる地域で同時多発的に展開したファシズムのより大きな歴史的影響力を無視することになる。さらに重要なポイントとして、日本ファシズムの特殊性にばかり注目することは、合理化や社会の再編成、そして戦後にまで重大な影響を及ぼす権力や動員の形態としての技術的想像力の構築といった、近代化のプロセスに共通する要素がファシズムのうちにも見いだされるという事実を見逃してしまう。

ヒロミ・ミズノは、戦時期日本のエリート層における「科学的」という概念にかんする最近の著書において、「ファシズム」を避け「科学的ナショナリズム」という用語を採用している。この用語でミズノが意味するのは、「国民・国家の保全・生存・進歩にとってもっとも喫緊かつ重要なのは科学技術である」とするイデオロギーのことである。ジャニス・ミムラは、戦時期の日本の革新官僚にかんする考察のなかで、技術的合理性や包括的経済計画そして生産性と効率という近代的価値といったものと民族的ナショナリズム・右翼的有機体論イデオロギーとを融合する革新官僚のイデオロギーに対して、「テクノ・ファシズム」という名称をあたえた。ミムラは、テクノ・ファシズムが伝統的な日本政治の分裂状態を乗り越え、技術系官僚主導の計画経済というより大きな政治のなかに取り込むという目論見をどのようにして実現していったかをさまざまな形で示し、それをひとつの新たな「権力の様態」と表現した。本書は、「科学的ナショナリズム」というミズノの概念とテクノ・ファシズムに関するミムラの示唆を受けて、それをさらに発展させるかたちで、技術的想像力は、ナショナリズムの政治と技術主導の計画経済以上のなにものかを表象すると論じる。科学的ナショナリズムまたはテクノ・ファシズムのイデオロギーには、たんに抑圧と暴力に頼るのではなく人間の主体的な創造性や活力の利用を基盤とするような、別種の権力の様態の輪郭を見いだすことができる。日本のエリートの考え方や政策において、権力とは、たんに上から社会を組織化するものではなく、おびただしい数の人民や組織による生産的な実践を通して内側から社会をダイナミックに形成していくものだった。ファシズムとは、全体主義国家の存在以上のものであり、日常生活のあらゆる場面で「階級闘争の帰結や、疎外、不安定さや文化的・経済的不平等のすべてを・・・・・・抹消して」資本主義を維持しようと努める「分子的もしくはミクロ・ポリティクス的な権力」の一形態を創造するものなのである。本書は、こういったファシズム的権力の様態が、技術的想像力によってどのように明瞭に提示されてきたかという問いを検証する。

日本の技術的想像力　　P19

本書で扱われる人物や集団は、一九二〇年代以降の日本において、主体性にかかわるユートピア的な技術観を表明し始めた一群のエリートのなかでも前衛に位置する者や集団である。たとえば、アメリカ型の科学的経営イデオロギーは日本の文脈に移植され、一九四五年以降、世界的に有名な「日本型経営」へと発展した。戦前戦中には、国が後押しする能率化運動・産業合理化運動を、多くの技術者・経営者・官僚が推進した。専門技術者による統治を意味するテクノクラシーという考え方もまた、二〇世紀初頭には人口に膾炙するようになる。テクノクラシーを支持する者の中には、重化学工業コンツェルン(財閥)を率いる日産の鮎川義介や理化学研究所の大河内正敏、革新官僚と呼ばれる毛里英於菟・奥村喜和男・岸信介などがいた。鮎川は多数の子会社のうえに「公衆持株会社」を置くという構想を推し進め、大河内は「科学主義工業」という経営理念を提唱した。他方、革

新官僚は、経済・社会の能率的な運営手段としての技術という考えを展開した。技術者自身は一九二〇年に「日本工人倶楽部」を結成し（一九三五年二「日本技術協会」に改称）、技術が国民の文化・倫理の礎となると主張し始める。アメリカにおけるニューディール政策やドイツにおけるナチスの経済政策に大きな影響を受けながら彼らが推し進めようとした行動計画は、労使協力を奨励し、行政・官僚の能率化を推進し、国の政策決定への技術者の関与を促進し、東アジアの植民地化を強化することであった。そのリーダー的存在だった宮本武之輔は当時影響力のあった企画院の次長にまで昇りつめるが、一九四一年の「科学技術新体制確立要綱」などの計画策定にあたって中心的な役割をはたした。

第一次世界大戦によって総力戦の時代が訪れると、技術と社会をめぐる議論において軍がその中心を占めるようになる。「統制派」の将校は、天然資源を有効活用し軍需産業の生産力を最大化するような「国防経済」の確立を訴え、革新官僚や技術者と連携しながら合理化や効率性といった技術の原理に基づく社会編成を促す政策を提唱した。たとえば一九三〇年代に陸軍科学研究所の所長を務めた後に陸軍技術本部長になった多田礼吉は、科学技術は有機的な日本の「国体」にとって本質的な構成要素であり、諸国家間の進化論的生存競争の現段階における勝利を勝ち取るためには、日本国家が積極的に科学技術振興に取り組まねばならないという見解を持っていた。多田は日本を電動要塞とする構想すら持っており、それは高度なレーダー技術が国家の眼として、遠隔操作・誘導システムが国家の手足として、いかなる外国からの軍事的脅威に対してもすぐさま対応できるように備わっている有機的身体をなすという。このような高度国防国家を実現するためには、政府の技術系官僚機構を中央集権化し、必要な技術革新を迅速に行うために国の研究機構を統合しなければならないとされた。

より広い意味でのユートピア的な技術観は、社会科学の分野にも浸透していた。社会学の分野では、松本潤一郎と早瀬利雄が、テクノクラシー運動の理念と、アメリカにおけるニューディール政策・ソビエト連邦における社会主義・ドイツにおけるファシズムにとってのテクノクラシーの重要性を日本に紹介した。経済学の分野では、大熊信行が物資の生産とともに人間の労働の再生産にかかわる技法の研究を力説し、大河内一男は個人の生産活動のみならず消費生活も促進する政策の導入を訴えた。これらの研究は「生活科学」という広い領域の学問分野へと結晶化し、戦時動員のための国家による技術統制の範囲を拡大するのに役立った。政治学の分野では、蝋山政道が技術を「人間生活の営みの術」と定義し、国家行政にも適用可能とした。蝋山は行政に合理的経営の技法を採用することによって、技術的意識や方法が行政の現場に浸透し、ついには国民の日常生活を管理する地方政府その他無数の地方組織にまで広がっていくであろうと論じた。

哲学者は、現代の生における感覚と主体性の新たな潜勢力に明確な表現を与えるために、技術をプラクシス・構想力・創造性（「主体的技術」）として概念化した。一九二〇年代から哲学者の西田幾多郎は、「技術」という語を「ポイエーシス」あるいは「行為的直観」と同じ意味を持つものとして用い始めるが、その関心は主体と環境との同時的形成という問題にあった。この流れで思索した哲学者の三木清は、一九三八年の論文に、「技術は物を作る行為である。それが如何なるものであろうと、道具の如きものであろうと機械の如きものであろうと、物を作るということが技術の共通の本質である」と書き、「技術」と人間の生のあらゆる領域における制作とを等置した。科学哲学者の下村寅太郎は、かの有名な「近代の超克」座談会（一九四二年）において、人間の身体は「機械を何らかの仕方に於て自己のオルガンとしているオルガニズムなのである」という見解を示し、科学や技術は西洋のものであるから真に日本的であるとは言い難いと単細胞的に切り捨てる日本主義的な座談会参加者を批判した。マルクス主義哲学者の戸坂潤は、技術をダイナミックな「大衆的知性」と定義し、それは工場内部にとどまらず現代人の日常生活のうちにあらわれる無数の技能・技法・実践の集積であると論じた。中井正一は、メディア技術が主体に与える影響を分析する際に映画の言語を導入した美学者で、現代における人間身体を「光、音、言葉、のいろいろなものを、無限にうつしあう鏡のいっぱいにある宮殿のようなもの」と表現し、大衆的な発明や創造が孕む「技術的時間」の概念を考察した。他方で、日増しに進む多様な技術の日本社会への浸透は、「西洋的」近代に侵されていないことになっている「真正（オーセンティック）」な日本人という主体を措定しようとする、和辻哲朗や九鬼周造といった同時代の著名な哲学者の試みを阻害していた。

一九二〇年代より盛んになるラジオ・映画・大衆紙・ジャーナル・新聞といったかたちの技術の進歩も、文化的表現や人びとの主体的経験を根本的に変容させるのに一役買った。マス・メディアの技術が拡散することは新たな美的感覚や可能性に満ちた技術文化の形成を意味していた。多くの人にとって、近代の産物としてもっとも目立つものである機械が生活のあらゆる領域に浸透していると感じられてはいたが、労働組合や右派イデオローグたちがしばしば主張するようにそれは人間を疎外するものとしてではなかった。新たなマス・メディアの技術が体現する「スピード、ショック、センセーション、スペクタクル」といった新奇な経験を文化評論家は言祝いでいたが、なかでもマルクス主義批評家の平林初之輔は、映画やラジオや大衆的人気を博した探偵小説などが文化芸術を大衆に近づけ、科学的・批評的態度に根ざした「民衆の文化」が出現する可能性を生む具体的な方途を模索していた。映画評論家の今村太平は、一九三〇年代に勃興する記録映画（「文化映画」）の美学が「新鮮で独自の、機械についての生活、機械に関する私的な独創性、そして新たな機械についての羨望を持つ」と記している。前衛芸術家の村山知義は、「勇敢端的な機械の美を愛する」必要性を説き、彼が主導したMAVOの芸術家は作品において意識的に、産業社会が生みだした技術生産品を用いて芸術と日常生活のあいだにある障壁を突き崩そうとした。[illegible]

明をつとした。ミリアム・シルババーグの研究は、一九二〇年代における大衆を媒介とするしマス・メディア化された〕文化の出現がいかにして多様な「消費者主体」の創造活動を促進したかを検証している。が、シルババーグによると、一九三〇年代末くらいまではカフェの女給・主婦・モボ・モガ・サラリーマン・ルンペンプロリアートといった人にさまざまな小細工を弄して「エロ・グロ・ナンセンス」を追究することによって、国家主義的な合理化言説に挑戦していたとされる。以上からわかるように、本書で扱う技術的想像力が出現した社会は、すでに工業およびメディアの諸技術ときわめて親和性が高く、それらがすっかり染みついていたと言える状態にあった。

第二次世界大戦時の技術すなわち「テクノ・ファシズム」にかんするこれまでの研究では、上からの技術的運営の重要性ばかりが強調され、新たななにかを動員し創造し刷新し組織する能力という技術が有する別の側面はしばしば等閑視されてきた。シルババーグが述べているように、一九二〇年代・三〇年代に新たに力をつけてきた「消費者主体」は、「(国家による合理化・道徳推進キャンペーンといった)体制維持勢力に対する辛辣な批判や創造へと突き動かされる桁はずれのエネルギー」によって特徴づけられる文化を発展させた。この「エロ・グロ・ナンセンス」と呼ばれる大衆文化は、シルババーグの議論によれば、日本が軍国主義・全体主義へと完全に舵を切る一九三〇年代末にはほぼ死に絶えた。本書が取り組む問いは、革新と実験の精神に満ちあふれるこういった大衆文化をコントロールしようとした国家主義者のエリートが、明示的に〈技術〉に訴えることによってその目的をはたそうと試みた、そのやり方である。「技術的想像力」とは、合理的な手段ー目的型の技術を社会運営の用に供するテクノクラートによる道具主義的な技術利用という以上の意味を持つ。それはまた、民衆の希望や欲求のレベルで作動し国家目標へと誘導することを目指す、新たな形態の権力の編成を表象する。概して技術的想像力が描く社会像は、一連の経済的・科学的・文化的・知的・行政的な諸技術の総体によって構成される有機的システムであるが、これら新興のヴィジョンの多くによれば、社会のあらゆる構成員には、社会システムがひたすら「東亜新秩序」建設のために稼働する中で生産的な役割があてがわれる。技術は、山之内靖が「有機的全体を特徴づけるオートポイエーシス」と表現したものと似通った巨大な技術システムの意味を持ち始めた。技術的想像力を通じて国民生活のあらゆる領域を取り込みシステム化するという、日本の戦時期に見られる動きは、戦後日本にまで継続するある種のファシズム的傾向を分析するための説得力のあるパラダイムを提供するとともに、技術的近代化のプロセスそのものにとってもいくらか本質的なものであると言えるだろう。

技術と日本帝国主義　　P25

技術的想像力は日本本土に限定されるものではなく、日本帝国の支配域にも拡大された。一八九五年に最初の植民地として台湾を獲得すると、一八九八年に台湾総督府民政局長(後に民政長官に改称)として赴任した後藤新平は、「生物学的植民地論」と称される独自の「科学的植民地主義」を展開した。おもにドイツにおける植民地行政をめぐる議論に影響を受けた後藤の科学的植民地主義は、開発に対する「体系的で調査研究志向のアプローチ」を意味するが、台湾はまさに「実験場」として都市計画や衛生改善、インフラ建設や民間組織の誘導といった広範囲にわたる政策が実地に移される場となった。生物学的な意味における有機体と類似して、各植民地もそれぞれに固有の法や習慣を有しており、それらは日本人の専門家によって「近代化」・「文明化」の礎となるべく体系的な研究の対象とされねばならないとされた。後藤はその後、一九〇六年に南満州鉄道(満鉄)初代総裁に就任し、さらに一九一六年および一九二三年の二度にわたって(インフラ開発を監督する)内務大臣を拝命している。科学的植民地主義は、朝鮮・台湾・関東州租借地・満鉄付属地といった公式および非公式の帝国圏域へと派遣された第一波の技術官僚・科学者・医者・技術者たちをおおいに鼓舞した。彼らはそこで、当時はまだ農業生産品中心であった日本の商業帝国のために、道路・鉄道・港湾・都市などを建設した。たしかに科学的植民地主義は広範囲にわたる技術的な成果をあげたけれども、それは技術と帝国との関係性を体系的に概念化したというよりはむしろ、日本の帝国支配を正当化する手段として「ほとんどが西洋科学に由来する知識を都合よく応用した」感が強い。一九三二年に満州国が成立し軍事ブロック経済へと移行するようになってはじめて、技術によって統合された帝国という概念をはっきりと意識する官僚や技術者の新たな波がやってくることとなる。

「東亜建設」の旗印の下、何千という技術者が理想を胸に一九三〇年代の朝鮮・台湾・満州国・中国へと押し寄せ、道路・運河・港湾・ダム・都市・灌漑・上下水道・電気通信網の建設に邁進した。彼らの指導の下、これら植民地は、生産諸過程を有機的に統合するシステムとしての社会を構想し、植民地計画・運営と密接にかかわるかたちで市民を動員するような新たな権力の様態である技術的想像力を発展させた。植民地においては中央集権がより強固でお役所風の形式主義もなく派閥争いも緩和されていたので、植民地官僚ならびに技術者は、都市計画や工業開発、河川流域の総合的管理運営といった壮大なヴィジョンの多くを立案し実現することができたのだ。

技術的想像力は、たんに日本のエリートが知的に構築したものではなく、現実的な技術プロジェクトに密着しながら練り上げられた。官僚や技術者もまた、現場で手を汚しながら技術をめぐる諸概念を作り上げていた。楊大慶が論じているように、「日本帝国を築くか、またはまとめ上げておくための物質的手段については、いまだに当たり前のことと見なされていて綿密な検証はされてこなかった」。本書は満州国の遼河河川流域開発計画や北

京の都市計画、朝満国境周辺の地域開発計画および豊満・水豊ダムの建設といった戦中の大規模プロジェクトのいくつかの具体例を分析することを通じて、技術的想像力の展開が現地のさまざまな組織・勢力や人びととの絶え間ない交渉の上に成り立っていた事実を明らかにする。日本帝国における技術に関する先行研究は、二〇世紀中盤の国家が主導する巨大公共事業を独裁主義の色濃い「ハイーモダニスト」的イデオロギーの事例とみなすジェームス・スコットの議論をおおむね肯定している。このイデオロギーは。「科学技術の進歩と生産の拡大により人びとの欲求はますます満たされるようになり、自然をも傘下におさめ・・・・・・なにより、自然法則の科学的理解と軌を一にするような社会的秩序の合理的なデザインを達成することへの自信」が強く表れたものだとされている。スコットの主張によれば、大型多目的ダムのような「中央集権的な合理性に基づく単調な計画」は、現地の人びとや自然界を単純化し「拘束衣を着せる」かたちで、地域が持つ多様で複雑な条件・知識・利害を抑圧し均一の構想に従わせるのだが、私の議論においてはむしろ、そういった多様で複雑な軋轢や交渉こそが、テクノクラート的イデオロギーの形成や土木工事のプロセスのまさに中心に位置すると考えられる。マーティン・ルースも述べているように、「土木工事が成功するには」ハイーモダニスト的イデオロギーの指図に従って「科学的合理性を適用するだけで事足りることはない」。そうではなく不慣れな環境に対する困難に満ちた対応が必要であるし、また異なる集団からの多様な「社会的インプット」が必要とされる。本書では戦時期のテクノクラートがハイーモダニスト的なイデオロギーに基づいてつくり出した構想をくり返して社会の複雑さを捨象するのではなく、むしろ戦意高揚キャンペーン・国家による動員計画・環境的影響・商業的利害・官僚の対立・地元住民の抵抗・技術の限界といったさまざまな要素が、個々のプロジェクトのみならずより大きな技術のヴィジョンを形成する際に、どのような役割をはたしたのかが分析される。より広い意味で言えば本研究の主題は、朝鮮や台湾の同化政策や天皇崇拝のイデオロギーによる帝国の基礎づけといった日本帝国主義の特殊性ではなく、植民地権力やイデオロギーが、当時世界中で盛んになっていた総合的技術による開発・計画という、より普遍的なレトリックを用いてどのように機能したのかという点にある。そして植民地の文脈における技術的想像力の機能を理解することで、戦後日本がアジアにおける影響力を誇示することとなる海外開発支援政策や技術支援プロジェクトとの重要な連続性を理解することを可能にするのだ。

本書の射程　　P27

本書が扱うのは、日本のファシズムおよび帝国主義の内部における技術と権力の関係であり、技術的想像力の範囲と深度についてカヴァーする。それは、知識人・技術官僚・技術者・国家計画立案者といった、戦時期の言説や国家の政策を形づくるのに大きな役割をはたしたさまざまな社会的アクターを詳しく吟味することによってなされる。本書では、日本帝国における都市・地域開発計画や河川流域の管理運営事業やダム建設計画といった大規模事業のいくつかを俎上に載せる。これらの分析が明らかにするのは、技術的想像力がたんに一握りのエリートの頭の中に浮かんだ構想の賜物ではなく、かなりの部分が現場において発展したものであるということだ。

第一章「生活を革新する技術」では、戦時中に転向した講座派マルクス主義者・相川春喜の理論と経歴を取り上げる。なかでも相川の技術論を検討して、それが生のあらゆる面を変革し動員するとされた主体および制度や機関との間に存在する複雑な社会的メカニズムとして構想されていたことを示す。このことで、技術についての想像力の多様でダイナミックな主体性とエネルギーが、日本ファシズムの展開に、結果的にはどのように動員されていったかを示す。

第二章「アジア発展のための技術」では、当時の重要な技術官僚である宮本武之輔と、技術者運動の言説を検討する。宮本は「技術の立場」、「総合技術」、「興亜技術」という概念を通して、技術官僚は、社会を組織化し複雑な問題を解決する「社会管理者」になるべきだと主張した。宮本はこのような主張を通じてさまざまな政策を起草し、狭い専門化を克服するために興亜院や企画院のような総合国策機関の創設を促している。また宮本は多くの技術者を植民地に送り込んで技術研究とプロジェクトを実施することを推奨しているのみならず、電源開発や灌漑といった単一の目的(技術をひとつの用途に限ること)にとどまらない、「総合開発」事業(例えば多目的ダム、国土計画などさまざまな技術を関連させ、「総合」的な開発を進めること)を推進していたのである。

第三章「大陸を建設する」では、具体的に三つの「総合技術」あるいは「総合開発」事業を分析する。なかでも満州国の遼河治水計画、中国北部の北京東西郊新市街地計画、そして満州ー朝鮮国境沿いの大東港総合臨海地帯計画を検証する。これら各事業は植民地技術者による総合開発計画のさまざまな側面を示している各事業においてはまた、様々な権力の関与、環境の差異、技術的な限界、予期できない事件、およびさまざまな形の抵抗などが起こり、それらとの密接な関係のなかで開発が進められ実現されることになった。それは日本が優れた科学技術を採用しているため、一方的に推し進めることができるという自信に満ちたかたちの技術者主導のプロセスではなく、技術者が未知の環境のなかでのダイナミックな交渉を行いながら、よりよい現地での知識を持つ中国の現場技術者や、異なる目標を持つ対立しているグループ、さらに偶発事象への対応といった過程において、知識と概念を獲得しながら、技術的な事業を推進させていくプロセスだった。そのため実際の現場においてあらかじめ想定していた技術的想像力は弱く、脆く、不均等なものでしかなく、多くのあいまいさや葛藤があっ

たことを示してゆく。

第四章「帝国をダム化する」では、満州国の豊満ダムと朝鮮と満州国の国境に跨る水豊ダムの事例を分析する。ここではダムを「権力の集積体」(assemblage of power)として理解する。つまりダムは日本帝国の技術的想像力が最も顕著に表わされたものであり、単なる耐久性のある構造物ではなく、政治的、法的、軍事的、経済的、社会文化的な権力形態すべてが集積したものであると考える。ダムや発電所を建設するための経済的および法的条件や、大規模なダム建設に適した環境を理解する新しい方法は、新しい政府機関、新しく発明された科学機器、そして新しく訓練された技術者との交渉において新たな知識を創造することで形成されなければならなかった。そのため日本と外国の技術を組み合わせなければならなかったし、土地収用と住民を移住させる法律制度も確立しなければならず、また警察や地元の政治家は住民との仲介役を務めなければならなかった。満拓のような拓殖会社や大東公司のような労働者動員機構も利用されたし、ダムの防衛のために関東軍と憲兵隊も配置された。さらに企業や居住者などのアクターが、技術をめぐる言説が持つ進歩と近代化のナラティブに挑むような対抗言説(たとえば、木材業者は、生業と戦時経済とバランスのとれた権利を主張し、居住者は科学技術の破壊的な力に警戒をした)も生まれていたことを指摘する。

第五章「社会機構を設計する」では、毛里英於菟という人物を通じて、満州港での「革新官僚」たちの持った技術的想像力のひとつの典型例を分析する。満州国での多くの革新官僚の目的は、総力戦と資本主義の再編のために、社会を最適かつ統合された社会経済システムに変えることであった。このシステムでは、先端技術に根ざし職能化された生活機能を通じて、様々な主体が自発的にシステムを運用することになる。その際ファシズム的権力は上から管理し規制するだけでなく、多様な主体の創造性と生産性を動員している。ファシズム的権力は、高度な技術、合理的な管理、コーポラティズム的組織に重点を置いて、国民生活システムを創出しようとしたのである。ここではファシズムの定義を生産性、創造性、自発性を動員する方法を含むものと広げ、さらにテクノ・ファシズムの具体的な様相に迫ろうとしている。

終章「戦後におけるテクノファシズムとテクノ帝国主義の遺産」では、戦後と戦中の非連続性の歴史記述への問いかけを行う。ここでは、連続性、すなわち戦後日本の東南アジア・東アジアにおける広範なODA事業、戦後日本の経営主義、開発主義の形成と総合国策機関の継続、経済発展のための科学技術政策、そして全国総合開発計画等を指摘しておきたい。

戦時中の技術的想像力を分析することによって明らかになるのは、日本本土ならびにその帝国において、技術のレトリックを用いて人びとを動員しようとするイデオロギーや権力の作動の仕方である。当時技術は、東亜新秩序というユートピアを実現する原動力として、変革をもたらす実践的な力であり徹頭徹尾政治的なものであるという積極的な定義を与えられていた。知識人・技術者・官僚の集団はそれぞれ独自の方針や利害に基づいて技術を定義することによって、戦時日本の全般的な国家目標の枠組みの中で、社会を抜本的に変革しようと努めていた。しかしこの技術的想像力を実際かたちにしていく段になると、彼らは本土ならびに植民地におけるファシズムを合理化することとなり、その結果生まれたのはユートピアどころの話ではなく、アジアの土地・資源・人民を徹底的に搾取するディストピア的秩序だったのだ。その顕著な例は、日本軍の生物化学兵器開発のために身の毛もよだつ人体実験を行った七三一部隊である。・・・・・・・・・・ また一方では、数百万におよぶ中国人・朝鮮人・アジア人が組織的に強制徴募され、日本の使命である「東亜建設」のための労働を強いられていた。・・・・・・・・・・ さらにまた数多くの朝鮮人・中国人その他のアジア諸国出身の女性たちが、圧力や詐欺や強制によって従軍慰安婦にさせられ、何人もの日本兵の相手をさせられていた。・・・・・・・・・・ 他方で、植民地や前線での蛮行と搾取は、日本本土にもはね返ってきた。老弱男女を問わず兵士や工場労働者として戦争に協力し、生活のすみずみまで犠牲にしろという要求が日増しに強まっていたのだ。その行きついた先が一九四五年に打ち出されたぞっとするようなスローガン「一億玉砕」で、すべての日本人が、日本を守るために「自発的」にアメリカの軍艦に体当たりをしかけた「神風特攻隊」の若者のようになることが求められた。地位向上と進歩発展の約束とはうらはらに、技術的想像力は、戦時の強制労働・レイプ・飢餓・資源搾取などを合理化し、おそらくはそれらを残虐なまでに組織的で効果的なものに仕立て上げたのだ。

日本の戦争犯罪にかんする研究の多くは、かくも残虐な行為を説明するのに、軍隊内部および社会全体に浸透している人種差別意識と独裁主義的文化に焦点を合わせている。だがそれは、日本本土ならびに帝国内の人びとの生活やその活力あふれる主体性を徹底的に活用しようと試みる技術的想像力との関係で部分的にではあるがよりよく、理解されうるものであるだろう。アジア全域にわたる技術に基づく近代的な「新秩序」を実現するという「大義」のためになら、個々の人間など究極的には使い捨て可能なのであって、そうやって各地の強制労働収容所・工場・実験室・「慰安所」・戦場における人間の命の「処理」がまかり通っていた。そうであるからこそ、人びとのより良い生活への希望や欲求に訴えかける技術的想像力がもたらす参加と変革を促すメッセージを、たんなる空っぽのイデオロギーにすぎないと片付けてしまうわけにはいかない。なぜならそれは、そのイデオロギーをかたちにするエリート層の利益を確保しつつ民衆にははかり知れない犠牲を求めるような、強力なモダニスト的開発構想を推進する数多の制度・機関を生みだしたのだから。そして比較的無傷なまま戦後にも生き延び

たのは、まさにこの権力と動員の新たな形態であって、しかも戦後アジア全体の開発と繁栄のための処方箋としてそれを推し進めた者の多くは、同じ顔ぶれの官僚や技術者や知識人だった。技術的想像力は戦後の日本やアジアが達成した経済の奇跡にとって欠かすことのできない「ポジティブ」な要素であったと評価するわけにはいかない。そうではなく、戦後においても決定的な影響を保持し続ける権力のイデオロギー的システムとして〈技術〉という概念の起源は戦時中の日本や植民地にあることを、本書は検証する。戦後の経済成長と社会発展を促進するために、日本はひきつづきかなりの規模で技術への投資を続けている。それは「日本型経営」の形成・「土建国家」の建設・影響力のある海外支援事業・「情報化社会」というポスト・工業化構想・原子力エネルギーの強力な推進など、枚挙に暇がないほどだ。こういった情況を考える上で、〈技術〉を通じての権力行使・動員・社会変革を行うといった論点がそもそも戦時中におおがかりに、そして明示的なかたちをとってあらわれていたという事実は、今日でも大きな重要性がある。たとえば、最近起きた福島原子力発電所の大惨事を受けて、豊富で安全なクリーン・エネルギーという原子力エネルギー産業の長年の約束が疑問視されている。それだけではなく、一九五〇年代以来の国による原子力エネルギー政策そのものへと疑いの目が向けられるようになってきている。こういった疑念が生じるのも、つまるところ技術に対する無批判なアプローチの結果であると考えられる。これは、国の発展のために民衆の利益を度外視して技術の重要性を強調し続けてきた制度や組織を野放しにしてきたことのつけがまわってきた、ということであると考えられるのではないのだろうか。

第一章　生活を革新する技術　P39　・・・・・・・・・・

第二章　アジア発展のための技術　P95　・・・・・・・・・・

第三章　大陸を建設する　P143　・・・・・・・・・・

第四章　帝国をダム化する　P201　・・・・・・・・・・

第五章　社会機構を設計する　P253　・・・・・・・・・・

終章　戦後日本におけるテクノ・ファシズムおよびテクノ帝国主義　P303

一九四五年八月一五日、天皇裕仁がラジオによって連合国に対する日本の降伏を宣言した。その数時間後、鈴木貫太郎首相は放送を通じて声明を発表した。鈴木は敵がどのように科学と技術を組み合わせ、原子爆弾という形の破滅的な効果を日本にもたらしたかについて言及し、同時に戦時期日本の弱点は科学技術であったことを指摘し、全ての日本人に対して連合国の下に再建される戦後世界のためには、特に科学技術についてあらゆる努力を惜しまないことを要求した。

国民が自治、創造、勤労の生活、新精神を涵養して新日本建設に発足し、特に今回戦争に於ける最大欠陥であつた科学技術の振興に努める外ないのであります。

皮肉なことに戦時期の技術は、鈴木が敗戦後の日本国民に対して科学と技術を振興するために涵養すべきであると訴えた「自治、創造、勤労」を動員するために構想されていたシステムの重要な一部であった。テッサ・モリスースズキが論じたように、「大東亜共栄圏の基礎であった技術観は新しい日本の基礎を構成した技術観念に転じた」。ジャニス・ミムラは、岸信介や椎名悦三郎が自らの官僚主義的な「管理経済」というアプローチを戦後日本が目指した中間層を中心とする消費社会の建設に適合させたように、いかにして「戦時テクノ・ファシズム」が「戦後の経営主義」に素早く転じたかに注目する。この「テクノ・ファシスト」のシステムは、「テクノ帝国主義」と、とりわけ帝国を戦時日本経済に組み込み、植民地の人民を動員するために策定された総合的な技術計画と密接に関わっっていた。技術的想像力を構成するこれら二つの要素（テクノ・ファシズムおよびテクノ帝国主義）は本土における国家繁栄の構築という戦後日本の文脈へと接木され、海外での開発援助を通じたソフトパワーの行使に繋がったのである。平和経済と武力を用いない外交へと移行した一九四五年以後の日本においても、技術は権力と動員を基調としたシステムを支え続けたのである。

日本の新しいリーダーは、戦時初期の技術的想像力を戦後の復興と高度成長という文脈に適用した。『宮本武之輔と科学技術行政』の結語において大淀昇一は、戦前の技術者および官僚であり、一九五〇年代には経済企画庁の上級職員であった大来佐武郎の履歴について論じている。この機関は日本の高度経済成長のための鍵となった一九六〇年における国民所得倍増計画や一九六二年の全国総合開発計画といった法制度や政策の起草をしている。大来は一九四六年に戦後日本の経済計画の方向性を示した「日本経済再建の基本問題」の草案を作成した有沢広巳によって主導された影響力のあるエコノミスト集団の一人であった。その文章は日本の生活水準と経済的状況を改善する上で不可欠な要素である科学と技術に特別な位置を与えている。戦時期において日常の中での合理性と生産性といった技術観が広められたように、その計画は、苦酷な労働をして天職

おいて日常の中での合理性と生産性といった技術観が広められたように、その計画は、可能な労働をして大職に献身する(金と地位にのみ関心がある資本主義的あるいは個人主義的な経済人ではない)「経済人」の発展に繋がる科学と技術教育を追求した。企業と国家に献身する高度な能力を備えた労働者というイメージは、日本が国際社会における経済大国へと急速に発展する上で重要な柱となった。

企画院と技術院など、戦時期の組織で官僚だった者たちは、戦時中に自分たちが技術的発展を促進し管理した組織に類似した制度を再設置することを直ちに試た。彼らは「科学の力が日本は健全で文化的な国家として再建する上で効果的に用いられるべきである」と主張した。すなわち、強固な国策の下に科学者と技術者を組織化することが不可欠であり、それによって最終的には科学的価値観が行政や産業、そして国民生活に反映されるとした。彼らはこのような価値観の普及と科学および技術の宣伝が日本の再建に絶対的に重要となると考えていた。大来や安芸皎一(内務省技官)や都留重人(経済学者・政策顧問)、平貞蔵(満鉄調査部)といった戦前の官僚や知識人、技術者は一九四八年に資源調査会を設立し、戦後日本の深刻な経済状況を念頭に置いた「科学技術に基づいた資源の総合的使用」という政策を形成した。

この総合資源計画と地域開発という新しい考えによって構成された行政組織横断的かつ専門を超えた組織は、テネシー川流域開発公社(TVA)の総裁であったデイビッド・リリエンソールの哲学から影響を受けたものであった。そして彼の著作を翻訳した技術者和田小六は、戦時期の日本の失敗は総合計画と技術の統合であったと指摘している。一九五〇年代、戦前の官僚は経済界のリーダーや政治家と共に国家の発展に資する調査を促進し、異なる省庁間で科学と技術政策を調整することを目的とした活動を始め、一九五六年には科学技術庁を設立するためのロビー活動を政府に対して行っている。この運動は、日本の高度経済成長促進する上で主要な官僚的機能を果たしていた通産省と、その管轄下にあった産業技術総合研究所の設立と緊密な関係性を持っていた。相川春喜のような知識人や宮本武之輔のような技術官僚によってなされた戦時中の提案がことごとく失敗に終わってしまった一方で、これらの提案は戦後にも広範囲にわたって継承されたのである。

技術的想像力は工場における労働者の生活水準の問題を扱うことにまで自らをもう一度拡大した。ウイリアム・ツツイは一九四五年以後も、戦時中の産業経営技術が継承されていることを実証した。たとえば、アメリカと日本政府の援助によって中堅の経営者そして経営専門家が日本生産性本部を設立した。日本生産性本部は最新の経営技術を「合理的」な運動として大衆化し、「労使協調」や素直な労働階級、そして経営的かつ技術的な秩序を正当化する世論に基づく「生産のイデオロギー」を促進した。彼らは人間関係のマネージメントと品質管理を促進したが、この双方は戦時期に根差すものであった。人間関係というアプローチは、生産性を増加させる過酷な手法に訴えるよりも、「職場の調和」や社会と労働者の精神的な充足を重視する。QCサークルは労働者の小集団に対し、自己実現や創造性を従業員に付与することで品質や効率性、生産性を向上させるための責任感を与えた。

管理によって労働者の関心を秩序化する試みは、戦時期に官僚や知識人が生産性を向上させるために労働者のイノベーションを奮起させるための提案に起源を持つものであり、それらは戦時期の政策の中に見て取ることができる。たとえば勤労のための新秩序(一九四〇年)は勤労というイデオロギーを重視することで「創造性と自発性」をもつ労働者の「全人格」の存在を確認し、そうすることで労働者が自らの職業に全面的に没頭することが意図されていた。賃金の代わりに国家的目標で労働者を動機付けようとした。このような手段あるいは別の手段において、戦後の経営技術では、戦時中の動員体制のために使用された手法のいくつかが継続した。

戦後日本の大衆消費経済への転換は、戦前や戦時期からはっきりと区別されることがたびたび指摘される。サイモン・パートナーは戦後、日本がいかにして民生用電機メーカーの巨人としてのし上がったかを研究することで、この転換を実証してきた。多くの日本人が自らの生活費をようやく満たすだけの稼ぎしか得られなかった終戦直後に需要の不足に直面した電機メーカーは、高価なテレビや洗濯機、冷蔵庫といったものを日本人に購入させる試みの一環として、科学と技術の合理性という言説を駆使した。パートナーは、エレクトロニクスのサムライともいうべき日本のエンジニアたちがいかにして現実のアメリカの技術を輸入し改良したかといったありふれた物語を避けた。そうではなく彼はエンジニアと経営者が広範かつ厖大な製品と高価な製品を消費する巨大な国内市場を確立したこと、すなわち技術がいかに市場化されてきたかを検討した。

たとえば、電機メーカーは「輝かしい生活」といったイメージを日本の消費者に対して売り出した。このイメージは冷蔵庫や洗濯機が主婦の家事仕事を合理化し、家族と過ごす余暇を与えるものであることを、そして日本の家庭により多くの文化をもたらしたテレビを持つ核家族を映し出していた。すなわちパートナーが示したように、戦後日本が大衆消費社会あるいはハイテク社会へと転換したという物語は、職場や家庭、経営あるいは技術の市場化の採用を通じた消費行動の合理化などの多岐にわたる技術の定義にかかわっている。本書で示したように技術的原則に沿った形で社会を構成するというこのような観点は、戦後になってアメリカから直接輸入されたものではなく、戦時中からの遺産であった。

技術的想像力は人々の日常の価値観を形成し、戦争そして帝国への協力を意図する強力なイデオロギーを構成した。シェルドン・ギャロンが示したように、人々に(倹約と勤勉のような)価値観の領域を内面化させるよう設計された「倫理的説得」という広義の技術は、戦時中に強化されたのであり、あらゆる社会機構がこのような価値観を戦後を通じて増幅させ続けた。「消費優先主義的」戦後と、「生産至上主義的」戦時という明確な区別でさ

えいくぶん誇張されたものであり、体制側の知識人、たとえば大河内一男は消費を奨励する事の重要性を提起し、官僚は戦時期の動員のために個人の動機を利用する事に心を砕いていた。同様のやり方に基づき、戦後の日本人を動員するべく設計された基本政策の多くは戦時期における技術的想像力と新しい権力の様式の出現に起源を持つものである。

「総合的技術」というイデオロギー概念は日本の復興と高度経済成長のための「全国総合開発計画」という形をとって戦後も継続した。経済安定本部の大来佐武郎をはじめとする官僚の手によって作成された一九五〇年の国土総合開発法の制定とともに、日本はアメリカの援助の下に指定された特定地域において多目的ダムの建設を始めた。この法律の目的は今日にまで影響を残しており、その内容は次のとおりである。

国土の自然的状況に鑑み、経済、社会そして文化的政治という総合的な観点から国土を完全に利用し、発展させ、維持し、産業立地の適切な選択を試み、同時に社会福祉を向上させること。

植民地期そして戦時期同様、「自然資源の効率化と災害予防、河川管理、都市と農村関係産業区域の場所、さらには文化の問題」といった幅広い問題が全国総合開発計画の下に位置づけられている。しかし戦時期とは異なり、一九五〇年の計画はTVAの草の根運動の哲学に触発されており、それは当時の日本の官僚や知識人によって熱狂的に受け入れられた。この文脈に沿い、多くの植民地ダムのエンジニアが電源開発株式会社(電発)という水力発電開発のための日本の公的企業や間組などの巨大建築会社で活躍し、専門技術を駆使して天竜川水系の佐久間ダム(一九五六年)を三年で完成させた。佐久間ダムは「東洋最大」のダムとして開発され、戦後日本最初の巨大開発であった。

水豊ダムや豊満ダムと同様、佐久間ダムは、洪水の調節や灌漑そして電力供給を通じて地域の生活を改善する日本の科学技術力の実例として、政府と企業が提案したものである。戦後民主主義と平和的な経済成長の旗の下にこのインフラ開発は装いを新たにされたが、それにもかかわらずダムの社会的効果は戦時期に作られた他のダムが持っていたものと酷似していた。日本が破壊された産業基盤を復興するため電力が切実に必要とされていたことから、このダム建設の影響を蒙った地元民の犠牲は不可欠だと認識されていた。ダムが建設されている間、佐久間は地域的に発展したものの、その数年後には農林水産業の衰退で都市へ移動する住民が急速に増加し税収も枯渇した。最終的に、佐久間ダムの電力は佐久間地域よりもむしろ東京や名古屋といった発展中の産業都市の成長に恩恵をもたらした。

最初の全国総合開発計画が一九六二年に策定されたとき、特定の地域の開発から「国土の均衡ある発展」へと政策の重点がシフトしていった。計画の目的は池田首相が一九六〇年に掲げた所得倍増計画で、目標とされた高い成長率に見合った適切なインフラの調整と発展であり、日本の太平洋ベルトへの過剰な産業集中を抑制するための政策シフトであった。この計画では地域の「新産業都市」建設を成功させ、都市の産業発展を念頭に置いた計画に主要な関心が置かれていた。この計画では農民のためのインフラ建設や高収益を生み出す産業の再配置、さらには農村発展に貢献する工場の促進よりもむしろ、臨海都市へ製品を輸出する利益が少ない産業部品工場を対象としていた。この時期、空気と水の汚染が主要な問題となり、日本の高度経済成長の大きな方向性や生活に対する影響に疑問を投げかける市民運動が高まった。

すなわち、戦時期同様、総合発展計画は決してバランスがとれていたものではなく、人々に対してよりもむしろ政府の経済成長目標と巨大企業の利害に向かうゆがんだ性格を有していた。後藤邦夫が示したように、「計画の淵源は戦時期における過剰な集中化であり、それは日本の戦後の復興期を通じて一貫するパターンを確立した」。このような計画にもかかわらず、日本政府は増加しつつある批判的な大衆を動員するための手段として総合発展のイデオロギーを発動させた。たとえば、・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

後藤が示したように、武谷のような戦後のマルクス主義者は「科学と合理主義におけるナイーブな自信」を持っていた。彼の影響を受けた人物である星野芳郎は自動化や合成化学、原子力といった日本の経済成長の鍵となる分野における技術革新が民主的な科学者によって主導されるべきだと提案したことで、武谷の議論をさらに拡張した。中村静治や岡邦雄といったマルクス主義者は、単に主体的側面にのみ着目するよりもむしろ、「技術の体系説」や資本主義が構造としてどのように技術を編成するかを理解することの重要性を提起しつづけた。

知識人の議論はむしろ技術の主観的あるいは客観的要素のうちどちらの要素を重視するかといった単純なレベルにとどまっており、一九六〇年代から一九七〇年代にかけて日本社会が急速な技術的転換を果たした事実から次第に乖離していった。マルクス主義者は技術的革新の背景を形成した「国家独占主義」という日本の新たな構造についての洗練された学術的解釈を提供したが、マルクス主義の教条性は技術的社会と政治的要素の分析を大きく妨げた。マルクス主義者は技術を労働者階級が社会主義に到達するための道具として使用できる完全に中立的な手段であるとみており、それゆえに彼らは技術が権力のシステムとしてどのように行使されているかを明らかにすることに失敗していた。

皮肉にも相川や毛里、宮本といった戦時期の人物の多くがむしろ彼ら独自のやり方によって、技術や主体性、権力といった複雑な力学について、戦後マルクス主義者よりも広がりのある思考を獲得していた。マルクス主義

権力という複雑な力学について、戦後マルクス主義者よりも広がりのある思考を獲得していた。マルクス主義者は、政治的信条が異なるのだが戦後日本の技術的合理性と進歩をめぐる主要な言説を共有していたことから、戦時期の人々によるそのような力学についての分析を締め出した。事実それは、支配的な「戦時期という非合理性と精神主義の暗い谷」といった言説に見ることができる。つまり彼らは戦時期や戦後日本の技術的想像力という植民地に起源を持つ言説に貢献した技術的進歩の枠組みを批判することに失敗したのである。

戦時イデオロギーを合法化した専門的技術に基づいた科学技術体制は、戦後にも受け継がれ発展した。日本が植民地帝国を喪失したことは、日本のエンジニアが海外のインフラの総合的発展計画へ参与することを決して終わらせはしなかった。たとえば久保田豊は一九四〇年から終戦まで鴨緑江水力電気会社の社長であり、戦後は朝鮮から帰国し、コンサルタント会社である日本工営の発足に着手した。一九五〇年代以降、同社のビジネスの中核は海外での大規模開発計画で日本の援助計画を入札し受注することに焦点を当てていた。「処女地」を開発する機会は失ったのだが、久保田は大規模インフラ計画の形で戦時賠償をすることを日本政府に提案している。それは独立を勝ち取った建国間もないアジアの国々を急速に発展させるだけでなく、日本企業に対して利益となる契約や輸出の機会を提供する事にもなった。

久保田は「アジアの建設」という既存の言説を更新し、途上国の開発計画を引き受ける日本のリーダーシップはアジアの「共存共栄」を創出すると政府高官を説得した。日本が海外における開発の原動力となるにつれて、日本工営は「日本の対外産業進出の前衛」であると国内でも知られるようになり、久保田自身も後年に東南アジアのメコン河開発で果たした役割のため世界の開発援助業界では「メコンの将軍」と称された。海外契約を勝ち取るために久保田は、東南アジアのリーダーに対し、植民地期朝鮮での重化学工業に直結したダムの建設の豊富な経験をよく吹聴した。多くの朝鮮人が植民地という過去ゆえに日本人を恨んでいるけれども、朝鮮人は戦時期に彼が手がけた「偉大なる事業」ゆえに自分を歓迎するであろうと久保田はさも自慢げに述べている。

たしかに韓国電力公社は久保田に対し、一九六〇年代の大韓民国の経済発展を促進する新しい計画の作成だけでなく、未完の植民地水力発電計画を完成させる手助けのために技術者を連れてくることを依頼した。一九六〇年代後半、久保田はインドネシアの大統領スハルトと日本政府に対し、かつてオランダがスマトラ島北端で計画し、日本軍統治下において久保田が調査をしたアサハンダムの建設を説得した。その際日本側の設備供給企業と建設会社は、地元の精錬業者が安価なアルミニウムを日本の製造業に提供する施設を作る二億ドルのプロジェクトを受注し、そこから利益を得た。プロジェクトによって生み出された二六〇〇もの精錬業の雇用はジャワへの移住労働者に渡り、プロジェクトは地域における産業インフラの育成に失敗した。すなわち植民地期と同様、このようなプロジェクトは地域住民の利益にかなったことは一度もなかったが、技術を通じた総合開発計画の下に地域住民は包摂されていった。

技術のイデオロギーが、現在も駆動する日本帝国主義に深く根差す専門技術と特殊な科学技術体制によってどのように支えられたかについては、より詳細に分析する必要性が大いにある。なぜならそれらは戦後日本の歴史を形成する上で重要な役割を果たしたからである。植民地期における経済人や官僚、技師のネットワークは、戦時期の専門知識に基づく科学技術体制を、彼らのプロジェクトや活動を正当化するために開発主義という新しい旗の下で復活させ再発明した。例えば・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。繰り返すが、戦時期の技術的想像力の批判的評価に失敗したことは、想定を越えた環境破壊と、国家の発展という名の下に継続した動員体制、そして地方自治体の服従という結果をもたらした。

これらの出来事と動向は、植民地期を生き残り新たな形で復活をとげた技術というイデオロギーと、科学技術的事実が進められた時代を、継続的に脱自然化し批判し続ける必要を我々に強調するものとなっている。

戦時日本の技術のイデオロギー(そしてそれは異なる計画や政策の遺産でもある)は、特定の歴史的文脈やアクターの合流、政治経済的状況の変革との関連の中でどのように変化したかを精緻に分析されなくてはならない。一九四五年以後も続く権力システムとしての技術という概念の継続的な適用は、さらなる研究を必要とする。なぜなら国家の発展のため科学と技術のイデオロギーがその基礎とされ、日本の社会経済的闘争はその下に包摂されると考えられていたからである。

戦時期に淵源を持つ技術と結びついた非民主的遺産を理解し向き合うことは日本の二一世紀の困難を乗り越える上で大きな可能性をもたらすであろう。慢性的な不景気や原子力に過度に依存した危険なエネルギー政策、継続する支配的かつ強固な官僚制度、真の意味での地域の能力を養成することに失敗した海外での開発援助などの諸問題の根源は、日本という国家とそこに連なる者たちが長期間にわたる発展途上国の貧困解決策は技術であると訴え取り組み続けたことにあるのだから。

解説　　塚原東吾・藤原辰史　　P323

1 本書の概観　2 本書の全体像　3 本書をめぐる議論と評価　4 翻訳の過程と分担
5 現在のモーアの研究と現代的な意味

追記

本書の最終的な校正を行っていたところ、本書の著者であるアーロン・モーアが急逝したという一報が飛び込んできた。二〇一九年九月八日、自宅と勤務先のあるアリゾナで、多臓器不全のため亡くなったという連絡が、訳者の一人であり古くからの学友である三原のもとに届いたというのである。　監訳者は韓国全州市で行われた国際東アジア科学史学会での八月二二日の合同セッションで、モーアも交えて活発な議論をしてきたばかりであった。つまり、この一報が届いたのは、その日から二週間ほどしかたっていないときだった。そのためこの訃報には言葉を失い、当惑するばかりであった。享年四七である。　たしかに全州でも健康が優れない様子は見て取れた。だがモーアの発表は韓国の工業化と日本の帝国主義時代の連続性を探るもので、大変広い視野を意図したものであり、発表の声もしっかりしていた。またほかのいくつかのセッションでも積極的な発言をしていたことが多くの参加者の印象に残っている。この全州での国際学会セッションは本書の書評会を主催した慎蒼健によって組織化されたもので、解説を書いた藤原も参加していた。・・・・・・・・・・。　まだ信じられないのだが、こういうことを書く機会はすでに他にはないと考えられるので以下のことを追記しておきたい。それは本書の翻訳にいたる、やや僭越ながらも抱いていた、監訳者の本当の意図である。　この本がとても野心的な展望をもった本であるあることは一読して了解した。ただ残念ながら、これほど日本や韓国、そして満州の歴史に通じており、研究者として東京外大に滞在したことがあるにしては、科学史・技術史の研究者との交流や検討は極めて限られたものであった。またアメリカの日本研究にありがちな現地語（つまり日本語など）での史資料研究や最新の研究成果などには、現地語での歴史家よりは弱いという側面もなきにしもあらず（孫引きなども時に見られる）という面は否めなかった。アメリカの博士論文によくある概念先行的なスタイルも垣間見えるもので、それも日本学・東アジアの地域研究という枠のなかのものが中心で、科学史の世界レベルでの流れ、つまり「科学と帝国主義」と呼ばれる領域などにも弱いところがみられた。その意味で、僭越ながらその道の先達として、本書をアメリカの日本・東アジア研究の枠のなかから引きあげて、より広い科学史・技術史のパラダイムや、日本での科学技術史のさまざまな研究にこれを接合してやることで、モーアの仕事は、より大きな展望を開くものになるのではないのかと考えた。　それで監訳者は畏友である東京理科大の慎蒼健に相談し、彼の研究会でモーアを招請してもらい、書評会という形で直接の議論を試みた。いうならば、まだまだ粗削りではあるし、さまざまな限界が感じられるところがあるのだが、それでもモーアの仕事には「見込んだところがある」と感じたのである。それでモーアの議論を日本語の読者層に翻訳し、これを紹介することで、より広いかたちでの相互検証を行う可能性に賭けてみた。植民史研究会でこの本の評者になった藤原からの賛同も得て、本格的な翻訳に乗り出すことになった。このことには集団で取り組むことも意図していた。訳者の面々がそれぞれの専門をもち、さまざまな面でモーアと切磋琢磨してくれる気鋭であったこともうれしかった。・・・・・・・・・・。　モーアをはじめとする日本学や東アジア地域研究の科学史関係者を、日本・東アジアの科学史家・技術史家とのあいだで、本腰をいれて議論させたいという意図は、韓国での国際会議の場に彼を招請することで一部実現した。いまや中山茂を失い、金森修・吉岡斉、そして中堅の要であった梶雅範までもが相次いで世を去っているように、日本の科学史の泰斗が次々にいなくなっている。そんななか慎蒼健と塚原は、英語圏で中山スクールの次代を担うモリス・ローや、韓国の俊英キム・テホの協力を得て、韓国での国際会議で連続的なセッションを企画して世界各地から若手を招請し、闊達な議論と意見交換の場を組織した。このように、監訳者はモーアを東アジア科学史家たちに紹介し、議論を鼓舞することで、科学史・技術史に新たなページを開くことを意図していた。つまりモーアをはじめとする若手中堅を東アジア科学史の土俵の上に引っ張り上げることが自分の仕事だと自認していたわけである。その一環として、この訳書が出た後でモーアを日本に再度招請し、共同研究を立ち上げる計画もあり、慎蒼健・モーアと三人で、全州では当地の地酒を酌み交わしながら、その具体的なプランも語り合ったところであった。　その矢先である。モーアは卒然としてこの世の人ではなくなった。訳書が出たら、翻訳チームを全員招請して、きちんとしたシンポジウムをやりたいと思っていたが、それももうできない。その時には関係の研究者を呼んで、もっと大々的にやりたいし、英語環境や韓国でやるのも面白いと語り合ったことが忘れられない。　・・・・・・・・・・。　だがいまは、それでも書物を信じたい。そしてモーアは、まだこの書物のなかで声を発していること、本書のなかで生きているということは、信じていいのではないのだろうかと思い直している。それはたとえ翻訳であろうとも、複数の文字や声の重なりの向こうに、モーアは確然として彼の思考や見解を述べている。我々がそれを読み、聞き取ることができれば、そのような技法によって、彼はよみがえってくるはずだ。この書物自体がバトンである。図らずも本書は、モーアのポスチュマス（没後）の刊行になってしまったが、本書を手にされている方々には、すでに風の中にいる彼の声を聴き分け、次の新たなスペースや次元へと彼のメッセージを運んでいただければ幸甚である。私たちは、すでに彼からのパスを受けているのだし、日本語という言葉にして、書物として世に問うことは、辛うじてだが、できたのだから。　それでも唯一の無念は、モーアの存命中に、この訳書を見せたかったということである。だがそれがかなわないとしても、いまでも草葉の陰から、本書を読むであろう読者に、彼は語り掛けているはずである。読み解きの術、そして聴き取りの技法を、静かに実践することで、まだこれからも、彼との対話を続けたい。
（塚原東吾）

著者略歴

アーロン・S・モーア（Aaron Stephen Moore）　1972年横浜生まれ。コーネル大学歴史学部Ph.D. アリゾナ州立大額歴史・哲学・宗教学研究学科（歴史学部）准教授。専門は近現代日本史、科学技術史。主な業績には本書のほか、共編著に *Engineering Asia : Technology, Colonial Development and the Cold War Order*（Bloomsbury Academic, 2018）、日本語に翻訳された論文としては、「「大東亜の建設」から「アジアの開発へ」 日本のエンジニアリングとポストコロニアル／冷戦期のアジア開発についての言説」（『現代思想』2015年5月号）などがある。2019年9月8日、急逝。

監訳者略歴

塚原東吾（つかはら・とうご）　1961年生。東京学芸大学修士課程（化学）修了。ライデン大学医学部博士Ph.D.（医学）。現在、神戸大学大学院国際文化学研究科教授。専門は科学史、STS。編著に、『帝国日本の科学思想史』（共編、勁草書房、2018年）、『科学機器の歴史　望遠鏡と顕微鏡』（日本評論社、2015年）など。訳書に、ロー・ミンチェン『医師の社会史』（法政大学出版局、2014年）、ラジャン『バイオ・キャピタル』（青土社、2011年）など。

訳者略歴（担当章）

三原芳秋（みはら　よしあき）　1974年生まれ。・・・・・。（序章）　金山浩司（かなやま　こうじ）　1979年生まれ。・・・・・。（一・二章）　栢木清吾（かやのき　せいご）　1979年生まれ。・・・・・。（三章）　山品晟互（やましな　せいご）　1995年生まれ。・・・・・。（四章）　小野萌海（おの　もみえ）　1998年生まれ。・・・・・。（四章）　井上雅俊（いのうえ　まさとし）　1993年生まれ。・・・・・。（五章）　内川隆文（うちかわ　たかふみ）　1987年うまれ。・・・・・。（終章）　辛島理人（からしま　まさと）　1975年生まれ。・・・・・。（終章）　藤原辰史（ふじわら　たつし）／1976年生まれ。・・・・・。（解説）

(2) 私達当会の仮定と提案と要望

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、私達人類が任意の特定の行為を選択して行為する場合、任意の特定のムーブメントやトレンド、方向性、行為者の過去の成功体験やその方法、理念、を踏襲するより、任意の特定の当該対象事象に由来する諸般の関係性、その性格や実態、を補助し伸長する行為を選択することが必要である、私達人類が、私達人類の為した行為と対象事象の諸般の関係その性格や実態とに何らかの齟齬を発見した場合、可及的速やかに当該の過去の行為に遡及して之を訂正し、対象事象の諸般の関係性その性格や実態の破壊を最小限に留め、破壊を回復する措置を講じなければならない、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、私達人類が任意の特定の行為を選択して行為する場合、任意の特定の、ムーブメントやトレンド、方向性、行為者の過去の成功体験やその方法、理念、を踏襲するより、任意の特定の当該対象事象に由来する諸般の関係性、その性格や実態、を補助し伸長する行為を選択すること、私達人類が、私達人類の為した行為と対象事象の諸般の関係その性格や実態とに何らかの齟齬を発見した場合、可及的速やかに当該の過去の行為に遡及して之を訂正し、対象事象の諸般の関係性その性格や実態の破壊を最小限に留め、破壊を回復する措置を講ずること、を提案し要望します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、私達人類の認知、思想、概念、技術、科学、行為、を、私達人類の、意図、想像、目的、計画、から解放し、事象の必然性、並びに、私達人類のホモ・サピエンスとしての必然的な欲求、に帰属させること、を提案し、要望します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の創造性の根源、要素が、私達人類の、意図、想像、目的、計画、によりも、事象の必然性、並びに、私達人類のホモ・サピエンスとしての必然的な欲求、にある、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、日本地域、又、日本地域の文明に於いて、1920年代以降現代迄の100年間、新しい技術の時代として、達成した事象は、実に、私達人類の個体、

又、私達人類の集団、又、他の事象の動員たる事象であるのか、それとも、私達人類の個体に於ける創造たる事象、即ち、私達人類種たる生命体に特徴的である生物的生理上の自由と仮定し得る事象、即ち、私達人類に於いて必然であると仮定し得る事象、であるのか、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、西欧地域、又、西欧地域の文明に於いて、その近代以降、フランス革命を経て(国民主権、フランス革命戦争－1793. 8. 23 国民公会が国家総動員を発令－平等な徴兵制施行－国民皆兵－勝利)、総力戦の概念が圧倒的に現実の事象と予見された、第一次世界大戦が終結した後、1920年代以降現代迄の100年間、新しい技術の時代として、達成した事象は、実に、私達人類の個体、又、私達人類の集団、又、他の事象の動員たる事象であるのか、それとも、私達人類の個体に於ける創造たる事象、即ち、私達人類種たる生命体に特徴的である生物的生理上の自由と仮定し得る事象、即ち、私達人類に於いて必然であると仮定し得る事象、であるのか、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類の創造性は、任意の特定の、何らかの、私達人類の事象を達成する為の手段、道具、であるのか、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、来るべき時代に対し、私達人類の個体、又、私達人類の集団、又、他の事象の動員たる技術の時代、と云うより、私達人類の個体に於ける創造、即ち、私達人類種たる生命体に特徴的である生物的生理上の自由、即ち、私達人類に於いて必然、としての時代、であることを期待したい、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、例えば、あなたは、そして、わたしは、動員するひとなのか？、又は、動員される人なのか？、それとも、創造する人なのか？、と仮定します。

〔情報〕
○ 2021年（令和3年）2月13日（土曜日） 日本経済新聞 第32面 【読書】

『シルクロード全史 （上・下）』 ピーター・フランコパン著　　［西洋の世界史叙述 修正迫る］

原題＝THE SILK ROADS （須川綾子訳、河出書房新社・各3600円） ▼著者は71年ロンドン生まれ。英オックスフォード大教授。

シルクロード、すなわち絹の道とは、ユーラシア大陸の東と西を結ぶ交易路のことである。日本では1970年代にブームとなり、以後、シルクロードの歴史に関して数多くの書物が公刊されている。それらと同種のものだろうと本書を手に取った読者は、大きな驚きを覚えるに違いない。そこに描かれているのは、単なるシルクロードの歴史ではなく、世界の歴史に他ならないからだ。　著者は、地中海と黒海の東側からヒマラヤ山脈にかけての広い地域（インド亜大陸も含む）をシルクロード地域と名付け、その過去がヨーロッパ、後には西洋の過去と密接につながっていた、しかも多くの時期においてこの地域の動向こそが世界全体の動きを律していたと論じる。常にヨーロッパを中心に世界が世界が回っていたわけではない、この地域に注目すれば世界史を異なる視点から解釈できる、それは「新しい」世界史だというのが本書の主張である。　何をいまさらと思う人が多いのではないか。日本では著者のいう「新しい」世界史の枠組みはとっくに知られている。しかし、西洋諸国では多くの人々がなお、ギリシア・ローマに始まる西洋文明の歴史が世界史でありそれ以外の地域の過去は世界史には関係ないと考えている。西洋とそれ以外の過去を隔てる壁は依然として高い。　著者は、シルクロード地域は「西洋に住む私たちから再発見されるのを待っている世界」なのだという。現地や日本の研究成果を知らない不遜で一方的な宣言である。しかし、それは西洋の一般読者に向けての筆の滑りだと目をつぶろう。シルクロード地域の歴史を組み込むことで西洋における従来の世界史叙述の偏りを修正し、西から見た「新しい」世界史を描いている点は評価したい。　取り上げられるトピックは、キリスト教やイスラーム教の誕生と広がり、十字軍、モンゴルの西征、黒死病、金、銀、奴隷、毛皮などの交易、東インド会社、西洋諸国の政治・軍事的進出と現代に至るまでの覇権争いなど、日本の読者にはおなじみのものばかりだ。それだけに、著者と読者の立ち位置によって、世界史の描き方は微妙に異なるのだということがよく分かる。どちらかが正しいのではない。世界史の叙述は、世界と同様に多様なのだ。　《評》 東京大学名誉教授　羽田 正

『リターンズ』 ジェイムズ・クリフォード著　　［先住民の世界観 その可能性］

原題＝RETURNS （森埜守之訳、みすず書房・5400円） ▼著者は45年米国生まれ。カリフォルニア大学名誉教授。著書に『文化の窮状』『ルーツ』など。

21世紀初頭、切羽つまった人間社会で、先住民の存在感がつよまっている。『文化の窮状』『ルーツ』につづくクリフォード『リターンズ』の副題は、「二十一世紀に先住民になること」。描出されるのは現代の、混成文化的な、新しいかれらの生成だ。「滅びゆく民」というノスタルジックな差別的視線も、純粋に伝統的な民などという嘘っぱちも、ここにはない。偶然をとりこみ、呼称も状況に応じ変化させ、柔軟に生きのびるかれらが、現前する。「地盤は動いたのだ」とクリフォードは繰り返す。ヨーロッパ中心主義もアメリカの覇権も、まだ消えてはいない、だが脱植民地化と多方向に向かうグローバル化の流れのなかで確実に求心力を失いつつある。世界がひとつの方向に進化していくという歴史モデルが保てなくなりつつあるいま、各地の先住民たちが長く維持してきた循環する世界が螺旋状に連なるモデルは、複数の異なる世界が矛盾を抱えたまま重なり併存する、新たな世界観の可能性を示す。　プロローグでは本書の主題に至る道が自伝的に記述されている。1950、60年代のアメリカの知的風土、その後の批判的理論と多様性への傾倒、そして90年代以降いまにいたる脱西洋中心主義のプロセスが生む不安定感、不透明感。そのままカルチュラル・スタディーズの歩みを一歩引いて俯瞰する第1部へと読み進めれば、レイモンド・ウィリアムスやスチュアート・ホールらの理論を文化人類学の視野と結びつける道筋を追うことができる。より具体的な第2、3部の「北米最後の野生インディアン」イシの話、トンガ人作家ハウオファの太平洋ネットワーク論から読みだしてもいい。最終章、アラスカ・コディアック島の仮面の帰還はことに印象深い。　19世紀に青年コレクターが大切に持ち帰り、フランスの博物館で100年以上守られてきた先祖の仮面を見たアラスカの子孫らは、その力づよい造形に激しく心を動かされる。ロシアとアメリカの支配に耐え、感染症や天災を生き延びたかれらは、自分たちの文化を見失いつつあった。交渉により展覧会が実現、新たな仮面作成と民族アイデンティティ再建につながる。これは和解の物語、暴力を越え共生するための、希望の探求だ。
《評》 比較文学者　中村 和恵

『アルマ（ALMA）』 ル・クレジオ著　　［楽園の島の裏面掘り起こす］

（中地義和訳、作品社・2800円） ▼著者は40年生まれ。フランスを代表する作家。08年にノーベル文学賞を受賞。著書に『大洪水』など。

インド洋に浮かぶ熱帯の島、モーリシャス。パリ国立自然史博物館に勤める男性ジェレミーが、その島を目指し旅立つ。一個の白い石をお守りよろしく鞄に入れて。　それは絶滅した鳥ドードーの砂嚢から出た石である。モーリシャスに生まれながらフランスに移住し、島に戻らなかったジェレミーの父が、大昔サトウキビ畑で拾ったものだ。ジェレミーの旅は幻の鳥の痕跡を探るとともに、一族のルーツをたどる意味をもつ。　サンゴ礁と美しい海が憧れを誘うモーリシャスだが、彼が見出すのは楽園の光景ではない。大農園を経営していた父祖の家はすでになく、親戚の者たちは老いさらばえた。島の若者たちはドラッグや性的搾取の魔手に晒され、過去の伝統は消し去られつつあった。　ジェレミーは一人の少女が身を持ち崩していくさまを目のあたりにし、島の現状を知る。サトウキビ栽培を支えた奴隷制度の残酷さも浮かび上がる。リゾート地のイメージを損ないかねないそんな裏面にこそ、掘り起こして伝えていくべき記憶の息吹が通っている。　作者のル・クレジオ自身、モーリシャス出身の父をもつ。これまでも島に関わる物語を紡いできたが、この作品には歴史の余白に消えていった者たちへの共感がことのほか熱く脈打つ。黒人奴隷やインド人移民に寄り添う描写が、彼らの経験を痛切に甦らせる。迫害された者たちの象徴となるのがドードーだ。島からイギリスまで運び去られた一羽の行く末が、鳥の悲しみと恐怖が乗り移ったような筆遣いで描き出され、読む者の心を強く揺さぶる。　さらに驚かされるのは「ドードー」をあだ名とする宿無し男の物語だ。ジェレミーの遠縁にあたる異形の人物で、放浪の生涯を送る。ついには島を出てパリに至り、フランスをさすらう。社会の底辺で身をすりへらしながら、胸に音楽を秘め、死者たちの記憶を保つ。この男の独白をジェレミーの語りと交差させることで、作品の厚みと手応えはいや増した。両者の接点が描かれる瞬間、鮮烈なエモーションが迸り出る。　ノーベル賞作家が77歳にしてなお、これほど濃密な、迫力ある傑作を書き上げたことに感嘆を禁じ得ない。詩情みなぎる散文を香り高い日本語に移植した訳者の手腕も特筆に値する。　《評》 放送大学教授　野崎 歓

〔情報〕
○ 2021年（令和3年）2月13日（土曜日） 日本経済新聞 第32面 【読書】　《半歩遅れの読書術》

『 日本の成長 大胆に振り返る　古代から近世のGDPを推計 』　　磯田 道史

経済史は数量化で異時点・異空間の比較ができる。だが限度もある。私の学生時代、長期経済統計といえば100年が限界。明治期以後の国民所得計算であった。それより古い時代の国内総生産（GDP）の推計は幕末長州藩の推計ぐらい。古代から日本の超長期GDP推計をやって近現代にドッキングできないか。そんな夢を抱いたが勇気がでなかった。　前近代は史料が乏しい。多くの「仮定」を入れなければGDPは出ない。私はなまじ古文書に詳しいものだから、仮定を入れたマクロ推計を避けた。海外ではアンガス・マディソンといった超長期経済統計の研究者が出現していたが、どうにも真似できず、精密な記録で『武士の家計簿』のようなミクロ分析をやっていた。　ところが大胆かつ優秀な研究者はいるもの。それが『経済成長の日本史』（名古屋大学出版会）の著者、高島正憲氏である。氏の推計で日本経済は1000年の長さでひとまず比較可能になった。古い時代は農業の比率が高い。産業構造が単純で推計しやすい面もある。国内人口・耕地面積・推定収量から農業生産量等を推計。価格と合わせると、手工業・商業を除くGDPのかなりの部分が拾える。あとは手工業や商業だが、これらは都市人口の推計を丁寧に行えばそれなりに見えてくる。　本書の推計結果を示す。日本の農業生産量は奈良時代の730年頃、600万石前後であった。鎌倉末期の13世紀末になっても800万石強だから500年間あまり変わらなかった。奈良・平安初期は耕地開発が盛んだったが、平安末期から鎌倉前期は気候が寒冷化。農業の成長率は低下していた。その後、南北朝から戦国期に年率0．3～0．4％と前近代の農業社会としては高い農業生産の成長があった。中世後半、低湿田に適した赤米（大唐米）が普及。食料生産が増えたのが一因。日本はこうして生産を増やした。1人当たり総生産は奈良時代に玄米で1．4石強。平安期に2．2石弱。鎌倉・室町期に2石前後で推移。江戸前期に2．5石弱。江戸後期に3石を超え、明治7（1874）年には約3．7石に至った。　つまり、幕末の人は古代の約2．3倍、中世の約1．5倍の豊かさ。1人当たりGDPを、国際比較すると、日本は幕末にようやく貧国を脱し、中国の宋代の豊かさに並んだとの推計になる。なんとも壮大な比較である。（歴史家）

◇『私達人類の遺跡の破壊』　2021年(令和3年)2月14日 日曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、遺跡を破壊する時、私達人類が、私達人類の歴史的な思索と行為と経験の積み重ねを省みる事なく、ただ、その蓄積を無為とする姿勢をもって、その日常を行為し生活する私達人類の世界の基層的な関係性を形成しているを以って、遺跡を破壊することを可能足らしめている、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、例えば、私達人類の世界の日本地域に於ける、その私達人類の姿は、何処にあるのか、と仮定します。　〆

◇『経過、私達人類にとっての効果、ムーブメント(動向)』　2021年(令和3年)2月15日 月曜日

私達当会は、遺跡について、大いなる意義や価値はない、そこにあるのは、経過と私達人類にとっての効果とムーブメント(動向)である、と仮定します。　〆

◇『自然、遺跡、人工、私達人類の感覚の感知と受容と認知』　2021年(令和3年)2月15日 月曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類にとっての、私達人類の感覚器官による私達人類の感覚の感知と受容と認知について、之を、自然、又は、人工に相対する事象として考察するとき、私達人類は、自然たる具象に関して、之を、諧調、グラデーション、連続的変化、である全体、として、感知し受容し認知する処、私達人類は、私達人類の任意の特定の選択、即ち、捨象、即ち、抽象に由来して再構成された事象、即ち、人工たる具象に関して、之を、原形の在り方、状態を、整理し、情報の質、関係性と量、を削減し、抽象的な形態としての在り方、状態に集約した、即ち、断裂的対比、としての部分の集合、として、感知し受容し認知する、即ち、私達人類が自然に対する場合と人工に対する場合と、両者の比較に於いて、私達人類の感覚の感知と受容と認知への要素と要件と方法と手順が異なる、その可能性がある、と仮定します。

私達当会は、私達人類の感覚器官による私達人類の感覚の感知と受容と認知について、専ら、自然たる具象と人工たる具象の何れか一方に、長期間、依存すれば、私達人類の個体に於ける感覚の感知と受容と認知の形態に偏倚を生じ、之に由来して、私達人類の個体の理解し関係し行動し得る、その質、関係性と量、性格に於いて偏倚し、之を偏狭に限定する可能性がある、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類の日常の身近な活動の空間に、自然、遺跡、人工である、夫々、その性格の異なる具象を、夫々、その性格に於ける真正性と完全性を包摂し、相互に連続して、定着すること、を提案し要望します。　〆

〔情報〕
○ 2021年(令和3年)2月16日(火曜日)　日本経済新聞　第1面

『 東北新幹線 復旧に10日　宮城・福島深度6　企業活動に影響 』

13日深夜に宮城、福島両県で最大深度6強を観測した地震で、東北や関東の10県で負傷者が157人に上ったことが15日、総務省消防庁のまとめでわかった。一部不通となった東北新幹線は一ノ関ー森岡間で16日から運転を再開する。全面復旧には10日前後かかる見通し。(関連記事2面、社会面に)　政府は・・・・・。
〆

◇『科学的、合理的、知的、主知的ー主意的ー主情的、宗教的』　2021年(令和3年)2月16日 火曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、例えば、私達人類の議論たる事象に於いて、私達人類の議論たる事象に関する私達人類にとっての作用と動作と効果を信じていなければ、私達人類の為す議論と、その私達人類にとっての作用と動作と効果は成立しない、私達人類は、専ら、ただ、信じることによってのみ、私達人類にとっての作用と動作と効果を形成する、即ち、私達人類は、科学的でも、合理的でも、知的でもなく、主知的ー主意的ー主情的(〜〜魂の三分説:プラトン:プシュケー(魂)ーロゴス(理知)ーテュモス(気概)ーエピュメーテース(欲望))と云うより、専ら、宗教的である、たとえ、神が死んでいたとしても、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、私達人類の想像に於いて、信じることによって、救われる可能性を有し、私達人類は、私達人類の活動の空間に於いて、信じることによって、自身を破壊する可能性を有する、と仮定します。　〆

◇『遺跡と私達人類の事象』　2021年(令和3年)2月18日 木曜日

私達当会は、遺跡について、遺跡の、"行為、痕跡、記憶、生と死、自然の様式である連続と階調(グラデーション:gradation)並びに人工の様式である断裂と対比の両者の包摂、存在上の控えめの表象"、との要素は、私達人類の、芸術(アート:art)、学術(アカデミック:academic)、娯楽(エンターティメント:)、生活(ライフ:life)、信仰(フェイス:faith)、の何れとも多様な親和性を構成し得る、諸事象に対する、遺跡の真正性と完全性に於いて顕著に顕現する、接点(インターフェイス)としての必然的な機能である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、遺跡について、遺跡の真正性と完全性に豊かに包摂する、諸事象との本源的で多様な親和性を構成し得る必然的な接点(インターフェイス:interface)としての機能に、暗黙的明示的形式的に由来する、又、私達人類の事象が可変的であることにより永続的である可能性に由来する、根源的な諸活用の群を、広範に形成すること、を提案し要望します。　〆

◇『県庁跡地－①西側区域はキリスト教時代の墓地域の可能性－②海上遺跡としての長崎の丘－③県庁跡地の活用と当該の遺跡の活用－④ 長崎地域に於ける遺跡と歴史の概念形成に関するバイアス(偏倚)』

2021年(令和3年)2月19日 金曜日

(1) 情報

○ 2021年(令和3年)2月19日 金曜日　長崎新聞　第22面 【社会】

『県庁跡地調査　1600年代の大型瓦片など出土　江戸期以前 建物遺構見つからず』

江戸時代に長崎奉行所があった県庁跡地(長崎市江戸町)で行われている埋蔵文化財調査で、当時の建物で使われたとみられる1600年代製の大型の瓦の破片などが見つかったことが、県教委への取材で18日までに分かった。一方、今回の調査で発見が期待された江戸期以前の建物の遺構は見つからなかった。

□ (写真) 県庁跡地の調査で見つかった丸い瓦の破片など＝長崎市江戸町

同跡地は16世紀の長崎開港後、国内キリスト教の拠点「岬の教会」が置かれ、江戸期の禁教令後に奉行所が建つなど、歴史的に重要施設が立地。2019年度の試掘調査で古い瓦や陶磁器片などを含んだ地層が出土した敷地西側で、県教委が昨年12月に本格的な調査に着手。これまでに、ほぼ作業を終えた。　県教委学芸文化課によると、1392平方メートルの範囲を発掘。直径1メートルほどの井戸跡や明治期の構造物、盛り土などが見つかった。　井戸跡の中からは大量の瓦片、陶磁器片などが出土。瓦片は、長崎奉行所立山役所跡(同市立山1丁目)など、県内外で発掘例がある直径15センチほどの丸い瓦のかけらなど。うち一つには小さな「大」の文字が刻まれており、過去に玖島城跡(大村市)や鹿児島県などで見つかった例がある。いずれも、奉行所の建物で使われた可能性がある。　一帯は19年度の調査で17世紀前半の土や遺物が見つかり、当時の地層とみられていたが、範囲を広げて掘り下げたところ、西寄りの広範囲が明治初め頃に掘り返して造成されていたことが判明。これ以前の地層は残っていなかった。　同跡地は当初、長崎市の「文化芸術ホール」建設が計画されていたが、19年度の調査を受け市が建設を断念。県教委は本年度も調査を続け、昨年5～10月の敷地南側の発掘では大規模な石垣遺構などが出土した。　県教委は今後、調査結果の概要をまとめ、県は跡地活用策の検討を本格化させる見通し。同課の濱村一成主任文化財保護主事は「建物の遺構は見つからなかったが詳細な調査ができた。結果を跡地活用に生かせるよう報告書をまとめたい」と話している。　(山口恭祐)

□ (絵図) 県庁跡地の調査状況　今回調査した西側の区域、本館があった区域、旧県庁正面玄関側、石垣が現存、南門、[出島側]：・江戸期の石垣のライン、・2019年度の調査範囲、・昨年5～10月の調査範囲

(2) 私達当会の仮定と提案と要望

① 西側区域はキリスト教時代の墓地域の可能性

私達当会は、2021年(令和3年)2月19日 金曜日　長崎新聞　第22面 【社会】 記事 『県庁跡地調査　1600年代の大型瓦片など出土　江戸期以前 建物遺構見つからず』 ー「西寄りの広範囲が明治初め頃に掘り返して造成されていたことが判明。これ以前の地層は残っていなかった。」、との記載に由来して、私達人類が、通時的に、キリスト教期の教会に関連する広場を中心とする施設の西側の後背の斜面地、又は、之を造成して、墓地を形成し、その後、内町の郭外へ強制的な移転が行われ、後に、糸割符宿老会所、さらに、長崎奉行所西役所の敷地と施設として活用され、幕末の西役所の「備場」(砲門)としての建物を、明治初め頃に解体、その他の事象に由来して、遺存するキリスト教時代の墓地の痕跡を発見し、発掘して遺骨と遺物と遺構を徹底して、捜索して、撤去し、廃棄する等、処分した可能性がある、背景として、日本地域には、古来、西方浄土の観念がある、当該敷地中央平坦部は人々が集まる広場となる～当該敷地南方斜面は外港航路に対して正面となる～当該敷地東方斜面は拡張する市街に近接直面する等により墓地とすることを回避した可能性もある、又、明治初め頃には、日本地域では全国的に、まだ、キリスト教への抵抗感が強かった側面もある、明治前期の長崎地域の佐古の丘に於ける長崎病院の旧養生所病院建物からの移転建設にあたって、予定した敷地に係る梅香崎の招魂社、軍人墓地の遺骨取扱いについて、金鍔谷への廃棄があった、と風評があり、陸軍並びに海軍より遺骨取扱いに粗忽があると度重なる調査要請と数次の建物解体発掘等調査実施と竣工遅延の史実もある、長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡の活用、即ち、県庁跡地活用、の検討の前提として、当該の事象について、過去の発掘調査の成果の再確認と再構成、さらに、追加的な、又、側面的な、発掘調査、史料調査、その他の手法を駆

使した、さらなる遺跡と歴史の確認、その過程と成果の公開と検討が必要である、この点、私達人類の行為に対する、十分な留意と配慮を要する、と仮定します。

私達当会は、皆様に、長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡の活用、即ち、県庁跡地活用、の検討の前提として、当該の"過去の発掘調査の成果の再確認と再構成、さらに、追加的、又、側面的な、発掘調査、史料調査、その他の手法を駆使した、さらなる遺跡と歴史の確認"の実施とその成果の確認を提案し要望します。

② 海上遺跡としての長崎の丘　～民俗的な墓域/宗教的空間～東アジアの海上交易拠点～岬の教会～内町－出島－長崎奉行所西役所－長崎奉行所立山役所－外町－郊外－長崎海軍伝習－港－河川－溝－運河－道－街道－治水－水道－土木造成～　・・・文化・社会・交流・物流・経済・科学・技術・文明・風土・エスニシティ・・・

私達当会は、長崎地域の"長崎の丘～旧市街"について、陸上の遺跡、である以前に、海上の遺跡とその拡張の遺跡、である、即ち、海と浅瀬に囲まれた、即ち、"民俗的な墓域/宗教的空間～東アジアの海上交易拠点～集落拠点～岬の教会～内町－出島－長崎奉行所西役所－長崎奉行所立山役所－外町－郊外－長崎海軍伝習－港－河川－溝－運河－道－街道－治水－水道－土木造成"としての、文化・社会・交流・物流・経済・科学・技術・文明・風土・エスニシティに関わる、遺跡、である、と仮定します。

私達当会は、長崎地域の"長崎の丘～旧市街"の遺跡について、「江戸期以前」や「建物遺構」等、特定の限定された期間や事象を期待する心情の在り方の可能性がある処、共時的通時的に、その全体像を、俯瞰できる、その実態を把握して、遺跡として現出する在り方を優先させなければならない、之により、長崎地域の過去と現在と未来の在り方が浮き彫りになる、之が、当該の遺跡群の活用の基層、基盤となる、と仮定します。

私達当会は、長崎の丘遺跡と旧市街遺跡、－県庁跡地と一帯、又は、長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡、を包含する－、について、私達人類にとって、築地や護岸、運河、浅瀬等、水域と陸地の接点の遺跡が、当該の遺跡、又は、遺跡群遺跡、の本源的な特徴を形成する、と仮定します。

私達当会は、長崎の丘遺跡と旧市街遺跡について、岬型の「海城/水城」とその城下町の態様である、と仮定します。

私達当会は、遺跡の活用について、私達人類は、遺跡の範囲と性格の全体の実態を明らかにして把握し、その後に、之を基盤に、行為しなければならない、と仮定します。

私達当会は、長崎県庁跡地と一帯、即ち、長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡、に関する、長崎県の遺跡調査について、築地や護岸、運河、浅瀬等、水域と陸地の接点の遺跡としての実態が明確にならない処、遺跡の調査と活用として、不十分である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡、並びに、之を包含する、長崎の丘遺跡と旧市街遺跡、について、今後、築地や護岸、運河、浅瀬等、水域と陸地の接点の遺跡としての実態の全体を、即ち、之を、長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡の活用の検討の前提として、長崎市江戸町公園その他区域の発掘等調査により、明らかにすること、を提案し要望します。

③ 県庁跡地の活用と当該の遺跡の活用

私達当会は、県庁跡地又一帯の活用と当該の長崎の丘の長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡の活用について、県庁跡地と一帯の空間の範囲が、長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡であると認識し得る事実により、県庁跡地又一帯の活用と当該の長崎の丘の長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡の活用は同義である、又は、シンクロナイズ（synchronize）、一瞬の内に一致、していなくてはならない、と仮定します。

私達当会は、皆様に、県庁跡地又一帯の活用と当該の長崎の丘の長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡の活用について、県庁跡地又一帯の活用と当該の長崎の丘の長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡の活用は同義であると認識し理解し、関係事象を把握し、同時に、双方の現象を、シンクロナイズ（synchronize）、私達人類の行為に於いて、事象を、同期して、一瞬の内に一致させる、こと、を提案し要望します。

④ 長崎地域に於ける遺跡と歴史の概念形成に関するバイアス（偏倚）

私達当会は、私達人類について、私達人状類の長崎地域の世界にあって、例えば、長崎地域に関する遺跡と歴史の概念形成に於いて、安易な、バイアス(偏倚)が、暗黙的に、介在する可能性がある、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人状類の長崎地域の世界にあって、例えば、長崎地域に関する遺跡と歴史の概念形成に於いて、暗黙的に介在する可能性があるバイアス(偏倚)に関して、之を、明示的に明らかにし、当該のバイアス(偏倚)を、速やかに、解消すること、を提案し要望します。 〆

◇『私達人類の事象と遺跡 ～ 私達人類の危機』　2021年(令和3年)2月19日 金曜日

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類は、古来、私達人類の交換と交易が私達人類に関係する様々な差異を契機とし、私達人類の世界の各地に小さな集団と、ユーラシア大陸の中央部に多様な事象を包摂する帝国と、ユーラシア大陸の周辺部に比較的小さな王国を構成する処、私達人類の西欧地域に於いて、私達人類相互の意図と駆け引きと力を私達人類の認める価値の根源とする重商主義を経由して、一方で、科学を認識しつつ、技術の革新を加速し始め、分業と量産への資本投下により他者に対する優位たる概念を形成する資本主義を形式化、ユーラシア大陸の東西の周辺部、英、仏の王国と日本地域で主権国家を形成し、仏は、フランス革命で国民国家を形式化、、又、フランスの国民公会は、フランス革命戦争で、国家総動員と平等な徴兵(即ち、国民皆兵)を実現、フランスは西欧地域で勝利、第一次世界大戦を経て、総力戦の概念を現実の事象とし、近代的な主権国民国家を出現した処、私達人類は、現代に至るまで、主権国民国家の形式を、自己と他者の二分法の概念を基盤とし、私達人類の個体と物資の動員への形式を社会的技術とする、私達人類の個人と集団の相互、地域間、国家間の抗争、私達人類の日常的な表象では競争、とその勝利の手段として、活用するのみである、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、例えば、私達人類の全ての個体の存在と行為の本源的必然的最終的な意義は、自己以外の他者と抗争して、勝利することなのか？　と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、例えば、私達人類が、私達人類の個体と集団を、本源的に、私達人類の諸般の意図と目的と動員から解放し、私達人類の生命体としての生物上の私達人類種に共通する必然的な自由であると想定し得る、想像と創造、に委ね、以って、私達人類の個体と集団の相互の理解による、活動と幸福と平和、を体現すること、を提案し要望します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、例えば、宇宙と太陽系のエネルギー系に由来する地球の自然、私達人類の忘却と痕跡としての存在であることにより私達人類の意図を断絶した遺跡、私達人類の意図の表象である人工、の夫々の具象の観察と考究と思索と再発見、調査、保存、回復、活用、形成、人工の可変、関係、連続、循環、永続、継承、を促進し、以って、私達人類の社会的共通資本とし、私達人類の、活動と幸福と平和、に貢献すること、を提案し要望します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類に関する危機の解決について、私達人類が、既に、着手しているか、私達人類が、直ちに、着手しなければならない、喫緊の課題、である、と仮定します。 〆

〔情報〕
○ 2021年（令和3年）2月20日（土曜日） 日本経済新聞 第28面 【読書】

『「共食」の社会史』 原田 信男著　　［連帯生む会食の変遷たどる］

（藤原書店・3600円）　はらだ・のぶお　49年生まれ。国士館大名誉教授、専門は日本生活文化史。著書に『江戸の料理史』（サントリー学芸賞）など。

自然界で弱い存在だった人間。連帯することで生き残るため、共食することを選ぶ。その共食を通して、日本史を描いた本である。　日本では、同じものを食べることで集団の連帯感を養ってきた。法的な手続きの際も、共食の場が設けられる。例えば室町時代の1394年、荘園領主と百姓の間で耕作面積と地主と耕作者を確認する大検注が行われた。その際に開く饗宴の費用は、領主側に属する地主が負担している。　共食を、収奪に悪用する権力者もいた。鎌倉時代、年貢と公事（雑税）の徴収に赴いた地頭は、滞在中の食事を全部百姓に負担させている。時代が進むにつれ、食事ではなく食費を出すように変化するものの、百姓の負担は続く。　豊臣秀吉が行った太閤検地では、国家が検地役人に食料を支給し接待を禁じている。現場の生産性を高めるためであると同時に、地方分権社会から中央集権時代へ、移行を告げるものでもあった。　仲間と連帯を強める共食にも歴史がある。室町時代、公家たちがもてなす側の負担が大きくならないよう、料理と酒を持ち寄る花見の会を開く。江戸時代になると、庶民にも広まる。主人が汁だけ用意する形になり、やがて主人が用意した鍋物に持ち寄った食材を投入する闇鍋へ発展する。　飲食店が成立した近世には、書画会、骨董会といった趣味の会合も開かれるようになる。神社仏閣への参詣、観劇などの客を当て込んだ飲食店や屋台も増える。　近代には、諸外国との貿易が始まり、農業中心だった社会が本格的に商業中心になって経済発展が進む。その結果、人々は土地から切り離されていく。会社勤めをする人たちは、家族とではなく仕事仲間と共食する場面が日常化する。そうした時代にちゃぶ台が生まれ、一家団欒という概念が広がっていく。戦争が繰り返されるようになると、一家団欒は国家体制を強化する基盤として、利用された。　社会を動かし支える共食文化は、時代が変わり形が変わっても続いていくが、利用しようとする権力者も繰り返し現れる。　コロナ下、感染拡大を防ぐため、最もダメージを受けているのが共食の場である。そうした中、大切な人と絆を深めるだけにとどまらない、共食の政治性を考えさせられるタイムリーな本である。　《評》 生活史研究家　阿古 真理

〔情報〕
○ 2021年（令和3年）2月20日（土曜日） 日本経済新聞 第29面 【読書】　　〚リーダーの本棚〛

長野県知事　阿部 守一氏　　［職業倫理に基づき行動を］

□ （写真） あべ・しゅいち　1960年生まれ。84年東大法卒、自治省（現在の総務省）入省。長野県副知事、総務省過疎対策室長などを経て2010年9月から現職。

――体格がしっかりしていて、一見すると押しが強い印象を受けるが内向的な性格だったという。――
　仕事柄、いろいろな方とお会いし、話をしますが、昔から人付き合いは苦手です。小中学校の友人の多くは「なんであいつが知事をやっているのか」と感じていると思う。自分の殻にこもって一人で本を読むのが好きだったし、本屋に行くのが趣味でした。　だからこそ、人がどういう時にどう行動するのか、何に影響されるのかなどといったことに関心がある。・・・・・　そういう時に、本棚から引っ張り出してめくるのが『権力に翻弄されないための48の法則』です。・・・・・　『人を動かす』も同じような内容ですが、これは人からプレゼントされた本です。・・・・・　――仕事をするうえで影響を受けたのが『社会的共通資本』であり、著者の宇沢弘文だった。――　宇沢先生とは私が長野県の副知事をしていた時に初めて直接お話ししました。当時の田中康夫知事が県の新しいビジョンを策定する方針を打ち出し、その専門委員会の座長を宇沢先生がなされた。先生の軽井沢にある別荘でみんなで合宿し、これからの長野県について話し合ったりしました。　社会的共通資本のひとつに医療や教育などの制度資本があるのですが、そうしたものは職業的専門家による職業的規律で運営されるべきだと宇沢先生は力説されていました。医療ならば医療関係者の倫理がある。それに基づいて行動しなければいけないし、行動できる社会をつくることが大事です。　長野県は総合計画の柱として「学びの県づくり」を掲げていますが、学校教育も教員のみなさんの職業的倫理に基づいて学校の自立を高めることが大切です。中央集権的、官僚的な統制ではなく、現場に近いところで判断する。まさに地方自治の考え方につながる概念だと思います。　『水素エコノミー』は今の化石燃料をもとにした社会が巨大な石油資本のもとでブラックボックス化している姿を描いています。単にエネルギーだけの問題ではなく、社会のあり方が問われているという文明論、社会論です。長野県は一昨年12月に全国の都道府県で初めて「気候非常事態宣言」を出しました。水素はどこにでも

あるエネルギー源なので、自律分散型の社会をつくることが、実は持続可能な社会に直結するわけです。
ーーテレビで有名な俳人、夏井いつきさんを「師匠」と呼ぶ。ーー　30歳代後半に愛媛県庁にいた時に、友人に誘われて夏井さんの家で何人かと一緒に句会をしていました。松山市は俳句文化が色濃く残る土地柄ですから。その時、師匠である夏井さんが私につけた俳号が「ガバナー」だった。そうしたら本当に知事になってしまったわけです。『俳諧大要』はその後、購入した本です。　私は劣等生でしたが、俳句をやって良かったなと思うのは物の見え方が変わったことです。俳句心をもって山を眺めると、木の生え方、葉の形、色合いまで意識する。研ぎ澄まされる部分があるのだと思います。　今は俳句を作ることはまったくありませんが、もう少し暇になったらまた作ってみたいですね。　（聞き手は編集委員　谷隆徳）

【私の読書遍歴】
《座右の書》
『権力に翻弄されないための48の法則』（上・下、ロバート・グリーン、ユースト・エルファーズ著、鈴木主税訳、角川文庫）　『社会的共通資本』（宇沢弘文、岩波新書）
《その他の愛読書など》
①『人を動かす』（D・カーネギー著、山口博訳、創元社）　②『役人学三原則』（末弘巌太郎著、岩波現代文庫）。「役人たらんとする者は縄張り根性の涵養（かんよう）に努むることを要す」などと、逆説的な役人論が書かれている。職員研修の時などに引用することがある。　③『ローマ人の物語　ユリウス・カエサル　ルビコン以前』（全3巻、塩野七生著、新潮文庫）　④『日本の論点』（大前研一著、プレジデント社）。年末年始に日本や世界の1年間を振り返るために毎年読んでいる。　⑤『水素エコノミー』（ジェレミー・リフキン著、柴田裕之訳、NHK出版）　⑥『俳諧大要』（正岡子規著、岩波新書）

〔情報〕
○ 2021年（令和3年）2月20日（土曜日）　日本経済新聞　第29面【読書】　《この一冊》

『特務』 リチャード・J・サミュエルズ著　　［近現代日本政治の死角 照射］

原題＝Special Duty （小谷賢訳、日本経済新聞出版・3000円）　▼著者は米マサチューセッツ工科大学フォードインターナショナル教授。11年、旭日重光章受章。

また、やられてしまった。近現代の日本政治史をめぐる死角を、外国人研究者に照射されてしまったのである。もとより、本書の著者が様々に参照し引用するように、多くの優れた日本人研究者が、これまでも日本のインテリジェンスをテーマにしてきた。しかし、戦前と戦後にわたって、しかも、非日本人にも理解可能な分析上の整理を施した上で、広く日本政治や国際関係と結びつけての分析は、稀有であろう。　サミュエルズ教授が提示する分析視角は、インテリジェンスの収集、分析、伝達、保全、秘密工作、監視の6項目であり、これに戦略環境の変化、技術革新、失敗の経験が掛け合わされる。そこから浮かび上がってくるのは、まず、宿疾とも言うべき「サイロ（格納庫）」、つまり、官僚機構の縄張り争いである。これは戦前・戦後を一貫しているが、やはり戦前には軍部の存在が大きく、戦後には外務省や警察、公安当局、自衛隊、そして、内閣情報調査室などのプレイヤーが錯綜している。さらに戦後には、インテリジェンスの対米依存とそれに対する不満という不協和音が重なる。インテリジェンスの歴史は、日米関係の縮図でもある。　こうした問題を克服すべく、戦後の日本は何度もインテリジェンス改革を試みてきた。敗戦から冷戦を経て「第二の敗戦」たる湾岸戦争までの46年間、そこから2001年の同時多発テロまでの10年間、さらに第二次安倍晋三内閣が動き出す13年までとそれ以降と、国際環境に応じて大きく時期区分しながら、本書は分析を進めていく。　冷戦期に中曽根康弘首相はスパイ防止法の導入に失敗し、冷戦後には安倍首相が国家安全保障会議の設置など様々な制度改革を実現した。首相の他にも、町村信孝氏のような有力政治家や谷内正太郎氏のような官僚がそれを支えた。また、ソ連のミグ25戦闘機函館空港強行着陸事件や韓国による金大中氏拉致事件、ソ連による大韓航空機撃墜事件、北朝鮮による日本人拉致問題など、戦後史上の大事件がインテリジェンスとの関連で解き明かされる。　今後の日本のインテリジェンスは日米協力の枠組みを維持するのか、自立を模索するのか、それとも対中依存に向かうのか。著者の問いかけは、日本の進路そのものへの問いでもある。　《評》 同志社大学教授　村田 晃嗣

〔情報〕
○ 2021年（令和3年）2月20日（土曜日） 日本経済新聞 第28面 【読書】 《半歩遅れの読書術》

『 日本の成長を明らかにする 世界経済史との比較で概観 』 磯田 道史

前回、高島正憲『経済成長の日本史』を紹介した。1000年の長さで日本の国内総生産（GDP）が推計され、その成長でみれば、日本が世界でも裕福であった期間は短い。むしろ古代中世はずっと「最貧国」であったとされる。奈良時代、日本の1人あたりGDPは、1990年時点の米ドルの購買力を基準にした国際ドル換算（以下同）で400ドル弱と見積もられている。 西暦1000年前後、1人当たりGDPが1000ドル近くあったのは中国（華南）ぐらい。宋代の中国は技術開発で製鉄量が増大。灌漑・施肥の高度な農業をやり、運河で流通を活発化。世界のトップを走った。当時、イラクが820ドル、エジプトやトルコが600ドル。日本は596ドル前後。宋の技術導入で最貧国からの脱出を図るが、気候の寒冷化等で足踏みしていた。 アンガス・マディソン『世界経済史概観』（政治経済研究所監訳、岩波書店）は、こうした推計を地球全体で行い1000年単位の経済力の盛衰を追った本だ。西暦1500年頃、日本は1人あたりGDPが500ドル。当時、中国と朝鮮が600ドル。インドは550ドル。インドネシアは565ドルの推計。この戦国時代、日本はまだ周辺諸国より貧しい。しかし中国は人口増加に生産量が追い付かず。既に日本は中国の背中をとらえていた。 江戸中期、日本は豊かさでこれらアジア諸国に並び、1820年頃、一気に抜き去った。そうアンガスは推計している。その理由の説明は難しい。私見を述べれば、1700年頃、日本の耕地開発は当時の技術限界に達した。農民まで家意識が浸透。みな勤勉に働き、字を覚え、稼いで家を興そうとし始めた。だが、草刈り場や灌漑などムラの資源は有限だ。ムラの百姓株は何軒までと家数が制限され、株が得られねば分家できず、独身のまま他家や都市で長期に奉公。結果、人口が抑制された。
さらに税制が影響した。年貢は通常、定額となり、二毛作の裏作は無税。兼業の手工業も無税。商業も税が軽い。人口抑制下、勤勉・高識字率の労働力が税負担の軽い手工業・商業にまい進すれば、所得水準が一気に上がるのは当然だ。GDPも増えた。 ペリー来航前の1820年、日本のGDPは米国より大きく、約1．65倍あった。人口も米国の約3．1倍。これが教科書にない19世紀日本が独立を保てた要因だ。 （歴史家）

◇ 『 遺跡と私達人類の関係性 』 2021年（令和3年）2月20日 土曜日

私達当会は、遺跡について、私達人類が、「これは遺跡だね、これはこれで、このままで、いいじゃないか」と端的に、そう思う、又は、そう思えるかが、遺跡と私達人類の関係性に於いて、最終的な規定を形成する、と仮定します。

私達当会は、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、私達人類の人工を構成するに於いて、人工が、その私達人類の意図と私達人類とっての機能に由来して可変的である処、私達人類は、遺跡の形態と存在に於いて、遺跡を一度破壊すれば、本質的に、即ち、遺跡について、遺跡の具象としての回復は不可能である、と仮定します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、私達人類の人工に関する、私達人類の意図と私達人類にとっての機能に由来する可変性に於いて、遺跡に対し、“遺跡に直接的、間接的被害を及ぼすような意図的措置をとらないこと”、“一部でも損壊や滅失によって失われること”にならない、行為と措置を選択し、遺跡を、私達人類の後世の私達人類の個体の鑑賞と解釈に、永続的に委ねること、即ち、継承すること、その為の措置をとること、を提案し要望します。

私達当会は、皆様に、私達人類について、私達人類の世界にあって、私達人類が、私達人類の人工に関する可変性に於いて、遺跡を破壊し、損壊し、滅失することを回避し、之を、保存し、活用し、即ち、私達人類の日常の生活の中での機能を形成し獲得し、受容し、事象を継承する、文化、文明、エスニシティ、風土、私達人類の個体とその集団としての社会を形成すること、を提案し要望します。 ✗

◇『結語』　2021年(令和3年)2月20日 土曜日

私達当会は、皆様に、遺跡、又、身近な遺跡、について、私達当会が、本紙、本紙の添付資料、並びに、私達当会の為す他の提案と要望に於いて、仮定して説明する内容、態様、私達人類にとっての機能を包摂する、諸般の関係性に於ける、遺跡への考察と再発見、並びに、遺跡の調査と保存と活用、継承、を、私達人類が、実現すること、を提案し要望します。

私達当会は、皆様に、“遺跡、私達人類の、歴史、エスニシティ、伝統、倫理、風土、記憶、私達当会が提案し要望する宇宙主義並びに宇宙主義経済学、私達人類の世界の基盤となる様々な個別の標準とその関係性、数理経済学者宇澤弘文氏が提唱する社会的共通資本”、について、考察し、思索し、再発見し、形成し、調査し、保存し、活用し、継承すること、を提案し要望します。　〆

〔情報〕
○ 2021年（令和3年）1月23日（土曜日） 日本経済新聞 第40面 【文化】 〖私の履歴書〗

『奇想の系譜』 辻 惟雄 22 江戸の美術史 定説破る 異端の画家は「主流の中の前衛」

岩佐又兵衛、曽我蕭白、伊藤若冲――。文化財研究所で狩野元信の研究を続けながら、江戸絵画の個性的な絵師たちの作品と次々に巡り合って、私の中で江戸絵画の美術史について従来の定説を打ち破る独自の見方が芽生え始めていた。 ・・・・・ 異端の画家たちは数多くいる。彼らは傍流ではない。私は「主流の中の前衛なんだ」という結論に至った。独特のエキセントリックな画風を持ち、腕の立つ画家の群像にさらに興味が募っていった。遠い江戸時代の闇の中から「俺もいるぞ」と未知の絵師たちが呼びかけてくるような気がしていた。 ・・・・・ 1968年の初めごろだった。美術関係者に定評のある雑誌「美術手帳」の編集者、森清涼子さんから江戸の前衛画家について連載を依頼された。渡りに船だ。そのころ同誌の編集は前衛美術をかなり重視し始めていた。 これまでの研究や考察をまとめる絶好の機会だ。「やろう」と決めた。この年の7月号から12月号に6回連載した。又兵衛が2回、蕭白、若冲、狩野山雪、歌川国芳が1回ずつである。「奇想の系譜」の誕生だった。 ・・・・・ ちなみに「奇想の系譜」の「奇想」は鈴木先生が美術誌「萌春」に掲載された「国芳の奇想」から頂戴した。 連載は好評で翌69年に美術出版社から単行本として出版した際、長沢芦雪を書き加えた。芦雪はすでに研究されていて、遠慮した。やはりおもしろい。奇想天外な画風と言えば葛飾北斎だが、この本に加えるには準備不足だと感じて断念した。 期待していた以上に、本の反響はかなりあった。・・・・・東大の西洋美術史の助教授だった高階秀爾先生が、匿名で朝日新聞の書評で褒めてくださったのがとてもうれしかった。
文化財研究所の在籍は10年になった。充実した歳月だった。39歳。不惑の年が近づき大きな転機が来た。
（美術史家）

□ （写真）「奇想の系譜」（美術出版社）

○ 2021年（令和3年）1月26日（火曜日） 日本経済新聞 第40面 【文化】 〖私の履歴書〗

『母校で』 辻 惟雄 25 東大に戻り、北鎌倉に家 日本美術、根底は「遊び」と見いだす

母校から文学部の教授にと声がかかったのが80年1月。・・・・・ 仙台にいたころ模索し続けた「日本美術とは何だろう」というテーマにようやく答えをひとつ見いだした。きっかけになったのはオランダの歴史家、ヨハン・ホイジンガの名著「ホモ・ルーデンス」の一節だった。 「日本人の遊びについての考え方を、もっと詳しく規定していくと、おそらく今ここでなしうるよりもさらに深く、日本文化の神髄まで考察を進めることができるであろう」 目からウロコが落ちた。「遊びなんだ」とひらめいた。まじめさや厳しさといったイメージでくくられることが多い日本文化の根底には遊びの精神がある。奇想の絵師たちの作品にも遊び心が満ちている。江戸絵画のみならず日本美術全体を見渡しても遊びは重要なキーワードだ。 研究と考察を深めていくと遊びから派生する笑い、飾り、見立て（パロディー）、風流、洒脱など、それまでの自分なりの美術史研究で漠然と心に浮かんでいた言葉が俄然、精彩を帯びて立ち上ってきた。 中国をはじめアジアの美術にも共通点がある。欧米の美術品にも考察の視野を広げたい。まさに大判小判がざくざくである。本の執筆や展覧会の企画・監修など私の後半生の仕事の柱になった。 ・・・・・ （美術史家）

□ （写真） 日文研時代、61歳 （1993年）

○ 2021年（令和3年）1月28日（水曜日） 日本経済新聞 第44面 【文化】 〖私の履歴書〗

『千葉市美術館』 辻 惟雄 27 館長に就任、多彩な企画 江戸絵画中心、現代アートも柱に

国際日本文化研究センター（日文研）の研究会とは、所内の研究者が外部の学者も招いて作る一種の学術サロンで、多様な主題のものが同時進行していた。いわば知的サロンだ。 ・・・・・ 私は「かざり研究会」を提案した。「かざり」をキーワードにし日本生活文化史を辿ると、美術品の枠を離れて、祭りの折の「つくりもの」をはじめ、奇抜で多彩なデザインが次々と浮かび上がる。このアイデアに興味を持った人たちが集まり、打ち合わせの飲み会をした。 その折、誰かが、梅原猛所長の興味ある奇人ぶりに触れたのがきっかけで話がそちらにも盛り上がり、あげくは「奇人並びにかざり研究会」という抱き合わせ会の発足となった。「奇人」と「かざり」を交互に発表するかたちで、会は結構面白いものになった。 「霊柩車の誕生」「京都ぎらい」など異色の著作で名を挙

げた井上章一さん(現日文研所長)が、連絡役を務められ、遊軍として参加した文化人類学者の山口昌男さんが、明治文化の中で「敗者」となった奇人たちのプロフィールを熱を込めて紹介される。このように、自由で楽しい研究会は前にも後にも経験したことがない。　日文研の3年半は単身赴任。伸び伸びと研究した。フィールドワークで沖縄に行ったりもして、美術史という狭い専門領域にいた私の研究の幅がずいぶん広がった。　そんな折、「新設の千葉市美術館に館長として来てほしい」との誘いをいただいた。日文研に未練はあったが、美術館の館長のポストの魅力には抗しがたい。オープンは1995年11月。・・・・・　99年8月に開いた「絵巻物ーアニメの源流」展も話題を集めた。アニメの元祖は平安時代の12世紀前半に描かれた「伴大納言絵詞」「信貴山縁起」「鳥獣戯画」などの絵巻にあるとの問題意識でアプローチした。これは館長室にふらっと現れた大学時代の旧友で、「スタジオジブリ」の監督、高畑勲さんのアイデアだ。これには大いに刺激を受けた。　(美術史家)

□ (写真) 千葉市美術館の館長室で職務に励む筆者

○ 2021年(令和3年)1月29日(金曜日) 日本経済新聞 第40面 【文化】　〖私の履歴書〗

『 多摩美術大 』　辻 惟雄　28　好奇心、学長引き受ける　活気ある雰囲気、研究も脂乗る

・・・・・だが推されて多摩美術大学の学長兼教授に就いた。「面白そうだ」と好奇心がわいて引き受けた。　・・・・・　「活気のある集団だな」。それが多摩美の第一印象だった。・・・・・　「あそび」や「かざり」など日本美術の独創的な面白さを探求して、その新しさやユニークさを再発見する研究にも脂が乗ってきていた。興味を抱いてくれる若い研究者も次第に増えて、展覧会やワークショップ、講演などの依頼も入り、忙しくなっていた。米国・ニューヨークのジャパン・ソサエティーのアレキサンダー・モンロー館長の依頼で「KAZARI(かざり)」展を開くことが決まった。江戸絵画のファンが多い米欧でも「かざり」の魅力に興味を持つ人たちが増えつつあった。開催したのは2002年。準備も含め1週間ほど出張した。物見遊山に出かけたわけではないので非難される筋合いはない。しかし時期が悪かった。学長選が迫っていた。　・・・・・　実をいうと東大出版会から「日本美術の歴史」と題した本の出版を頼まれていた。縄文土器から現代のマンガ、アニメまで各分野を総なめし、読みやすく俯瞰した日本美術史の入門書である。図版300枚を使ったオールカラー版。講義ノートとプリントをフル活用した。　・・・・・　(美術史家)

□ (写真) ジョー・プライス氏と (ニューヨーク、2002年、「KAZARI」展オープンの折)

○ 2021年(令和3年)1月31日(日曜日) 日本経済新聞 第28面 【文化】　〖私の履歴書〗

『 合縁奇縁 』　辻 惟雄　30　「かざり」拾われ育つよう　老骨にむち打って応援

2020年6月、88歳を迎えた。おかげさまで、という感謝の気持ちと、なにがめでたいのか、とが入り交じった複雑な心境である。実は私の自伝的な本は「奇想の発見ーある美術史家の回想」と題して出版済みだ。なので今回、さらに「私の履歴書」を執筆するのはどうかとも思ったが、書き残したエピソードも多々あることだろうと思いなおし、再びお目を汚すことになった。　・・・・・江戸の美術史研究に新風を吹き込んだとの評価をいただいている「奇想の系譜」の著者として、今も人気の画家、伊藤若冲を世に広めた男として少しは知られるようになった。　・・・・・　「奇想の系譜」で私が紹介した6人の画家たちは当時ほとんど忘れられた存在だったのが、今や江戸画壇のスター扱いされている。　「奇想の系譜」はそんな思い入れのある著作なのである。・・・・・　・・・・・「かざり」「あそび」「アニミズム」など日本美術や日本人の美意識をひもとく手掛かりになる新しいアイデアを見つけたり、「日本美術の歴史」のような大風呂敷の著述をものしたりしてきた。　・・・・・　・・・・・アイデアだけを残した「かざり」などを誰か拾って大きく育ててくれないだろうか。老骨にむち打って及ばずながら応援したいと思っている。　(美術史家)　＝おわり　　あすからホリプロ創業者堀威夫氏　　〆

1 長崎新聞 2020年（令和2年）12月11日 金曜日
昭和21年12月15日第3種郵便物認可 第26505号 （日刊）

出るか 長崎奉行所遺構 県庁跡地西側発掘開始

江戸時代に長崎奉行所が置かれていた長崎市江戸町の県庁跡地で10日、江戸前期の遺物などが昨年見つかった敷地西側の詳細な発掘調査が始まり、現場が報道陣に公開された
（坂本裕介撮影）【記事は22面】

12月11日（金）赤口
（旧暦10月27日）

総合案内 (095)844・2111
報道部 (095)846・9240
地域ソリューション部 (095)844・4874
事業部 (095)844・5261
販売部 (095)844・5063
開発センター (095)844・7793
佐世保編集 (0956)22・9145

長崎新聞

発行所
長崎新聞社
長崎市茂里町3-1 〒852-8601
©長崎新聞社2020

TOYOTA Rent a Car
話題の新型SUV、ヤリスクロス導入!!

トヨタレンタカー
長崎でのご予約は
0120-85-0100

紙面編集・福見千成
長崎新聞
2020年（令和2年）12月11日 金曜日 社会 22

県庁跡地の西側で始まった発掘調査で、手作業で土を削り取っていく作業員
＝長崎市（坂本裕介撮影）

奉行所当時の地層に注目

県庁跡地 西側詳細発掘

県教委 来月下旬まで調査

江戸時代に長崎奉行所西役所が置かれていた県庁跡地（長崎市江戸町）の埋蔵文化財調査で、県教委は10日、江戸前期の遺物などが昨年見つかった敷地西側の詳細な発掘に着手した。来年1月下旬まで作業を続ける。一帯は専門家が「長崎奉行所の遺構が良好な状態で残っている」と指摘した場所で、結果が注目される。

同跡地には16世紀の長崎開港後に国内キリスト教の拠点「岬の教会」が建つなど、歴史的に重要な施設が立地。跡地活用に向けた昨年度の調査で、西側からは古い瓦や漆喰、陶磁器のかけらを含んだ17世紀前半の地層が出土。当時視察した専門家は「下にさらに古い時代の層が残っている可能性がある」としていた。

県教委学芸文化課によると、今回は17世紀前半の地層が見つかった場所について、範囲を周辺に拡大して掘り下げ、遺物や遺構がないか確かめる。隣接する江戸町公園との間にある石垣の裏側なども掘り進め、昔の痕跡を調べる。調査面積は1392平方㍍。

初日は現場が報道陣に公開され、作業員らが手作業で丁寧に土を削り取っていった。同課の濵村一成主任文化財保護主事は「長崎奉行所があった当時の地層であり、調査で関連する遺物や遺構が確認できれば」と話した。

同跡地では当初、長崎市の「文化芸術ホール」建設が計画されていたが、昨年度の調査を受けて市が断念。本年度の調査ではこれまでに、敷地南側で大規模な石垣遺構などが出土している。（山口恭祐）

県庁跡地調査

1600年代の大型瓦片など出土

江戸期以前 建物遺構見つからず

江戸時代に長崎奉行所があった県庁跡地（長崎市江戸町）で行われている埋蔵文化財調査で、当時の建物で使われたとみられる1600年代製の大型の瓦の破片などが見つかったことが、県教委への取材で18日までに分かった。一方、今回の調査で発見が期待された江戸期以前の建物の遺構は見つからなかった。

県庁跡地の調査で見つかった丸い瓦の破片など＝長崎市江戸町

同跡地は16世紀の長崎開港後、国内キリスト教の拠点「岬の教会」が置かれ、江戸期の禁教令後に奉行所が建つなど、歴史的に重要施設が立地。2019年度の試掘調査で古い瓦や陶磁器片などを含んだ地層が出土した敷地西側で、県教委が昨年12月に本格的な調査に着手。これまでに、ほぼ作業を終えた。

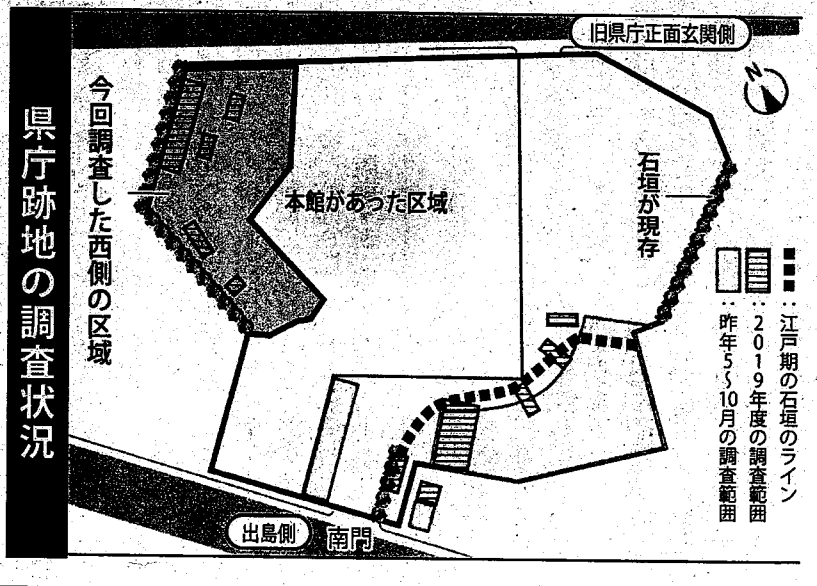
県教委学芸文化課によると、1392平方㍍の範囲を発掘。直径1㍍ほどの井戸跡や明治期の構造物、盛り土などが見つかった。

井戸跡の中からは大量の瓦片、陶磁器片などが出土。瓦片は、長崎奉行所立山役所跡（同市立山1丁目）など、県内外で発掘例がある直径15㌢ほどの丸い瓦のかけらなど。うち一つには小さな「大」の文字が刻まれており、過去に玖島城跡（大村市）や鹿児島県などで見つかった例がある。いずれも、奉行所の建物で使われた可能性がある。

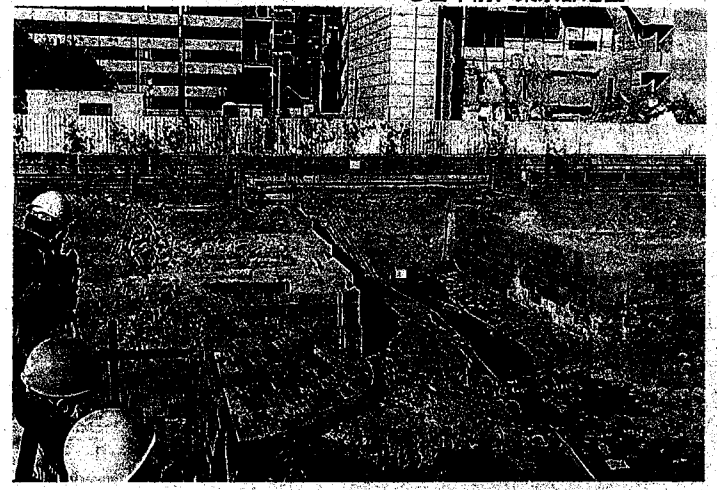
一帯は19年度の調査で17世紀前半の土や遺物が見つかり、当時の地層とみられていたが、範囲を広げて掘り下げたところ、西寄りの広範囲が明治初め頃に掘り返して造成されていたことが判明。これ以前の地層は残っていなかった。

同跡地は当初、長崎市の「文化芸術ホール」建設が計画されていたが、19年度の調査を受け市が建設を断念。県教委は本年度も調査を続け、昨年5～10月の敷地南側の発掘では大規模な石垣遺構などが出土した。

県教委は今後、調査結果の概要をまとめ、県は跡地活用策の検討を本格化させる見通し。同課の濵村一成主任文化財保護主事は「建物の遺構は見つからなかったが詳細な調査ができた。結果を跡地活用に生かせるよう報告をまとめたい」と話している。（山口恭祐）



報道陣に公開された「高輪築堤」の遺構
＝8日午前、東京都港区



日本初の鉄道遺構公開

東京・高輪築堤、JR東

JR東日本は8日、1872年に日本で初めて鉄道が開業する際に造られ、東京都港区の高輪ゲートウェイ駅周辺で出土した「高輪築堤（ちくてい）」の遺構を報道陣に公開した。

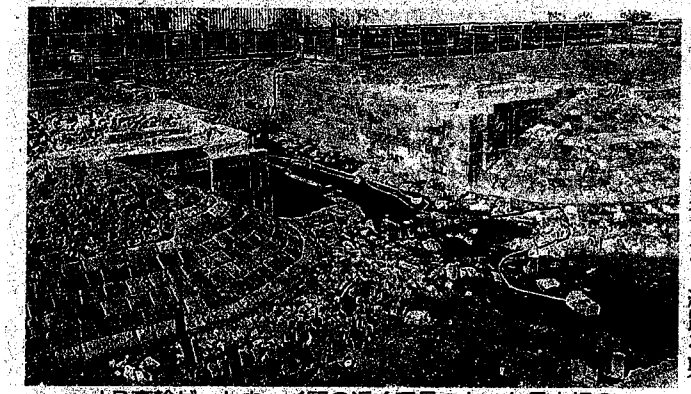
JR東や港区教育委員会によると、築堤は1870年着工で、現在の田町駅付近から品川駅付近の2・7キロの間に造られた。幅は6・4メートルで、当時の錦絵には海上の築堤を走る蒸気機関車が描かれている。昨年7月、駅周辺の再開発工事中に発見。1キロ余りにわたって断続的に確認され、調査を進めている。

公開された遺構は、斜面の下に石が整然と並んでいた。線路の下に船を通すための水路の跡もきれいに残り、付近は波消しのための材木が無数に突き出していた。

日本初の鉄道、遺構出土

高輪新駅 再開発で

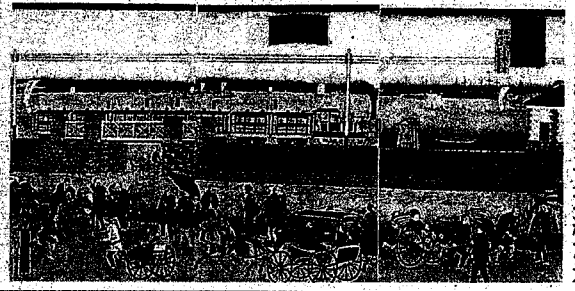
東京



JR高輪ゲートウェイ駅の近くで見つかった日本初の鉄道の遺構「高輪築堤」の一部
＝11月28日、東京都港区（JR東日本提供）

JR東日本は2日、1872年に日本で初めて鉄道が開業する際に造られた「高輪築堤」の遺構が、東京都港区の高輪ゲートウェイ駅の近くで見つかったと発表した。線路を敷くために浅瀬に盛り土をして石垣で固めたもので、駅周辺の再開発工事で出土した。

JR東によると、のり面に積まれた四角い石が整然と並んでいる。昨年11月まで山手線と京浜東北線が走っていた線路跡から、1キロ余りにわたり断続的に確認された。



明治時代の錦絵「東京品川海辺蒸気車鉄道之真景」に描かれた高輪築堤（港区立郷土歴史館提供）

港区教育委員会によると、高輪築堤は1870年着工で、現在の田町駅付近から品川駅付近の約2・7キロにわたって造られた。幅は約6・4メートルで、当時の錦絵には海上の築堤を走る蒸気機関車が描かれている。明治末期から昭和初期にかけての埋め立て工事で撤去されたと考えられていた。

JR東は、港区教委や鉄道博物館（さいたま市）と共に調査し、一部の現地保存や移築、一般向け見学会の開催を検討している。

港区教委の川上悠介学芸員は「当時の土木技術の水準が分かる貴重な遺構で、一大発見だ」と話している。

Ⅴ、添付資料

養生所/(長崎)医学校等遺跡の保存・保護・整備・公開に関する陳情書 XⅧ (旧長崎市立佐古小学校地とその外周道路を中核として)
長崎奉行所西役所等遺跡群の調査・保存・活用・公開・整備に関する陳情書 Ⅸ (サン・パウロ教会等跡/長崎奉行所西役所跡/長崎県庁跡・大波止跡・築地跡等)

2020年(令和2年)11月24日 火曜日 長崎市議会議長 井上重久 様 / 2020年(令和2年)12月2日 水曜日 長崎県議会議長 瀬川光之 様

養生所/(長崎)医学校等遺跡の保存・保護・整備・公開に関する要望書 Ⅷ (旧長崎市立佐古小学校地とその外周道路を中核として)
長崎奉行所西役所等遺跡群の調査・保存・活用・公開・整備に関する要望書 Ⅸ (サン・パウロ教会等跡/長崎奉行所西役所跡/長崎県庁跡・大波止跡・築地跡等)

2020年(令和2年)11月27日 金曜日

長崎県知事 中村法道 様 長崎県教育委員会 教育長 池松誠二 様 長崎県 企画部長 柿本敏晶 様 長崎県 地域振興部長 浦 真樹 様 長崎県 文化観光国際部長 中﨑謙司 様 長崎県 土木部長 奥田秀樹 様 長崎県 環境部長 宮﨑浩善 様 長崎県文化財保護審議会長 立平 進 様

長崎市長 田上富久 様 長崎市教育委員会 教育長 橋田慶信 様 長崎市教育委員会 教育総務部長 前田孝志 様 長崎市 企画財政部長 片岡研之 様 長崎市 文化観光部長 股張一男 様 長崎市 まちづくり部長 片江伸一郎 様 長崎市 土木部長 松浦文昭 様 長崎市 中央総合事務所長 大串昌之 様 長崎市 原爆被爆対策部長 中川正仁 様 長崎市 理材部長 小田 徹 様 長崎市 環境部長 宮﨑忠彦 様 長崎市 秘書広報部長 原田宏子様 長崎市文化財審議会 下川達彌 様

第一部 長崎地域の遺跡、並びに、遺跡 (2020年(令和2年)11月 初出)

Ⅰ."遺跡についてXII" (2020年(令和2年)11月17日 火曜日) Ⅱ.[角川武蔵野ミュージアム] (2020年(令和2年)11月16日 月曜日) Ⅲ.『遺跡に於ける遺跡に関する遺跡の空間としての彫琢』 (2020年(令和2年)9月15日 火曜日) Ⅳ.『遺跡に於ける遺跡に関する遺跡の空間としての彫琢』(資料編) (2020年(令和2年)9月15日 火曜日) Ⅴ.『私達 人類、遺跡の本源的価値、遺跡の存在、機能、社会的共通資本』 (2020年(令和2年)10月28日 水曜日) Ⅵ.『私達 人類の世界の動向、国力、国土、遺跡、漁港、田園、牧場、森林』 (2020年(令和2年)10月28日 水曜日) Ⅶ.『株式会社 三菱総合研究所による 県庁舎跡地整備基本構想検討報告書』 (2020年(令和2年)10月28日 水曜日) Ⅷ.『長崎奉行所西役所等遺跡群遺跡の保存と活用への提案と要望 2020.10』 (2020年(令和2年)10月28日 水曜日) Ⅸ.『長崎核爆弾被爆遺跡群遺跡への提案と要望』 (2020年(令和2年)10月28日 水曜日) Ⅹ.『私達 人類の存在と行為の正当性』 (2020年(令和2年)9月3日 木曜日) ⅩⅠ.『文化財的概念の近代化、遺跡と遺構と遺物、私達 人類の現代の活動』 (2020年(令和2年)9月19日 土曜日) ⅩⅡ.『私達 現生人類の世界、日本地域、長崎地域、遺跡、文化財』 (2020年(令和2年)9月30日 水曜日 改訂1版:2020年(令和2年)11月27日 金曜日) ⅩⅢ.『書籍『長崎史の実像』2013年10月30日 著者:外山幹夫 より』 (2020年(令和2年)9月30日 水曜日) ⅩⅣ.『遺跡の遺跡たる事象、市民生活の日常と心、観光やリゾート、その他の開発等、都市長崎遺跡』 (2020年(令和2年)10月7日 水曜日) ⅩⅤ.『人類と遺跡 ー私達 人類の想像と知性より一』 (2020年(令和2年)10月15日 木曜日) ⅩⅥ.『歴史上価値並びに学術上価値等、視覚、遺跡の実相、遺跡の保存と活用』 (2020年(令和2年)10月28日 水曜日)

第二部 長崎地域と遺跡 (2020年(令和2年)9月 初出)

Ⅰ."遺跡についてXI" (2020年(令和元年)8月4日 火曜日) Ⅱ.『長崎地域の遺跡と歴史と社会』 (2020年(令和2年)8月4日 火曜日) Ⅲ.『人類の世界と被爆人:ひばくびと:の世界』 (2020年(令和2年)8月7日 金曜日) Ⅳ.『遺跡の形態と長崎の核爆弾被爆の遺跡』 (2020年(令和2年)8月9日 日曜日) Ⅴ.『人類と人類の創造、並びに、記憶たる事象、遺跡、人類の存在』 (2020年(令和2年)8月11日 火曜日) Ⅵ.『人類の行為たる遺跡と歴史の活用』 (2020年(令和2年)8月11日 火曜日) Ⅶ.『私達 人類の文化財的事象の形態、在り方』 (2020年(令和2年)8月16日 日曜日) Ⅷ.【私達 人類の開発と遺跡』 (2020年(令和2年)7月23日 木曜日) Ⅸ.『私達 人類にとっての記憶並びに記録、又、人類の対する交感の体系』 (2020年(令和2年)8月17日 月曜日) Ⅹ.『2020年以降の長崎地域の都市計画』 (2020年(令和2年)8月18日 火曜日) XI.『私達 人類の恣意、そして遺跡』 (2020年(令和2年)9月26日 水曜日)

第三部 長崎県文化財保存活用大綱策定へのパブリック・コメント (2020年(令和2年)9月 初出)

Ⅰ.『長崎県文化財保存活用大綱策定へのパブリック・コメント』 (2020年(令和2年)7月31日 金曜日) Ⅱ.『私達 人類のパラダイム・シフト』 (2020年(令和2年)6月24日 水曜日) Ⅲ.『遺跡に関するMEMORANDUM』 (2020年(令和2年)7月4日 土曜日 改訂1:2020年(令和2年)8月4日 火曜日) Ⅳ.『2020年(令和2年)2月25日以降の養生所/(長崎)医学校等遺跡』((2020年(令和2年)7月5日 日曜日) Ⅴ.『長崎地域の近代現代の遺跡』 (2020年(令和2年)7月9日 木曜日) Ⅵ.『長崎地域の核爆弾被爆遺跡』 (2020年(令和2年)7月24日 金曜日)

第四部 遺跡へ (2020年(令和2年)9月 初出)

Ⅰ.『展示と存在、概念と想念、情報と情景、取得と到達、読解と包摂、巡礼、観光、旅、遺跡』 (2020年(令和2年)6月4日 木曜日) Ⅱ.『「情報」と「情景」』 (2020年(令和2年)6月4日 木曜日) Ⅲ.『長崎地域に於ける高層建築とその他の開発について』 (2020年(令和2年)6月10日 水曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭 改訂1版:2020年(令和2年)8月18日 火曜日)

第五部 原遺跡計画、並びに、否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成 (2020年(令和2年)6月 初出)

Ⅰ.原遺跡計画 Ⅱ.否定され得る人類としての人類の在り方を顕現する人類の活動の空間の形成 一.ラスコー洞窟 二.情報 三.考察、並びに、提案と要望

第六部 遺跡について (2020年(令和2年)2月 初出)

第七部 遺跡 (2019年(令和元年)12月 初出)

Ⅰ.遺跡 Ⅱ.遺跡と風土と文明、又、私達 人類の公共と私達 人類の選択、又人類の分断 Ⅲ.遺跡、その存在の性格と関連事象について Ⅳ.遺跡たる事象 Ⅴ.日本地域について Ⅵ.長崎地域とその遺跡について Ⅶ.私達 当会より、皆様への、提案と要望について Ⅷ.長崎地域の遺跡への提案と要望

第八部 長崎地域の特定の個別の遺跡群について (2019年(令和元年)12月 初出)

Ⅰ.長崎地域の浦上地区遺跡群について (※2020年(令和2年)2月 初出) Ⅱ.長崎奉行所西役所等遺跡群の調査と活用について (※2020年(令和2年)6月 改訂) Ⅲ.長崎地域の桜町地区遺跡群について (※2020年(令和2年)2月 初出) Ⅳ.養生所/(長崎)医学校等遺跡("佐古の丘の地形"、"中核区域"、"運用区域"、"関連区域") について (※2020年(令和2年)6月 改訂)

Ⅴ.『長崎市歴史的風致維持向上計画』並びに『国土交通省長崎港松が枝埠頭岸壁2バース化』並びに『長崎県松が枝地区再開発構想 ～港湾整備と一体となったまちづくり～』について (※2020年(令和2年)6月 初出)

第九部 その他 関連する事象について (2019年(令和元年)12月 初出 ※2020年(令和2年)9月 追記 12.(長崎)医学校等正門東翼石垣等石垣群について を追記)

第十部 関連する資料 (2019年(令和元年)12月 初出 適宜 改訂)

Ⅰ.参考資料 1.『遺跡に関する提案と要望のお届けについて』 2020年(令和2年)3月11日 水曜日 長崎市 教育委員会 教育長 橋田慶信 様 長崎市 教育委員会 教育総務部長 前田孝志 様 長崎市 教育委員会 教育総務部 施設課長 西原政彦 様 長崎市 文化観光部長 股張一男 様 長崎市 文化観光部 文化財課長 大賀史郎 様 長崎市 企画財政部長 片岡研之 様 長崎市 企画財政部 都市経営室長 岩永 浩 様 長崎市 企画財政部 長崎創生推進室長 山田尚登 様 長崎市 企画財政部 大型事業推進室長 赤倉史明 様 長崎市 まちづくり部長 片江伸一郎 様 長崎市 土木部長 吉田安秀 様 長崎市 中央総合事務所長 大串昌之 様 長崎市 理材部長 小田 徹 様 長崎市 環境部長 宮崎忠彦 様 長崎市 原爆被爆対策部長 中川正仁 様 長崎市 秘書広報部長 原田宏子様 長崎市議会議長 佐藤正洋 様 長崎市 文化財審議会 会長 下川達彌 様 養生所を考える会 代表 池知和恭 (『(長崎)医学校等正門両翼石垣等石垣群 並びに、旧長崎市立佐古小学校北西門前扇型石段に関する提案と要望』 2020年(令和2年)3月11日 水曜日 養生所を考える会 代表 池知和恭)